



第7回

# チームケア学会

teamcare Society 2022

「人生100年生きるためのリテラシー」  
ケアの基本、より自由になるために  
9月13日(火)・14日(水)



LIFE

PLAN

## 1日目

2022年9月13日(火) 9:30 ~ 17:00

・事例95演題

## 2日目

2022年9月14日(水) 10:00 ~ 12:30

・シンポジウム

「ケアプランの今日的課題と将来展望」

～自分らしさを求めるために～

一般社団法人チームケア学会

一般財団法人愛生会 多摩成人病研究所

## 目 次

学会長ご挨拶	P2
学会長ご紹介	P4
インフォメーション	P5
第1日目 プログラム	P7
研究発表会 抄録集	P9
全演題一覧 タイムテーブル	P10
ROOM 1 抄録	P11
ROOM 2 抄録	P29
ROOM 3 抄録	P47
ROOM 4 抄録	P65
ROOM 5 抄録	P83
ROOM 6 抄録	P101
第2日目 プログラム	P119
シンポジウム	
ケアプランの今日的課題と将来展望	
～自分らしさを求めるために～	P120
パネリストメモページ	P122
あとがき	P127
チームケア学会運営スタッフ	P128

## 会長挨拶

チームケア学会の全国発表大会の開催は、今年で7回目となります。これも、長引くコロナ禍のなかで創意工夫を重ねながら寄り添うケアを鋭意実践されている会員の皆様の熱意とご尽力の賜物と感謝いたしております。

チームケア学会は、発足時より「100年生きるために自分らしく（その方らしく）生き抜くために、生きる当事者も含めたチームケアのメンバーは何を考え、何をすべきかを多面的な観点から実践し、その研究を行ってきています。

第4回大会から、「人生100年を生きるための「リテラシー」」をメインテーマに据えています。「リテラシー」とは「ある分野における知識や機器を理解し、活用できるようになること」ということを意味しています。これを、チームケアの領域で考えると、長生きすることの結果を予測し、将来のリスクを低減するために、どのようなリテラシーが必要であるかについて考えていくことであると思います。つまり、高齢になると言うことはあらゆる意味で機能（自己資源）が低下していくということであり、それに伴うリスクを認識する必要があります。そのリスクを低減するためには、健康などについてのリテラシーを高め、時として、チームケアのメンバーは、楽を避けて（自らを甘やかさない）、自らに負荷をかける（自己規律と忍耐）ことも必要になるかと思えます。このように、「人生100年を生きるためのリテラシー」というテーマは、生きる当事者も含めて、チームケアという観点から多面的に議論を行うべき奥の深いテーマであると思います。

第4回では、サブテーマをもっとも日常的な「食べること」とし、食と口腔ケアについての議論をおこないました。第5回全国大会は、新型コロナウイルス感染症という突発的な状況を鑑み、大会テーマを急遽「新型コロナウイルス感染対応の情報共有」とし、大会の主目的をコロナ感染のリスクに対処する為の有用な情報交換に置き、感染ケアに関する様々な事例を発表・共有する場としました。

昨年の第6回大会では、メインテーマを「人生100年を生きるためのリテラシー」に戻し、サブテーマを「身体と心のメンテナンス」としました。高齢化というプロセスの中で、身体と心のバランスを如何に維持し、健やかな生活を過ごせる、当事者としての自己認識としての「健康寿命」を如何に伸ばせるかについて議論を行いました。「身体と心のメンテナンス」で言うメンテナンスとは、避けられない基幹機能の低下を前提にして、いかに機能のバランスを維持させ続けるかを考え、実行することです。それは古い車を動かし続けることに似ています。低下していく機能のバランス維持には、薬も医療・介護も重要ですが、生きる当事者を含めてチームケアに関わるメンバーが「身体と心のメンテナンス」を意識し、それを実践する意志を強く持つことが重要です。

今年度も、引き続き「人生100年生きるためのリテラシー」をメインテーマとし、サブテーマを「ケアの基本、より自由になるために」としています。繰り返しになりますが、高齢化と

は、基幹機能の避けられない低下であり、それを前提に「より自由になるために」を語ることは、一見、矛盾のように思われるかもしれませんが、しかし、これは、ある意味でのパラドクス（逆説）であり、より不自由になるので、より日常生活における小さな判断や行動が自由であることの価値が高まるということであると思います。

難しくなりますが、社会情動的選択理論によれば、高齢になるとは、「今、現在ここにあるもの、日々の喜びと親しい人たちを大切にする」方向に意識が向かうことを意味します。これを前提に、今回のサブテーマである「ケアの基本、より自由になるために」とは、言い換えれば、介護が必須な時に生きる当事者を含むケアチームのメンバー一人一人が「どう生きるか」を考え、実践することであると言えます。

このためには、「老化は克服すべき」で否定すべきものという考えを暗黙の前提とすることなく、「老化」は私たちの敵ではなく、否定しえない自然の摂理であると認識することが重要です。老化を打ち負かすべき敵として捉えれば、高齢者差別を助長するだけでなく、避けられない加齢とともに健康と生活の質（自由）を維持・向上させる方法を見失うことになりかねないことを、我々は強く認識する必要があります。

チームケアの実践に求められるのは、老いる当事者の「人生の継続性の尊重」、「自己決定の尊重」、「低下の避けられない自己資源（残存能力）を最大限に活用する強い意志」であるかと思えます。

これをもって、ご挨拶とさせていただきます。

敬具

2022年9月13日

一般社団法人チームケア学会

会長 小笠原 泰

## 《チームケア学会 学会長紹介》



おがさわら やすし  
小笠原 泰

明治大学 国際日本学部 教授

1957年鎌倉生まれ。

東京大学卒、米国シカゴ大学大学院国際政治経済学修士、経営学修士(MBA)。

マッキンゼー&カンパニーを経て、米国カーギル社ミネアポリス本社に入社。

米国本社および同社オランダ、イギリス法人勤務後、NTT データ経営研究所に入社、同社パートナーを経て、2009年4月より現職。フランスの *Université Toulouse 1 Capitole, Toulouse School of Management* の客員教授を歴任(2018年4月～2020年3月)。その間、EU及びフランスの政治・経済・社会関係や社会保障システムなどを研究する。

研究領域は、グローバル化の中での経営組織文化論およびパワーを中心に据えた技術社会(政治経済)論。近年は、テクノロジーの進歩とグローバル化の中で起きつつあるパワーシフトを念頭において、国家の再定義と社会保障政策を中心に据えた社会システムデザイン再構築に関する研究に力を入れている。

### 【主な著書】

『CNC ネットワーク革命』(東洋経済新報社 2002年)

『日本的改革の探究』(日本経済新聞社 2003年)

『なんとなく、日本人』(PHP新書 2006年)

『日本型イノベーションのすすめ』(日本経済新聞社 2009年)

『2050年、老人大国の現実』(東洋経済新報社 2012年)

『わが子を「居心地の悪い場所」に送り出せ』(プレジデント社 2019年)

# Information (学会期間中のご案内)

## ●研究発表会について

発表は、各事業所より ZOOM での発表となります。

### 1) 受付について

参加者は事前申し込みとさせていただきます。

法人ごとに参加名簿を作成し、申し込みをお願いいたします。

参加費は、1名1,000円です。法人ごとに取りまとめてお支払いいただきます。なお、1演題でも2日間でも参加費用に変わりありません。

### 2) 会場

事前にお知らせいたします ZOOM の URL からお入りください。

その後、教室ごとにブレイクアウトルームがございますので、ご自分で選択してご入室下さい。

入退室は自由です。

入室時、ミュートにしてお入りいただき、ご発表の妨げにならないようご注意ください。

研究発表を行う会場は下記の教室です。

【 ROOM 1、ROOM 2、ROOM 3、ROOM 4、ROOM 5、ROOM 6 】 計6会場

### 2日目シンポジウムについて

明治大学 駿河台キャンパス リバティタワー リバティホール 1013 現地にて開催

最寄り駅 JR 御茶ノ水駅下車徒歩5分程度

### 3) 研究発表会の進め方について

1 研究の発表時間及び質疑応答については、以下の時間配分となります。

発表	10分	発表時間中の移動は、原則禁止とさせていただきます。
質疑応答	5分	

※発表者の皆様は、発表時間の厳守をお願い致します。

※4 研究発表後、15 分間の休憩がございます。

※各ルームにて総評を実施いたしますのでご参加ください。

※各研究の発表時間につきましては P10 のタイムテーブルをご参照ください。

### 4) 研究発表会中の留意事項

- 参加中は、携帯電話・スマートフォンをマナーモードに設定してください。
- 学会を円滑に進めるため、決められた時間はお守りください。
- ミュート・ミュート解除、ビデオオン・オフ、マイクの設定、音量操作など最低限の ZOOM での操作が可能な方を、お近くに配置してご参加ください。

## ● アンケートについて

チームケア学会終了後、アンケートのご提出をお願いいたします。

下記の QR コードから、または配信いたしました URL から-googleアンケートでお答えください。ペーパーでの回答は行っておりませんので、ご協力お願い申し上げます。



## ● チームケア学会 概要

■正式名称 : 一般社団法人チームケア学会

■創立年月日 : 平成 28 年 11 月 25 日

■目的

チームケア学会では、保険・医療・福祉にかかわるあらゆる職種の学習、研究活動を支援し、学識経験者並びに各関連機関との情報交換、交流、連携を通じて、医療・ケアの質の向上に寄与することをめざします。

■学会ロゴ

「チームケア学会」を英語表記した際の「Team Care Society」の頭文字「TC」をモチーフにしています。横に傾けると車いすの絵になります。



## 2022 年度 チームケア学会 第 1 日目 プログラム

開催日 : 2022 年 9 月 13 日 (火)

時間	プログラム
8 : 30	受付開始
9 : 30	開会 株式会社 ケアハーモニー 氏家 靖浩
9 : 35	オリエンテーション 特定非営利活動法人ヘルスケア・デザイン・ネットワーク 福原 正徳
9 : 40	学会長挨拶 一般社団法人 チームケア学会 学会長 小笠原 泰 (明治大学教授)
	*各会場へ移動 (ブレイクアウトルームを各自選択して入室)
10 : 00	研究発表開始 『第 7 回チームケア学会』 95 演題 ※発表 10 分 質疑応答 5 分 会場移動 5 分 ※各部屋の発表順は P11 のタイムスケジュール参照
15 : 30	各教室の総評 ROOM 1 チームケア学会 理事 小松 順子 ROOM 2 チームケア学会 理事 太田 恵美 ROOM 3 チームケア学会 査読委員 花城 久子 ROOM 4 チームケア学会 理事 佐藤 信一 ROOM 5 チームケア学会 査読委員 上野 忍 (こやまケア委員会 委員長) ROOM 6 チームケア学会 理事 原田 和美
16 : 10	全体総評
16 : 25	1 日目の所感 湖山医療福祉グループ代表 湖山 泰成
16 : 40	1 日目 閉会 1 日目アンケート登録
16 : 42	事務連絡 特定非営利活動法人ヘルスケア・デザイン・ネットワーク 福原 正徳

A series of 25 horizontal dashed lines spanning the width of the page, providing a template for handwriting practice.

# 研究発表会

## 抄録集

9月13日(火)

10:00～15:30

# 研究発表会 タイムテーブル

ROOM		ROOM1	ROOM2	ROOM3	ROOM4	ROOM5	ROOM6
テーマ		ケア	ケア(排遣)	リスクマネジメント	リハビリテーション	レクリエーション	感染・ケア
1	10:00-10:15	法人名 社会福祉法人 湖成会	株式会社 スマイルパートナーズ	医療法人財団 百葉の会	株式会社 日本ライフデザイン	社会福祉法人 百葉の会	医療法人財団 水遣み会
	サービス形態	小規模多機能型居宅介護	小規模多機能型居宅介護	認知症対応型共同生活介護	通所介護	介護老人保健施設 短期入所生活介護 通所介護	介護老人保健施設
10:15-10:30	10:00-10:15	題名 「禮に戻りたい」～私たちにも出る事～	理念と現実とお客様の思い～現実と理想の狭間で、...	安心・安全なグループホーム～その為に私達が取り組んだこと～	デイサービスは人生の通過点	園芸部発表！花がもたらした彩りある日常	介護老人保健施設におけるリハビリテーション部門の働き方（施設内クラスター発生時）
2	10:15-10:30	法人名 株式会社 ケアハーモニー	社会福祉法人 ひがしの会	株式会社 日本ライフデザイン	医療法人社団 日陽会	医療法人財団 百葉の会	社会福祉法人 百葉の会
	サービス形態	特定施設入居者生活介護	介護老人保健施設	福祉用具貸与	介護老人保健施設	通所介護	介護老人福祉施設
10:30-10:45	10:15-10:30	題名 マッサージによる浮腫の軽減効果～「歩きたい」を叫びたい～	オムツずらしをなくそう！朝までぐっすり眠れるように	転倒を防ぎ、お住まいで安全に過ごしていく為に～センサー導入事例より～	在宅復帰に向けて～自信を取り戻そう～	余暇活動の実施と生活動作能力の関連について	新型コロナウイルスとの闘い！！～C-MAT 指導による感染対策の浸透～
3	10:30-10:45	法人名 社会福祉法人 百葉の会	医療法人財団 百葉の会	社会福祉法人 草加福祉会	医療法人社団 ひがしの会	株式会社 日本ライフデザイン	医療法人 北辰会
	サービス形態	訪問介護	病院	介護老人福祉施設	小規模多機能型居宅介護	通所介護	病院
10:45-11:00	10:30-10:45	題名 カレンダーで支える在宅生活～見て安心、不安を解消～	脊髄障害後排尿ケアチームが関わりADLの拡大と行動療法により排泄自立した症例	身体介助による外傷の減少をめざして～動画面用による適切な介助法の習熟化～	「黒胡麻、カプサイシン入りシート」を利用した嚥下機能の変化について	自分らしく人生を謳歌するために	COVID-19の疫学的な画像所見と、当院の検査画像の比較・検討
4	10:45-11:00	法人名 社会福祉法人 カメリア会	社会福祉法人 湖成会	社会福祉法人 百葉福祉会	医療法人財団 百葉の会	医療法人社団 ひがしの会	株式会社 日本ライフデザイン
	サービス形態	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設	短期入所生活介護	認知症対応型共同生活介護	特定施設入居者生活介護	特定施設入居者生活介護
11:00-11:15	10:45-11:00	題名 涙の理由を教えてください	プリストルスケールの活用～排便コントロールの意識の変化～	転倒・転落事故における環境改善の有効性についての考察	多職種と一緒に連携してリハビリしよう！～会いたい人のために支えたい～	レクで始める生きがい支援～くらしを彩るレクの挑戦～	アロマで白癬対策～さらば水虫！
11:00-11:15 休憩 (15分)							
5	11:15-11:30	法人名 医療法人財団 平成会	医療法人財団 百葉の会	株式会社 テイクオフ	医療法人 北辰会	医療法人社団 徳友五幸会	医療法人社団 ひがしの会
	サービス形態	介護老人保健施設	介護老人保健施設	小規模多機能型居宅介護	病院	通所リハビリテーション	通所介護
11:30-11:45	11:15-11:30	題名 低栄養状態のリスク改善	重介助者に対する多職種のとらきみ	牛乳を使った便通改善～運動との相乗効果～	回復期リハビリテーション病棟における転倒・転落の予防策～センサー対象患者の選別～	生活リハビリでのお客様の身体機能、職員の働き方の変化について	A氏の活動意欲を引き出すために～その方合ったアクティビティを考える～
6	11:30-11:45	法人名 社会福祉法人 百葉福祉会	医療法人社団 絆愛会	医療法人財団 百葉の会	社会福祉法人 平成会	社会福祉法人 湖成会	社会福祉法人 湖成会
	サービス形態	介護老人保健施設 通所リハビリテーション	認知症対応型共同生活介護	小規模多機能型居宅介護	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設	通所介護
11:45-12:00	11:30-11:45	題名 完全調理から手作りへ～直営給食の意義～	弱視でも楽しく過ごして頂く為に	トイレに行きたい～日々の取り組みと課題～	内出血予防と職員意識向上の取り組み	機能訓練を通して生き生きとしたラッパライフを！	「出来ないなら何とかなる？」新たな発想の展開～
7	11:45-12:00	法人名 株式会社 健康倶楽部	社会福祉法人 カメリア会	社会福祉法人 百葉福祉会	医療法人財団 百葉の会	株式会社 テイクオフ	医療法人社団 平成会
	サービス形態	通所介護	介護老人福祉施設	短期入所生活介護	通所リハビリテーション	通所介護	通所介護
12:00-12:15	11:45-12:00	題名 あの時を忘れなさい！コロナ感染者発生を乗り越え～笑顔の中でupdateを続ける～	きよなら輝き、おかわり笑顔	便秘は食物繊維だけでは解消しない？～咀嚼と腸内細菌との関連について～	職員一人ひとりの危険予知能力について	自宅でも体操を継続して行うための工夫	アルクの煙～意欲向上と生活の質向上への取り組み～
8	12:00-12:15	法人名 医療法人財団 百葉の会	医療法人社団 平成会	医療法人社団 日陽会	社会福祉法人 水遣み会	社会福祉法人 湖成会	医療法人社団 絆愛会
	サービス形態	介護老人保健施設	認知症対応型共同生活介護	認知症対応型共同生活介護	認知症対応型共同生活介護	介護老人福祉施設	通所介護
12:15-13:15	12:00-12:15	題名 今・・・笑顔のために～コロナ ユニット内感染を乗り越えて～	正しい姿勢で褥瘡改善！！	下剤に頼らない、自然排便を目指して	セットミスゼロに～BOXの活用～	「起きる～！ 動きたい気持ちに寄り添ったケア	デイサービスにおけるレクリエーションのイメージ改革
12:15-13:15 休憩 (1時間)							
9	13:15-13:30	法人名 社会福祉法人 百葉福祉会	社会福祉法人 草加福祉会	社会福祉法人 絆愛会	医療法人財団 百葉の会	株式会社 日本ライフデザイン	株式会社 ライフアシスト
	サービス形態	短期入所生活介護	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設	介護老人保健施設	小規模多機能型居宅介護	放課後等デイサービス
13:30-13:45	13:15-13:30	題名 役割を持つことの大切さ～自立支援のアプローチ～	わたしたちの看取りケア～より良い看取りに向けて～	多職種連携により褥瘡治療に至った事例～施設外部との連携含む～	快適に、そして清潔に過ごしていただくために	コロナ禍での地域交流の取り組み	「新入育成」とは？～1年間の軌跡から読み解く～
10	13:30-13:45	法人名 医療法人社団 平成会	社会福祉法人 大和会	医療法人財団 百葉の会	社会福祉法人 カメリア会	社会福祉法人 湖成会	株式会社 日本ライフデザイン
	サービス形態	小規模多機能型居宅介護	介護老人福祉施設	特定施設入居者生活介護	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設	特定施設入居者生活介護
13:45-14:00	13:30-13:45	題名 認知症高齢者の一人暮らしを支える～施設には入りたくない！～	看取りプランの実践～職員の意識変化の考察～	有料老人ホームにおけるドライスキンの原因追求とケア改善の一症例	生活習慣の改善による排泄ケア	「停電」「断水」「道路寸断」 これからの自然災害にどう備えてゆか	介護職員の成長を見守りケアを行う研究
11	13:45-14:00	法人名 株式会社 ライフアシスト	医療法人財団 百葉の会	社会福祉法人 絆愛会	医療法人社団 平成会	社会福祉法人 狭山公助会	医療法人社団 藤友五幸会
	サービス形態	短期入所生活介護	通所介護	介護老人福祉施設	通所介護	介護老人福祉施設	介護老人保健施設
14:00-14:15	13:45-14:00	題名 大切な視点～パーソン・センタード・ケアを通して～	「最期まで通って頂きたい」～地域が必要とされるデイサービスを目指して～	皮膚状態改善に向けて～褥瘡発症率発表研究の水平展開～	プロジェクトN 骨盤底筋運動で尿漏れ予防	その小さな気づきから介護の質を高める～気づきに着目した事故防止委員会の取り組み～	プリセプターとプリセプティの思いを紐解く
12	14:00-14:15	法人名 医療法人財団 湖成会	社会福祉法人 湖成会	社会福祉法人 平成会	社会福祉法人 百葉福祉会	社会福祉法人 カメリア会	社会福祉法人 カメリア会
	サービス形態	通所介護	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設	認知症対応型共同生活介護	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設
14:15-14:30	14:00-14:15	題名 帰りたいなんて言わせない～開業が教えてくれたチームケアの重要性～	私たちの考える看取りケア～寝たきりから離床へ～	スキンケアによる褥瘡願望軽減	非言語コミュニケーションによるレビー-小体型認知症への関わり方	介護士と共に～機能訓練士の遊びリレーションとユニットケアへの介入～	
14:15-14:30 休憩 (15分)							
13	14:30-14:45	法人名 株式会社 健康倶楽部	社会福祉法人 湖成会	医療法人社団 絆愛会	株式会社 ライフアシスト	社会福祉法人 湖成会	医療法人財団 百葉の会
	サービス形態	通所介護	認知症対応型通所介護	介護老人保健施設	特定施設入居者生活介護	介護老人福祉施設	いきいきプラザ
14:45-15:00	14:30-14:45	題名 「見えなくなっても来てほしい」～視覚障害でも安心できるケアを目指して～	父ちゃんがんばれ！！～利用者と家族双方を支える取り組み～	最期は家で迎えたい～その思いを叶えるために～	食事形態がもたらした自立支援介護への効果	「食べてもらいたい」をチームと叶える	ブログからはじめた広報活動～より多くの人にいきいきプラザを知ってもらうために～
14	14:45-15:00	法人名 社会福祉法人 湖成会	株式会社 テイクオフ	医療法人財団 百葉の会	社会福祉法人 百葉福祉会	社会福祉法人 大和会	社会福祉法人 湖成会
	サービス形態	介護老人福祉施設	認知症対応型通所介護	いきいきプラザ	介護老人福祉施設	短期入所生活介護	短期入所生活介護
15:00-15:15	14:45-15:00	題名 「うちの元気ですか」に応えるために～感染対策中の家族連絡の取り組み～	私たちがだからこその自律神経へのアプローチ～私、外出は億劫です～	学び合うチーム作り～よりよい接遇を目指して～	以前の生活を元に戻したい～自立を促す努力によって～	視覚情報による意識向上への取り組み～Instagram活用による大人のための食育活動～	お客様と一緒に時間を創り出す～持ち物チェックアプリの導入～
15	15:00-15:15	法人名 社会福祉法人 草加福祉会	社会福祉法人 白山福祉会	医療法人社団 湖聖会(東京)	医療法人社団 絆愛会	社会福祉法人 百葉福祉会	社会福祉法人 カメリア会
	サービス形態	特定施設入居者生活介護	介護老人保健施設 短期入所生活介護 認知症対応型共同生活介護 小規模多機能型居宅介護	介護老人保健施設 通所リハビリテーション 訪問リハビリテーション	介護老人保健施設	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設
15:15-15:30	15:00-15:15	題名 図書委員会発足～私が図書委員よ～	外国人材採用・育成とボーダレス化による健康経営(SDGs)の相関関係	スタッフ同士で愛するところを文化に～みんなが認めるベストケア〇〇～	在宅復帰を叶えるために～チームアプローチの重要性について～	コストをかけずに嚥下食のエネルギーアップ!?～備蓄品の活用～	「つながり」～職員と施設をつなぐ連絡手段 カメリアから君へ～
16	15:15-15:30	法人名 医療法人 北辰会	社会福祉法人 湖成会	医療法人財団 百葉の会	株式会社 テイクオフ	医療法人社団 絆愛会	医療法人社団 湖聖会(宝塚)
	サービス形態	居宅介護支援	地域包括支援センター	通所介護	小規模多機能型居宅介護	認知症対応型共同生活介護	介護老人保健施設
15:30-15:45	15:15-15:30	題名 多職種連携による就労までのプロセス～50代からの再出発～	「西部包括通信」の4年間～効果とこれから～	お客様の夢をもっと叶えよう～Dreams come true～	誤嚥性肺炎を未然に防ぐ～在宅を支える口腔ケア支援の在り方～	「食べる」ことで続けられる生活	「俺トイレさきたいんだ！！～寝たきりからトイレで排泄出来るまでの取り組み～

# 研究発表会

《ROOM 1》

抄録

9月13日(火)

## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 1 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10:00 10:15	社会福祉法人 湖成会	「橙に戻りたい！」～私たちに出来る事～	下井 千恵	13
2	10:15 10:30	株式会社 ケアハーモニー	マッサージによる浮腫の軽減効果 ～「歩きたい」を叶えたい～	平塚 厚子	14
3	10:30 10:45	社会福祉法人 苗場福祉会	カレンダーで支える在宅生活 ～見て安心、不安を解消～	廣井 真紀子	15
4	10:45 11:00	社会福祉法人 カメリア会	涙の理由を教えて欲しい	長田 岳人	16
11:00 11:15		休憩(15分)			
5	11:15 11:30	医療法人社団 平成会	低栄養状態のリスク改善	和田 亜沙美	17
6	11:30 11:45	社会福祉法人 苗場福祉会	完全調理品から手作りへ ～直営給食の意義～	遠藤 未夢	18
7	11:45 12:00	株式会社 健康倶楽部	あの時を忘れない！コロナ感染者発生を乗り越え ～笑顔の中でupdateを続ける～	奥山 貴子	19
8	12:00 12:15	医療法人財団 百葉の会	今・・・笑顔のために ～コロナ ユニット内感染を乗り越えて～	増井 美幸	20
12:15 13:15		休憩(1時間)			
9	13:15 13:30	社会福祉法人 苗場福祉会	役割を持つことの大切さ～自立支援のアプローチ～	樋山 知希	21
10	13:30 13:45	医療法人社団 平成会	認知症高齢者の一人暮らし在宅を支える～ 「施設には入りたくない！」	鈴木 てるみ	22
11	13:45 14:00	株式会社 ライフアシスト	大切な視点 ～パーソン・センタード・ケアを通して～	川崎 彩乃	23
12	14:00 14:15	医療法人財団 百葉の会	帰りたいなんて言わせない ～囲碁が教えてくれたチームケアの重要性～	佐藤 美佳	24
14:15 14:30		休憩(15分)			
13	14:30 14:45	株式会社 健康倶楽部	「見えなくなっても来てもいい？」 ～視覚障害でも安心できるケアを目指して～	石川 直子	25
14	14:45 15:00	社会福祉法人 湖星会	「うちの母元気ですか」に答えるために ～感染対策中の家族連絡の取り組み～	石谷 万代	26
15	15:00 15:15	社会福祉法人 草加福祉会	図書委員会発足！～私が図書委員よ！～	佐藤 勝太	27
16	15:15 15:30	医療法人 北辰会	多職種連携による就労までのプロセス ～50代からの再出発～	上江洲 弓恵	28

題名	「橙に戻りたい！」～私たちに出来る事～		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	多機能ホーム橙
発表者	下井千恵	共同研究者	杉田侑輝
サービス種別	小規模多機能型居宅介護		

## I はじめに

2020年厚生労働省のデータによると小規模多機能型居宅介護事業所を人生の最期まで利用しながら過ごされる方の割合は、全体の半分ほどを占めるようになってきた。しかし、専門性や主治医との関わり等が課題である。対象者のA氏のご自宅はA事業所から徒歩3分。ご利用当初は犬の散歩で遊びに来られていたが徐々に認知症状の進行や病気の悪化が見られてきた。「A事業所に戻りたい」と言う利用者と家族の想いを、少しでも住み慣れた地域、住み慣れた自宅で最期に向うその道筋を『小規模多機能』というサービスの特性を活かしながらかつた事例を報告する。

## II 目的

1. 状態変化があっても安心して自宅へ帰れる
2. 家族を巻き込んだケアの組み立ての実施
3. 利用者・家族の想いに寄り添ったケアの提供

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年3月～2022年5月

### 2. 研究対象

A氏 80歳代女性、自宅にて転倒、右大腿骨頸部骨折。三度の入退院を繰り返し2021年9月肝臓がん発覚。余命1年と宣告される。

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 居室環境の見直し
- 2) 食事時間の確保
- 3) 在宅、家族との時間の確保
- 4) 送迎方法の見直し
- 5) 入浴方法の見直し
- 6) 体調変化による処置対応とケア対応

## IV 倫理的配慮

家族には、本研究の目的の趣旨を説明し個人情報や

写真の使用の同意を頂いている。

## V 結果

3度の入退院を繰り返しても「A事業所に戻りたい」との思いが強く聞かれた。職員間で何度も意見を出し合い、これまでよりも深く考え関わることができた。

雨天時などの天候に合わせて利用変更、送迎方法の見直しや家族に食事介助に来て頂く機会を設けるなど、施設にいても家族との関わりを大切にした。主治医には看護師から書面などを通じて症状を伝えることで連携強化できた。ご自宅で使用していたものを持参し、少しでも利用者が寂しくないよう居室の環境を見直した。様々な案は合ったが最期まで入浴する事はできず清潔保持のみとなってしまった。食事摂取困難や排泄の困難により受診をし入院。主治医、家族と面談を重ねる中で家族は在宅介護の限界を感じ緩和病棟への転院を決意。利用終了から一カ月後にご逝去となった。

## VI 考察

在宅サービスに位置づけられる小規模多機能の中で医療依存度が高まった時、私たちは何が出来るのか利用者や家族の想いにどこまで寄り添うことができるのか、A事業所として看取りケア知識不足、経験の少なさは大きな不安になっていた。また小規模多機能と言うサービスの特性を活かしてきていないことが課題として挙げられた。在宅サービスだからこそ、利用者が最期を迎えたいと思う場所で最期を迎えられるように、医療機関との情報共有や、他サービスとの連携を検討していき受け入れ体制を整えていく必要がある。住み慣れた地域、住み慣れた自宅で最期まで切れ目のないサービスを提供できることが当たり前と言えるように努力を重ねて行きたいと思う。

### 【引用・参考文献】

引用：2020年厚生労働省ホームページ



題名	マッサージによる浮腫の軽減効果 ～「歩きたい」を叶えたい～		
法人名	株式会社ケアハーモニー	事業所名	コンフォルト水戸
発表者	平塚 厚子	共同研究者	椎木 みどり、氏家 靖浩
サービス種別	特定施設入居生活介護		

## I はじめに

A氏は2021年11月に入所し、入所当初は職員の見守りを受けながら歩行が可能であった。入所時より両下肢の浮腫が見られたが、入所後座位での姿勢が多かったことから、日に日に両下肢の浮腫が顕著になった。動作時に両下肢の痛みを訴えるようになり、2022年4月には歩行が困難になってしまった。本人の「また元気に歩きたい」という想いを叶えるべく、実践したケアをまとめ、報告する。

## II 目的

看護師による両下肢のリンパマッサージおよび介護士が行う両下肢のもみほぐしを行うことで、本人の「また元気に歩きたい」という想いの実現を目指すとともに、両下肢の痛みの軽減を図ることを目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年6月1日～2022年7月31日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代 男性 要介護3

既往歴：高血圧、糖尿病、不眠症、頻尿、甲状腺機能低下症

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 両下肢に対して、看護師によるリンパマッサージおよび看護師指導のもと、介護士によるもみほぐしを毎日1回行う。
- 2) リンパマッサージを行う前後に、両ふくらはぎと両足首の周径を記録する。
- 3) 毎日の水分摂取量および尿量の計測を行い、リンパマッサージの効果を明確にする。

## IV 倫理的配慮

本研究の対象となる利用者、ご家族様へ個人情報の取り扱い及び写真の使用について説明、同意を得る。

## V 結果

1. リンパマッサージの前後で、両ふくらはぎおよび両足首の周径が0.2cm～1.4cm減少した。
2. 翌朝には、リンパマッサージ前の周径結果に戻っていた。
3. 浮腫みによる張りが軽減された。
4. 動作時および臥床時の両下肢の痛みの訴えが軽減された。
5. 毎日の水分摂取量を計測した結果、水分摂取量に対して、尿量が上回っていた。

## VI 考察

1日のリンパマッサージ前後で、両ふくらはぎおよび両足首の周径結果は減少したが、1ヶ月を通して周径結果を考察すると、減少はほぼ見られなかった。リンパマッサージ施行時のみ浮腫が軽減され、その後はもとに戻った。しかし、リンパマッサージともみほぐしの効果で浮腫みが柔らかくなり、両下肢の痛みの軽減は見られた。今後も両下肢の挙上も含めて継続していくことで、安楽に生活することができると考えられる。また、水分摂取量を計測した結果、水分摂取量に対して尿量が上回っていることが確認された。この結果から、本検討では排尿状況が浮腫軽減にあまり影響を与えていないことが推測される。

### 【引用・参考文献】

- 1) 女性の美学, 足のリンパマッサージの効果とやり方。むくみを解消しスッキリ足に, 2018年2月9日掲載, <https://josei-bigaku.jp/ashiyase30620/>, 参照2022年5月31日
- 2) 一般社団法人 日本リンパ浮腫学会, 経過観察のための指標, [https://www.js-lymphedema.org/?page\\_id=610](https://www.js-lymphedema.org/?page_id=610), 参照2022年7月1日



題名	カレンダーで支える在宅生活 ～見て安心、不安を解消～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	ヘルパーステーション中子の森
発表者	廣井 真紀子	共同研究者	中林 敏美 会田 浩子 近藤 まゆみ
サービス種別	訪問介護		

## I はじめに

A事業所では、開設時から1ヶ月の利用予定のカレンダーを作成し利用者に配布してきた。2016年に顧客満足度アンケート（以下アンケートとする）に「カレンダーが分かりやすいか」の質問項目が追加され、2019年には「分かりにくい」の回答が増加し、改善を求める意見も挙がった。加齢や病気により理解力の低下した利用者が一目で理解でき、安心につながる支援の一つとして取り組んだ事例を紹介する。

## II 目的

五感のうち視覚の情報効果が8～9割あることを重視し、毎日の予定が一目でわかるカレンダーを作成する事で、アンケート満足度10%向上を目指す。

## III 方法

### 1. 研究期間

2019年10月25日から2021年10月22日まで

### 2. 研究対象

顧客満足度アンケート結果

2019年（配布39名／回収26名 回収率67%）

2020年（配布33名／回収29名 回収率88%）

2021年（配布38名／回収32名 回収率84%）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 毎月月末に個別の状態に合わせ、字体・色・時間の有無等を検討し、全ての利用サービスを含めたカレンダーを作成。
- 2) 利用者の言動や職員の気づきからカレンダーの表記を部署会議やミーティングで検討・改善する。
- 3) その後の様子により表記方法を随時調整する。
- 4) 顧客満足度アンケート質問15回答結果の満足度で評価。

## IV 倫理的配慮

個人を特定するようなものはないが、利用者・職員

に対し、研究内容を文書にて説明した。発表者全員について開示すべきCOI関係にある企業は無し。

## V 結果

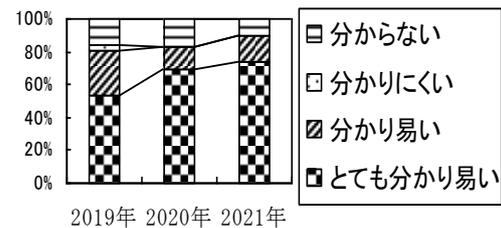


図1 顧客満足度アンケート質問15の回答結果推移 (単位%)

「とても分かり易い」「分かり易い」が2年間で9.6%増加した。2020年度と2021年度では「分かりにくい」が0%となった。「分からない」は2年間で5.7%減少した。結果、概ね目標達成につながった。

## VI 考察

老年期特有の視力低下、特に色覚の黄色化により青緑部は認知が困難になるが、橙や赤は比較的に見えやすい。また、見当識障害により予定が分からない事もあるが、日々のケアの中から利用者が理解できる方法をくみ取る。これらの事をカレンダーにも活かすことにより、視覚から認知機能へのアプローチにつながったと思われる。複数のサービス予定が一目で理解できたことで、支度や気持の準備ができ、安心へつながった。その結果、顧客満足度が向上したと考える。

アンケートの結果や利用者の言葉から、カレンダーを頼りにしている事を皆が実感できた。人は視覚から得る情報が一番理解しやすいことが、今回の取り組みで分かった。今後も継続していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 北川公路, 老齡期の感覚機能の低下, 駒沢大学心理学論集 {NO. 6} 2004年{P53～P59}



題名	涙の理由を教えて欲しい		
法人名	社会福祉法人 カメリア会	事業所名	墨田区特別養護老人ホームなりひらホーム
発表者	長田 岳人	共同研究者	中山 純一、小坂橋 晃
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

A施設に入所されているA氏は失語症を患っている。日々の生活において、言葉以外のADL等はほぼ自立しているものの、職員や他の利用者との、言葉でのコミュニケーションをとることが困難であった。それでもA氏が生活していく上で顕著な支障はないと言えず、日々を穏やかに過ごされていた。

涙の理由を探る為に、文字に書いてもらおうとも試してみるが、少し書いては涙を流す、を繰り返す。また、職員と上手く意思疎通できないことに対して、不穏になり涙を流していた。

失語症を患っているA氏との意思疎通を図り、涙の理由とその問題を解決するため、今回、フロア全体で取り組んだ内容を以下に記載する。

## II 目的

言語やコミュニケーションに関する知識を得て、実際の利用者に対してフロアで統一したケアを展開出来るようになる。

## III 方法

1. 研究期間：2022年6月1日～7月1日
2. 研究対象：3階フロア職員及び失語症を患うA氏
3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) A氏の言動を観察・記録し、涙の理由を考える。
- 2) カンファレンス・職員アンケートを実施して、何が出来るか考え、問題を解決する。

## IV 倫理的配慮

個人情報の取り扱いに注意し、実名や個人が特定できるような情報は伏せアンケートを実施した。また、研究で使用した写真などは、家族に許可を頂いた。

## V 結果

A氏の言動を確認していくと、毎週の息子様とのZoom面会を楽しみにされていたが2022年5月、息子様に病気がわかり、入院生活となったことが涙の理

由であることがわかった。

職員からはA氏の想いを汲み取り代弁するため手紙を書きたいとの意見が出た。その上で職員が今まで以上に失語症を勉強し、理解し、A氏と意思疎通を図りたいとのおもいが大きくなった。

A氏が施設内で転倒事故により入院になってしまい手紙を書くお手伝いをするに関しては研究期間内に実施できず、延期となる。

勉強会では非言語コミュニケーションの重要性に触れ、フロアにて行った勉強会では失語症に関する理解に加えて、様々な職員の声が出た。

A氏は主に「話す」こと、「聞く」ことが一部困難であるのに、職員が一方向的に声を出し言葉だけでコミュニケーションを取ろうとしていた事を反省し、コミュニケーションの改善に繋げる事ができた。

## VI 考察

A氏が入院になってしまい手紙の作成など計画通りにならないこともあったが、A氏がきっかけで失語症に関して、改めて勉強する機会になった。

非言語のコミュニケーションや受容・傾聴・共感などは失語症だから重要で実践するわけではなく、失語症を患っていないお客様にも実践できる基本的な内容である。

今回勉強した内容をフロアで統一することで、本研究がA氏に限らず全てのお客様に対してのコミュニケーション、ひいては接遇の向上につながるきっかけになったのではないかと考えられる。

### 【引用・参考文献】

カメリア会新入職員研修マニュアル 2021



題名	低栄養状態のリスク改善		
法人名	医療法人社団 平成会	事業所名	介護老人保健施設グリーンケアハイツ
発表者	和田亜沙美	共同研究者	戸田沙織 佐藤真衣 佐藤知華
サービス種別	介護老人保健施設		

## I はじめに

脳卒中をはじめとする疾病予防と共に、低栄養との関連が深いフレイルを回避することが重要であり、高齢者(75歳以上)の目標とするボディマス指数(Body Mass Index 以下 BMI) 値は 21.5~24.9 である。しかし現状では各部署にて低体重の認識の違いがみられている。また、低体重の利用者の増加がみられており、低栄養リスクが高いことによる皮膚トラブルの増加や浮腫み、身体機能、体力の低下などがみられていた。

## II 目的

1. 低体重の認識を各部署に周知する。
2. 栄養マネジメントの強化を行い、利用者個人に合った栄養補強を行う。
3. 栄養リスク改善し、皮膚トラブルなどを減らす。

## III 方法

1. 研究期間 2021年5月1日から  
2021年12月31日
2. 研究対象 期間内に入所されていた利用者
3. 具体的方法(評価尺度を含む)
  - 1) 勉強会にて低体重値の再確認と低体重によるトラブルの周知を行う。
  - 2) モニタリングで栄養リスクを判定し、中・高リスクで低体重の利用者に栄養改善を試みる。
  - 3) モニタリングにて再評価を行い、低体重の改善とトラブルが続いている利用者の経過を観察。

## IV 倫理的配慮

対象者には本研究の説明を行い同意を得ている。

## V 結果

1. 勉強会にて、「BMI18以下が低体重ではなく、高齢者の目標値は 21.5~24.9 であり、21.4 以下が低体重である。」と示した。言語聴覚士(Speech Therapist 以下 ST)に協力を仰ぎ、嚥下機能の低下、

低体重による問題点の提唱を職員会議にて全職員に対して行ったことにより各部署の認識統一に繋がった。

2. 2021年5月1日時点では低体重で中・高リスクの利用者は 32 名だった。食事を全量召し上がる事が出来る利用者に対しては主食や主菜と、高カロリーとなるよう提供した。食事を残されがちな利用者に対しては栄養補助食品の摂取を促し、皮膚状態の向上と体重増加を目指した。
3. 2021年1月31日でのモニタリングでは低体重で中・高リスクの利用者は 19 名と 13 名の減少となった。褥瘡を繰り返していた利用者は、蛋白源の摂取を促したことにより褥瘡出現回数の減少が見られた。

## VI 考察

各部署と低体重の数値が統一され、低体重からくるトラブルが周知されたことにより食事摂取量が増え、低体重を改善することが出来た。しかし、体重増加により介助負担が増えたと感じている職員もいるため継続して今後も勉強会を行う。体重の改善が出来たことにより生活の質向上につながった。また海外では、低体重は過体重より死亡リスクが高く、心血管疾患による死亡率は 1.45 倍、免疫力の低下を引き起こし、体重が 10 年間に 5kg 減少すると知的能力が 24%低下すると言われていることから、今後も低体重の改善に努めたいと思う。

## 【参考文献】

- 1) 肥満より死亡率が上昇 高齢者の「低体重」はこんなに危険, 日刊ゲンダイヘルスケア, 2016年6月2日, 2021年4月閲覧



題名	完全調理品から手作りへ ～直営給食の意義～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	介護老人保健施設純恵の郷
発表者	遠藤 未夢	共同研究者	高松 房枝 塚野 靖子
サービス種別	介護老人保健施設 通所リハビリテーション		

## I はじめに

近年、施設における給食は委託給食が主流となり、直営給食でも完全調理品（完調品）を使用する所が増加している。その主な理由は、労務問題、人材不足や管理費増などである。A施設でも、主に人材不足で2019年の4月から完調品に切り替えたが、利用者のニーズを反映しにくい事が課題としてあった。そこで、2021年4月の施設組織体制の変更を機に、栄養科職員の体制の強化と共に基本的指導のみならず、課題から抽出した勉強会を積極的に行って、8月から手作り調理品（手作り）への切り替えを開始した。すでに約1年が経過し明らかな食事満足度の向上がみられ食単価の低下を実現できた。さらにお客様の健康要素（体重、Body Mass Index（以下BMI）、食事摂取量等）においても予想外の効果が得られたので報告する。

## II 目的

完調品と手作りによる様々な要素を比較する事で、「直営給食」の意義を明らかにする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年4月1日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

入所、通所の利用者（経口摂食者のみ）：85名  
職員：50名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

完調品提供期間と、手作り提供期間における以下の項目を比較解析した。

- 1) アンケートによる食事満足度
- 2) 食単価、摂食量、残食量、体重とBMI

## IV 倫理的配慮

ご本人とご家族から文書で同意を得ている。

## V 結果

栄養科職員の増員による人件費は、約60万円/月に増えたが、食単価が320円/食から227円/食と減少し食材費は約70万円/月減少した。食事満足度は72%から91%と上昇し、残食量は19%から14%に減少した。職員食数では、2021年4月は延べ285食/月だったが、2022年6月には692食/月と約2.5倍に増加した。またお客様の摂取量は、完調品の時に完食された15名では体重、BMIに若干の改善が見られたが、平均8割以下の摂食者8名の中で、手作りにより4名の摂取量とともに、体重、BMIも表1の通り改善が見られた。

体重（平均）		BMI（平均）	
2021年4月	39.1 kg	2021年4月	17.3
2022年5月	41.7 kg	2022年5月	18.0

表1：手作り調理品による体重やBMIの改善

## VI 考察

委託給食や完調品を使用する事で、メリットも大きいですが、利用者のニーズへの迅速な対応や施設の一員としての栄養科職員のやりがいを追求する事は難しい。今回の取組では、新規雇用による人件費増は食単価の低下で補っている。さらに、利用者の健康要素が改善され、かつ美味しいと喜んでくれる事で栄養科職員の働く意欲が増したことや、手作りを摂食する職員が増えたことで、施設全体の一体感が増したように感じている。また今回、手作りへの移行期からすでに上記の効果が始まっていたことから、完調品を使用していても1品でも手作りを加える事を提案する。

今後、栄養科職員や食事の更なる進化を目指して、一丸となって取り組んでいきたい。

【引用・参考文献】1) 加藤肇 笑食快膳：医療介護現場における給食サービスの実態 公益社団法人日本メディカル給食協会 2017 (p9-12)



<b>題名</b>	あの時を忘れない！コロナ感染者発生を乗り越え～笑顔の中で update を続ける～		
<b>法人名</b>	株式会社 健康倶楽部	<b>事業所名</b>	デイサービスセンターARK 結
<b>発表者</b>	奥山貴子	<b>共同研究者</b>	千葉由利子 林江梨香 五十嵐牧子
<b>サービス種別</b>	通所介護		

## I はじめに

突然、コロナ感染報告があり、管理者不在の中、業務休止になった。業務再開に向けての館内の消毒や利用者への連絡と検査が、手探りの中スムーズな対応が出来なかった。感染発生は実際に起きる可能性のある事であり、この経験から、感染発生時の対応等の業務の見直しを行った。

## II 目的

1. 通所サービスとして、感染対策の見直しを行い、ガイドラインの確認と把握を行い感染発生に備える。
2. 業務停止や外出自粛にて起きる影響フレイル(虚弱)を防ぐ、身体能力低下や認知機能低下の防止に取り組む。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年2月～2022年6月

### 2. 研究対象

利用者 A 氏

職員 B 氏

デイサービス利用者、職員一同

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

職員へのコロナ感染時についての聞き取りアンケート行い、疑問や不安に思っている事の確認を行う。机上訓練やガイドラインを参考に消毒の方法、感染対策の見直し、職員が周知出来るよう、マニュアルを作成行う。緊急時連絡帳を作成、関連業者等確実な連絡に備える。請求業務マニュアル等、提出物を確認し一覧を作成する。フレイル(虚弱)予防の為、外出自粛中でもデイサービスとして取り組める事を見つける。

## IV 倫理的配慮

感染された利用者 A 氏、職員 B 氏に対し研究の目的、プライバシーを保護し、情報は研究以外には使

用しない事を、紙面にて説明行う。

## V 結果

1. コロナウイルスの残存期間や消毒手順等の具体的な方法を参考にマニュアルが作られ職員がいつでも確認できるよう提示が出来た。
2. 緊急連絡帳は個人ファイルより必要な情報を最低限にまとめ担当ケアマネや家族にスムーズに電話連絡や文書での連絡が取れるようまとめた。
3. 業者への連絡や請求業務のマニュアル、提出書類一覧も書き出し作業を行った。
4. 外出が行えていない利用者を中心にフレイル状態予防に取り組む為、少人数で近隣への散歩を行った。

## VI 考察

感染発生時は速やかに情報共有ができ、対応できるよう、報告ルート、報告先、報告方法、連絡先等を事前に体制を整えておくと共に、日頃から訓練をしておく必要がある。机上訓練にて意見交換を行い再確認し参考にすることが出来た。外からも通われる為、コロナ感染は実際に起きる可能性のある事であり、発生した場合の対策も職員と周知見えるマニュアル化が必要である。また、隔離や自宅待機、外出自粛等もあり、外に出る事が無い利用者を中心に、近隣の散歩を行った。日光を浴びることで、大切な栄養素を活性化させることもでき、笑顔も見る事が出来た。

### 【引用・参考文献】

- 1) 厚生労働省 老健局, 介護職員のための感染対策マニュアル, 通所系, 2020年3月作成, P13, 2022年6月2日閲覧
- 2) 東京大学高齢社会総合研究機構, シニアのためのおうち時間を楽しく健康に過ごす知恵, おうちえ, 2020年5月8日発行, P3~, 2022年6月2日閲覧



<b>題名</b>	今・・・笑顔のために ～コロナ ユニット内感染を乗り越えて～		
<b>法人名</b>	医療法人財団 百葉の会	<b>事業所名</b>	介護老人保健施設 鶴舞乃城
<b>発表者</b>	増井美幸	<b>共同研究者</b>	総合相談室
<b>サービス種別</b>	介護老人保健施設		

## I はじめに

A事業所にて職員のコロナ感染からユニット内3名の利用者が発症した。隔離された空間の中での利用者、職員の不安を他部署の協力・励ましを受け、日々の関わりを大切にすることで不安軽減を図ることができ、またご家族様との連絡を密にし、信頼関係をそこなう事なく収束を迎えた。コロナ感染から収束までの約1ヶ月間、行ってきた利用者のご家族様との関わり・学んだ事やA事業所が15年たった今でも守り続けているケアをここに報告する。

## II 目的

1. 利用者の笑顔を絶やさない関わり
2. ご家族様の不安を取り除く関わり
3. A事業所が15年たった今でも守り続けているケアの取り組み

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年2月27日～2022年3月15日

### 2. 研究対象

松露・玉露チームの玉露フロア利用者 20名、  
ご家族様、玉露フロア職員 13名  
A事業所職員（玉露フロア以外）13名 計 26名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 利用者との日常の関わり、いつもと変わらない日々の関わり
- 2) ご家族様への電話連絡、お手紙
- 3) コロナ収束後の利用者へ企画実施
- 4) 職員アンケート 26名

## IV 倫理的配慮

利用者の顔写真等の掲載に同意を得ている。

## V 結果

1. 日々のケアを出来る限り変えずに行ったことで事故もなく過ごすことが出来た。
2. 陽性者のご家族様へ相談員から毎日電話連絡を行ったことで、ご家族様から励ましの言葉を頂け、信頼関係構築の継続が出来た。  
陽性者以外のご家族様へ現状の電話連絡を密に行うことで不信感に繋がることはなかった。  
全てのご家族様へフロアから写真を添付した手紙の郵送を行うことでご家族様に安心して頂け職員に対するねぎらいの言葉、感謝の言葉を頂くことが出来た。
3. 利用者へ企画を行い、不安を軽減し気分転換することが出来た。
4. 「自分が感染しないか毎日不安だった。」「普段の何気ない生活がどれほどありがたいものだとつくづく実感した。」との意見が挙がった。

## VI 考察

今回の取り組みを通し、利用者にもいつもと変わらない日々を送って頂く事、ご家族様へのこまめな連絡、報告によって関係性を継続し保つ事、そのためのコミュニケーションの重要性、大切さを改めて実感し学ぶことが出来た。ご家族様との関係性が薄くなるコロナ禍であるからこそ、A事業所が今まで大切にしてきたケア、一つ一つを重ね支援していくことで苦境時を乗り越えることができると考える。

### 【参考文献】

- 1) 尾渡順子, 介護現場で使えるコミュニケーション便利帳, 翔泳社, 2014.



題名	役割を持つことの大切さ～自立支援のアプローチ～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	ショートステイアルシェふるまち
発表者	樋山 知希	共同研究者	秋元 由夏
サービス種別	短期入所生活介護		

## I はじめに

2019年8月ショートステイ利用当初は定期利用であったが、2020年1月頃からロング利用となり、以降は一度も自宅に帰っていない。その為、「今日泊まり？家族に連絡していないんだけど」と訴え、居室にこもりがちになっていた。身の回りのことはご自身で可能なものの、職員が身の回りのことは全て行っており「つまらない。家に帰りたい」と訴えがある中で、職員の関りが間違っていたことに気付き、A氏が役割を持ち本人にとって充実した生活ができるよう取り組んだ事例について紹介する。

## II 目的

できる事はできる限り自身で行い、役割を持ち充実した生活ができる

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年11月12日～2021年12月12日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代 女性 要介護2 認知症自立度Ⅲa  
寝たきり度A2 アルツハイマー型認知症  
貧血 高血圧症 脳梗塞後遺症

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 自宅での暮らしの様子や、A氏がよく口にする言葉についてご家族に確認する
- 2) 職員でセンター方式D-1シート（以下D-1シート）を記入し会議でA氏の役割を決める
- 3) 毎日センター方式D-4シート（以下D-4シート）を記入し24時間のデータを取る
- 4) 再度D-1シートを記入し取り組みを追加する
- 5) D-4シートにて取り組みの前後評価（気分の変化）を行う

## IV 倫理的配慮

本研究の趣旨と個人情報の取り扱いについてA氏、ご家族に説明し口頭と書面で同意を得た。

## V 結果

A氏がよく口にする言葉の意味については確認が取れなかったが、D-1シートよりA氏の役割の内容はテーブル拭き・お茶くみ・洗濯物干し・たたみを中心に実施した。積極的に取り組み、表情が良い事も増え「することが無い」といった言葉はなくなった。また、取組前まで職員で管理していた衣類を居室管理に変更し入浴日には職員と一緒に着替えを用意するようにした。衣類管理を1人で行うことは難しいが、職員が介入することで管理ができた。

A氏の帰宅要求が午後からあることに変化はなかったがD-4シートのデータからA氏の帰宅要求の時間は明らかになり、A氏の役割についての職員のかかわりや他のお客様の帰宅要求等も大きな要因の一つであることがわかった。取組後は「私がするよ」と積極的に行動することが増え、約1か月の取組で本事例の目的を達成することができた。

## VI 考察

自立度が高いからと関りが少なく「つまらない」等の訴えがあったが、本人のできること、できないことを精査し日々の生活に生かすことは、A氏の役割作りにも有効であり、結果的に生活の質が上がったと考える。

また、職員や周囲のお客様もA氏にとっては環境の一部であることを再確認した。他のお客様に対してもチームで情報を共有し、お一人お一人に合わせたアプローチに繋げていきたい。

【引用・参考文献】認知症介護研究・研修東京センター 四訂認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式の使い方・活かし方：中央法規出版 2019年



<b>題名</b>	認知症高齢者の一人暮らし在宅を支える～「施設には入りたくない！」		
<b>法人名</b>	医療法人社団 平成会	<b>事業所名</b>	アルコート並木
<b>発表者</b>	鈴木てるみ	<b>共同研究者</b>	関根佳代
<b>サービス種別</b>	小規模多機能型居宅介護事業所		

## I はじめに

お一人暮らしのA氏は認知症の症状があり支援の必要があるが「施設には入りたくない。自宅で暮らして行きたい」と強い意志があった。福祉施設の利用に抵抗があり、通所サービスの利用は定着せず、来訪した職員に対して「泥棒！警察を呼ぶ！」と混乱されることも見られた。在宅での暮らしを続けるため、私たちにできる支援は何かと取り組むきっかけとなった。

## II 目的

在宅生活を続けるための支援をアセスメントし、A氏が在宅生活での生きがいを見出し、安心して暮らしていくこと。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年10月1日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代 女性 既往歴：認知症

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

#### 1) 通所お迎えの柔軟な対応

通所お迎え時に拒否が見られた際の本人様の訴えの内容などを職員間で周知し、声かけの工夫や女性職員の対応、時間を置いて再度お迎えに訪問するなど柔軟に対応する。来所拒否の頻度を3ヶ月毎に比較し、通所利用への意欲の変化を評価する。

#### 2) 生きがいを見出す

A氏は藤工芸の講師をされていたことに着目し、通所利用時に籠作りの機会を設け、他のお客様や職員との関わる時間を図る。目的を持って来所することで、意欲の向上や、本人様の生きがい、目標を持って頂く。

#### 3) 在宅の安全確認

毎日自宅訪問し、A氏の安否や認知症の影響で、火の不始末、食材管理に懸念があるため、衛生面の確認を行ない、危険がないかのアセスメントを都度実施し、家族様と職員間で情報共有する。

## IV 倫理的配慮

本研究参加によって対象者の不利益や負担が生じないように配慮し、対象者の個人情報の保護書面にて説明し、同意を得ている。

## V 結果

表1 来所拒否の回数 ※()内は利用日数

2021.10	2021.12	2022.3	2022.6
6回(21日)	5回(25日)	2回(27日)	0回(22日)

利用当初は頻繁に見られた来所拒否も、現在は職員が自宅に来ることで、感謝の言葉や安心した表情が見えるようになった。

籠作りを通じて他者交流や笑顔も増え、馴染みの関係を作ることができた。自らレクリエーションへ参加されることも増え、「地域の方との交流」が生きがいとなっている。

火の不始末や衛生面では、毎日訪問することで早期の段階で危険に気づくことができた。家族様と情報共有しながら、在宅生活を支えることができた。

## VI 考察

小規模多機能施設ならではの柔軟な支援を行うことで、少しずつ信頼関係を構築し、A氏に受け入れて頂けたと考えられる。外出機会がなく、自宅に閉じこもりだったA氏の生活は、外出の楽しみを持って暮らすことができ、生活意欲にも繋がったと考えられる。



<b>題名</b>	大切な視点 ～パーソン・センタード・ケアを通して～		
<b>法人名</b>	株式会社 ライフアシスト	<b>事業所名</b>	ショートステイ ルポあしすと
<b>発表者</b>	川崎彩乃	<b>共同研究者</b>	恵木芳恵 坪野一勤
<b>サービス種別</b>	短期入所生活介護		

## I はじめに

入退所が繰り返されるショートステイにて、個々に応じたケアを検討・提供を行うも、様々な目的・回数での利用となることと合わせて日々の多忙さから、具体的な個別ケアまでには至らない日々が繰り返される中で、他者とのトラブルに繋がる場面の多いA氏の対応方法について協議をしていた。

そのような中、A県認知症介護指導者を招いた外部講師研修（以下認知症ケア研修）が開催され、パーソン・センタード・ケアについて学ぶ機会があり、A氏を対象とすることで具体的な個別ケアを見出し、職員の意識変化に繋がるのではないかと取り組みを開始した。

## II 目的

認知症ケア研修へ参加し、パーソン・センタード・ケアについてを学び、実践していく中で、職員の意識の変化に繋がることを目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年10月～2022年5月31日

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 女性 要介護3  
ADL自立 認知症日常生活自立度IV

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) パーソン・センタード・ケアの理解  
ミーティングにて勉強会開催
- 2) アセスメント・ご家族様への聞き取り
- 3) 取り組みの進捗状況を2週間・4週間で評価
- 4) 職員意識調査アンケート

## IV 倫理的配慮

対象者へは本研究の主旨、目的等を説明の上、同意を得ている。

## V 結果

- 1) パーソン・センタード・ケアについて職員個々の理解を深めた。
- 2) アセスメントから生活歴の情報等を整理したことで、A氏の役割を見出していくことができた。
- 3) A氏の言動を分析していくことで、効果の差はみられたものの、職員のA氏への理解へ繋がり、双方向での関係構築に繋がった。

## VI 考察

個々の性格や生活歴・対人関係・認知症症状について考えた、「その人を中心としたケア」を重ねることで向き合うことの大切や難しさに改めて気づくことができた。しかし、取り組み内容へ重点を置きすぎていたことで、取り組み意欲に繋がる声掛けが不足していたことが課題であると考えた。

パーソン・センタード・ケアを基本に個々の意欲に繋がる声掛けへも視点を置き、サービス向上へ努めていく。

### 【引用・参考文献】

認知症ケア研修～パーソン・センタード・ケア～  
論文：高齢者の意欲活動に対する介護者の声掛け影響  
木林身江子、木田文子、五十嵐さゆり、  
津島三代子 2007年



題名	帰りたいなんて言わせない ～囲碁が教えてくれたチームケアの重要性～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	デイサービスセンターアルク百葉二の宮
発表者	佐藤美佳	共同研究者	中村和成
サービス種別	通所介護		

## I はじめに

当デイサービス（以下 DS）で帰宅願望の多いお客様に趣味の囲碁を提供したところ、帰宅願望が見られなくなっていった。このお客様へチームで取り組んだこと、お客様の様子の変化を報告する。

## II 目的

チームで協力し、帰宅願望の多いお客様に穏やかに楽しんで過ごして頂くこと。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年2月15日～2022年5月31日

### 2. 研究対象

A氏、80代男性、要介護1、アルツハイマー型認知症の既往歴がある。表情は硬く会話や活動を求めない。入浴や機能訓練は拒否的。午後、歩いて帰ろうとする帰宅願望が目立つ。(DS近所に自宅あり)週2回利用。

### 3. 具体的方法

A氏のフロアの過ごし方として脳トレプリント等の他に、事前に作業療法士（以下 OT）が調査した興味関心チェックシートにある趣味活動を提供する。評価尺度として利用日毎の帰宅願望の有無や様子の変化を記録し、表1に示した。この情報を職員間で共有し、チームで統一したサービスを提供する。

## IV 倫理的配慮

A氏、ご家族へ研究発表の趣旨、個人情報保護等について説明し了承を得ている。

## V 結果

反応が△と×の場合はその日の午後に帰宅願望が見られた。そこで OT は A 氏の興味関心チェックシートに着目し、囲碁、将棋に経験、興味があることを確認した。A氏と他のお客様に囲碁を勧めたところ集中して取り組まれ、帰宅願望は見られなかった。この情報を職員間で共有し、A氏のアクティビティを囲碁で統

一した。その後は帰宅願望のない日が増えていき、笑顔や会話をされる場面も見られた。(表2参照)

表1 A氏へ提供したアクティビティとその反応

提供したアクティビティ	反応	
漢字・計算の脳トレプリント	△	×…ほとんど取り組もうとしない
間違い探しの脳トレプリント	×	△…少し取り組むが集中持続せず
塗り絵、パズル	×	○…集中して取り組む
囲碁	○	

表2 A氏の日中の様子と帰宅願望の変化

利用日	帰宅願望	日中の様子(概略)	利用日	帰宅願望	日中の様子(概略)
2/15	午後有り		3/29	無し	
2/22	午後有り		4/1	午後有り	
2/25	午後有り		4/8	無し	
3/1	無し		4/12	午後有り	
3/4	無し	笑顔あり。	4/19	無し	笑顔、会話あり。
3/8	午後有り		4/22	無し	
3/11	無し	囲碁の提供開始。	4/26	無し	
3/15	無し		4/29	無し	会話あり。
3/18	午後有り		5/3	無し	
3/22	無し		5/6	無し	
3/25	無し		5/10	無し	

## VI 考察

帰宅願望の原因として、A氏にとって DS は興味、魅力となるものが乏しかったと考える。渡辺らは「チームとは、その方針を共有し、同じ方向へ向けて互いの専門性を活かしながら協力し合うグループです」<sup>1)</sup>と述べている。今回 OT が A 氏の興味関心チェックシートを活用し、A氏の反応を職員間で共有し囲碁という統一したアクティビティを提供したことで、A氏にとって DS は「楽しめる場所」「居てもいい」という意識に変わったと推察する。また囲碁の提供以前は他者との交流はなかったが、囲碁という交流がこれらの意識を強めていったのではとも考えられる。

### 【引用文献】

1) 渡辺裕美, 新・介護福祉士養成講座 5 コミュニケーション技術 第2版, 中央法規出版株式会社, 2013, P180.



題名	「見えなくなっても来てもいい？」～視覚障害でも安心できるケアを目指して～		
法人名	株式会社 健康倶楽部	事業所名	デイサービスセンターARK 奏
発表者	石川直子	共同研究者	池田瑛翔
サービス種別	通所介護		

## I はじめに

A施設のデイサービスでは視覚障がいの方のケアについて受け入れの経験が少なく、チーム全体として力不足であることは否めなかった。どのようにすれば過ごしやすく、楽しんでいただける時間にできるのか、取り組んでみた過程である。

## II 目的

安心して過ごしていただける時間や場をつくる

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年12月から2022年6月まで

### 2. 研究対象

A氏 60歳代 女性 要介護3

2度の脳梗塞の既往で注意障害となる。網膜色素変性症で右目は失明。左目も手動弁程度しか見えない。糖尿病性末梢神経障害で下肢振動覚低下となっている。2021年8月、受診時に診察室内で転倒し、左大腿骨骨折のため人工骨頭となった。

障害高齢者の日常生活自立度 B1

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 視覚障がいの基本的な介助方法やA氏の注意点について職員会議を通じて情報の伝達、共有を行う。
- 2) 朝・夕のミーティングで実際に行ったケアについて情報共有を行い、評価、改善を行う。

## IV 倫理的配慮

研究対象とさせていただくことと画像使用については、ご本人に了解を得ている。

## V 結果

外や室内関係なく、段差の前には立ち止まり、段差であることや、曲がる際には具体的な言葉で伝えるなど、基本的なことではあるが、誰もが同じようにできるようにした。昼食時には、メニューと食器の位置を

手を添えていただきながら、使われている食材についてもお伝えした。時にはクロックポジションを用い、イメージをつかんでもらえるよう留意した。

自宅アパートの部屋が3階であること、階段の一段の高さが高めで一部螺旋状になっているため、昇降時の声掛けや螺旋部で手すりを持ち換える場所を一定にし、感覚を変えないようにする介助の方法についても職員間で確認を行った。

実際の支援において、自宅アパートの階段を降りる際に左足のふくらはぎが階段の縁に擦れる様子があったため、朝・夕のミーティング時に情報共有を行い、擦れないよう適切な位置に足が出ているか、目視、声かけを行ない改善していった。

## VI 考察

歩行介助や食事の支援については基本的な部分の統一であったが、職員の誰もが同じ支援を提供できることで安心感につなげることができたと思う。チームとして、他に視覚障がいの方がこられても、統一したケアができると感じた。階段昇降については、階段の幅も少なく、踏み外しの恐怖からA氏の感覚だけでは正しい位置に足を出すのが難しかったと思われる。近くの席の方々とは会話がはずみ、笑顔や笑い声も聞かれるなど、楽しまれている様子がうかがえる。しかし、目の状態については不安を抱えておられ、個浴で入浴時、「もっと見えなくなってもきていいの？」と言われていた。見え方にかかわらず利用を続けられることをお伝えするとともに、今後も信頼を裏切ることのないよう、安心して過ごしていただける場を提供していきたいと感じた。



題名	「うちの母元気ですか」に伝えるために ～感染対策中の家族連絡の取り組み～		
法人名	社会福祉法人 湖星会	事業所名	特別養護老人ホームラースール金沢文庫
発表者	石谷万代	共同研究者	
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

新型コロナウイルス感染症の対策にて大半の介護施設が面会制限を余儀なくされた。当施設でも例にもれず2020年2月より面会制限を開始した中で、200床の大型施設におけるご家族への状況報告の必要性について考え、工夫して実践した事を報告する。

## II 目的

突然絶たれてしまった面会というつながりを補う為、連絡票を通じて200名の利用者の日常生活をお伝えし安心して頂く。体調変化の報告や不足物品の依頼などコミュニケーションをまめにとり、ご家族と職員の間信頼関係構築を図る事を目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年3月～2022年5月

### 2. 研究対象

研究期間内に特別養護老人ホームラースール金沢文庫を入所利用された329名の利用者およびそのご家族（新規入所・退所者を含む）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

各ユニットでそれぞれの利用者の日常の様子や体調の変化がわかるように連絡票を作成し、毎月ご家族に送付する。それに対して頂いたご意見や感想、課題などをまとめる。

## IV 倫理的配慮

発表における写真等の掲載については利用者、ご家族に趣旨を説明し、同意を得ている。

## V 結果

面会制限直後より「元気にしていますか」「変わらないですか」といった利用者の状況を確認する連絡が相次ぎ、一時は一日30件近い問い合わせに各職種が対応していた。200床の大型施設で全ての利用者に電話連絡を行なう事が難しく、併設のショートステイで

使用していた退所時連絡票を元に、利用者の状況を伝える連絡票作成を開始した。ユニット介護職員、フロア担当看護職員、機能訓練指導員、介護支援専門員が協力して用紙に記入を行ない、生活相談員、事務員が発送作業を担当した。今までになかった業務が増えた事で職員の負担感が現れたが、各チーム内で報告様式を忙しい業務の合間でも作成できるよう工夫し、継続している。2021年2月に施設でクラスターが発生した際は一時送付を中断した事もあったが、以降は継続的に送付を行ない、「様子がわかった」「わざわざ問い合わせるのも気が引けるので助かる」といったご意見を頂きおおむね好評いただいている。また、利用者の状態のみを問い合わせる電話連絡は、連絡表送付を始めてからはほぼ無くなった。職員と顔を合わせる機会も少ない中、「あのコメントを書いてくれた人」として親密感を感じていただけている方もみられている。

## VI 考察

面会制限下で200床の大型施設で生活されている利用者の様子をたくさんのご家族にお伝えしたいという気持ちで一方的な報告として連絡表を始め、現在は連絡票に記入されていた事に対してお返事や感想、アドバイスを頂くなど相互のコミュニケーションツールとしても大きな役割を果たしている。

どうしても職員の作業負担が課題として残るが、書式の工夫や発送作業の分担などチームで取り組み、今後もやりやすい方法を模索していく事で継続可能と考える。コロナ禍でやむを得ず始めた対応ではあったが、遠方に住んでいる方、高齢の方など元々面会に来づらかった方から特に好評いただく結果となった。また、職員としても日頃のケアをご家族にお伝えする貴重な機会と捉えており、新型コロナウイルス感染症が終息したとしても連絡票の送付は継続していきたい。



題名	図書委員会発足！～私が図書委員よ！～		
法人名	社会福祉法人草加福祉会	事業所名	クラシックレジデンス江戸川台
発表者	佐藤 勝太	共同研究者	立浪 恵美子 石山 ゆき
サービス種別	住宅型有料老人ホーム		

## I はじめに

当施設では利用者の希望により、近隣の図書館から本を借りて利用者に貸し出していたり、施設で購入したのものや、利用者より寄付された本をまとめた本棚を開放したりしていた。そんな中、A氏より本棚の本の貸し借りの管理を行いたいと自ら申し出があった。

## II 目的

本の貸し借りの管理と図書委員会活動を通じて身体機能・認知機能が変化するかどうか検証する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年12月～2022年6月

### 2. 研究対象

A氏 70歳代女性 要支援2 歩行器使用  
短距離なら自立歩行可。認知症状無く、年相応の物忘れはあるが短歌を詠むこと、読書・おしゃべりが好き。

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 月一回開催の図書委員会会議に参加し、活動内容について意見を述べてもらう
- 2) 職員が作成した図書カードの切り出し、貸し出し用本への貼り付け
- 3) 施設内に掲示する会報の文面の作成
- 4) 他の利用者へ書籍について紹介してもらう

評価尺度

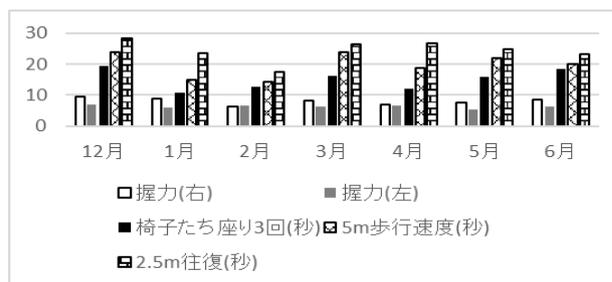
- 1) 改訂長谷川式簡易知能評価スケール
- 2) 体力測定
  - (1) 握力
  - (2) 椅子立座り三回
  - (3) 5m歩行速度
  - (4) 椅子から立って2.5m往復

## IV 倫理的配慮

今回の発表に使用される情報についてA氏及びそのご家族へ説明、承諾を得る。

## V 結果

表1. A氏の体力測定結果



長谷川式簡易知能評価スケール

12月：21点 3月：28点 6月：23点

体力については、12月から3月にかけて向上が見られたがその後3月～6月にかけては緩やかな低下がみられた。認知機能については、12月～3月にかけて向上が見られたが、3月～6月で下がってしまった。

## VI 考察

今回の活動に際して他の委員会メンバーと協力して仕事にあたっていたこと、A氏が委員会の広報活動をおこなっていたことが認知機能に良い影響を与えていたと思われる。3月～6月で長谷川式の点数が下がったのは、委員会活動がひと段落した時期だからではないかと思われる。

身体機能、認知機能ともには大きな変化は見られなかったが、普段居室で静かに本を読むことが多かったA氏が本を借りに出てきたり、他者と会話する機会が増えたりと、QOL (Quality of life) の向上につながったと思われる。また本棚を通じて交流した他の利用者にも良い影響を与えたと思われる。

### 【引用・参考文献】

- 1) 地域高齢者における認知機能低下の関連要因：横断研究 2016



題名	多職種連携による就労までのプロセス ～50代からの再出発～		
法人名	医療法人 北辰会	事業所名	居宅介護支援事業所みらいあ
発表者	上江洲弓恵	共同研究者	倉橋尚子 星野明美
サービス種別	居宅介護支援		

## I はじめに

当法人内での事業所において就労を目的としたケースが過去数件と少ない。A氏は高次脳機能障害により、発動性の低下や時間・記憶の定着が困難であった。多職種連携を図ることで代償手段の獲得ができ、就労という社会復帰に繋がった取り組みを報告する。

## II 目的

就労支援における連携を明らかにし、他の人にも活用できるようにしたい。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年5月25日～2021年12月18日

### 2. 研究対象

A氏：2020年10月くも膜下出血発症、高次脳機能障害を呈した50歳代、男性。言語障害なし。要介護4。清掃員勤務歴あり。通所リハビリ・通所介護・訪問リハビリを利用。

### 3. 具体的方法

#### 1) 導入期：事業所間の支援方法統一

- (1) 軽作業を組み込んだタイムスケジュールを作成し、自分で気づけるようアラームを活用。
- (2) 職種間の連携で統一した声かけ対応を周知

#### 2) 就労準備期：事業所間の問題点把握と連携

- (1) 進捗状況を確認し適時にカンファレンス実施
- (2) 医療との連携：病状確認と就労時期の相談
- (3) 障害支援員と事業所の選定段階から連携
- (4) 家族と就労先の情報を共有し選定

#### 3) 就労移行期：就労関係機関との連携

- (1) 担当者会議の実施（就労支援B型開始時）
- (2) 就労先と通所リハビリと併用時期を作り支援方法の継続

#### 4) 評価尺度

A氏の行動変化・事業所の連携効果

## IV 倫理的配慮

本人及びご家族に対し、プライバシーを保護することを紙面を用いて説明し同意を得た。

## V 結果

1. 管理された環境であればアラーム行動の習得が図れ、6時間のタイムスケジュールが可能な状態で依頼された軽作業をこなすことができた。退院後約7ヶ月で就労支援B型に移行できた。
2. 介護支援専門員を中心に、事業所間のカンファレンスでは目的とA氏の目標を確認し、常に統一した目的意識を持てた。
3. 就労先でも代償手段方法が継続できた。
4. 医療から介護、通院まで法人内の事業所を利用し日常的に声かけ・訪問し「顔の見える」連携でチームケアを実践できた。
5. 家族もチームとしての役割が明確だった。

## VI 考察

各事業所内だけでなく、利用する通所サービスにて支援方法の統一を図ったことは、本人の混乱を防ぎリハビリの効果が倍増した。このことにより、段階に適した支援ができ、円滑な就労への移行が図れたと考察する。

「高次脳機能障害者への就労支援では複数機関の連携が重要となる。」<sup>1)</sup>と述べられている。特にマネジメントをおこなう介護支援専門員は、常に変化を捉え他者へ伝える・各関係機関を繋げ、一つのチームを作る役割をしていく必要がある。

今後は、より一般的に就労支援が行われるようにカンファレンスの開催方法を構築し、モデルケースにしていくことが当法人の課題である。

## 引用文献

- 1) 高次脳機能障害の就労支援を考える  
Jap j Rehabil Med 2020 ; 57 : 329-333



# 研究発表会

《ROOM 2》

抄録

9月13日(火)

## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 2 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10:00 10:15	株式会社 スマイルパートナーズ	理念と現実とお客様の思い～現実と理想の狭間で... ～	大平 隆史	31
2	10:15 10:30	社会福祉法人 ひがしの会	オムツずらしをなくそう！朝までぐっすり眠れるように	久保 雄太	32
3	10:30 10:45	医療法人財団 百葉の会	脊髄梗塞後排尿ケアチームが関わり ADL の拡大と行動療法により排尿自立した症例	大石 芙美	33
4	10:45 11:00	社会福祉法人 湖成会	プリストルスケールの活用 ～排便コントロールの意識の変化～	西村 美代子	34
11:00 11:15		休憩 (15分)			
5	11:15 11:30	医療法人財団 百葉の会	重介助者に対する多職種のとりくみ	戸塚 諒太	35
6	11:30 11:45	医療法人社団 緑愛会	弱視でも楽しく過ごして頂く為に	佐藤 恵美子	36
7	11:45 12:00	社会福祉法人 カメリア会	さよなら褥瘡、おかえり笑顔	山下 恭兵	37
8	12:00 12:15	医療法人社団 平成会	正しい姿勢で褥瘡改善！！	渡邊 奈美	38
12:15 13:15		休憩 (1時間)			
9	13:15 13:30	社会福祉法人 草加福祉会	わたしたちの看取りケア ～より良い湯灌に向けて～	前田 眞也 太田 友樹	39
10	13:30 13:45	社会福祉法人 大和会	看取りプランの実践～職員の意識変化の考察～	小山 恵子 山内 貴史	40
11	13:45 14:00	医療法人財団 百葉の会	「最期まで通って頂きたい」 ～地域で必要とされるデイサービスを目指して～	塩川 留美	41
12	14:00 14:15	社会福祉法人 湖星会	私たちの考える看取りケア ～寝たきりから離床へ～	鎌田 隆成	42
14:15 14:30		休憩 (15分)			
13	14:30 14:45	社会福祉法人 湖星会	父ちゃんがんばれ！！ ～利用者と家族双方を支える取り組み～	橋本 剛希	43
14	14:45 15:00	株式会社 テイクオフ	私たちだからこそできる自律神経へのアプローチ ～私、外出は億劫です～	金田 明	44
15	15:00 15:15	社会福祉法人 白山福祉会	外国籍人財採用・育成とボーダレス化による健康経営 (SDG s) の相関関係	三和 賢人 藤井 幸代	45
16	15:15 15:30	社会福祉法人 湖成会	「西部包括通信」の4年間～効果とこれから～	谷本 亜紀奈	46

題名	理念と現実とお客氏の思い～現実と理想の狭間で... ～		
法人名	(株)スマイルパートナーズ	事業所名	ケアセンターとこしえかのん
発表者	大平 隆史	共同研究者	桑原 美香
サービス種別	小規模多機能型居宅介護		

## I はじめに

一人暮らしのA氏は70歳代に腰椎圧迫骨折を患い、近所の方々より支援を受け生活していた。廃用症候群が進み経口摂取困難、意識混濁となり入院。退院後、A施設を泊り中心での利用となった。筋力低下に伴い立位がとれず、ベッド上での生活オムツ内排泄となった。利用後活力が戻り笑顔も増えてきた。少しずつできることが増えた中で「せめて便だけでもトイレでしたい!」という本人の思いを知る。浮腫が強く、皮膚も弱い環境の中本人の思いを叶えるため、ケガをさせたくないと思う職員のケアへの意識の変化も検証していきたい。

## II 目的

1. A氏がトイレで排泄が出来るようになる
2. A氏の状態を理解し、統一した支援ができるよう職員の意識の変化等検証していく。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年5月15日～2022年7月15日

### 2. 研究対象

A氏 女性 要介護4 80歳代  
 障害高齢者の日常生活自立度 C2  
 認知症高齢者の日常生活自立度 I  
 既往歴 腰椎圧迫骨折 慢性腎不全  
 気管支喘息 心不全疑い

### 3. 具体的な方法

- 1) 排泄誘導へ向けての職員同士の思いをまとめ、ケアの方向性を決める。
- 2) A氏の浮腫の状態、外傷リスクの高さ等理解するため浮腫の勉強会を行う。
- 3) 安全性の高いケア方法を共有する。
- 4) A氏の可能な範囲で筋力増加を目指す。

## IV 倫理的配慮

家族に事例研究の発表と写真等を使用する旨許可を頂く。当研究はチームケア学会のみで使用することを説明し同意頂く。

## V 結果

1. 外傷リスク、本人の思いそれぞれA氏を思っでの話し合いの結果リスク回避、技術の向上を目指し全員で同じ方向を向き動き出すことができた。
2. 病状、浮腫の状態を知ることで日々の離床時間、皮膚の保護など検討し対応できた。
3. トイレ誘導に対する介助法の情報共有、ケアの統一を行い実践できた。
4. ベッドでの足上げ、足首の運動など本人のできる動きを毎日実施し出来た。

## VI 考察

結果的には限られた職員のみでの介助となった。寝たきりのA氏を車椅子乗降時に10針ほど縫う大けがを負わせてしまったことで職員間のケガに対する思いが強くなり、ケガの事を考え安全第一にと考えケアが守りに入った。A氏の「ケガなんてしたっていい!それよりトイレで座ってしたい!」との強い思いに寄り添った時、ケガをさせたくないという職員間の考えを見直し、話し合い、学び、最大限のリスク回避と情報共有を行い、同じ方向を向くことでチームとして動く大切さを学んだ。お一人おひとりの思いを叶えるためのケアとは?を原点にこれからも取り組んでいきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 高齢者のむくみは病気の可能性?, 閲覧日 2022年6月1日, <https://www.mcsjg.co.jp/kentatsu>



<b>題名</b>	オムツずらしをなくそう！朝までぐっすり眠れるように		
<b>法人名</b>	社会福祉法人 ひがしの会	<b>事業所名</b>	特別養護老人ホームみゆき
<b>発表者</b>	久保雄太	<b>共同研究者</b>	松橋舞
<b>サービス種別</b>	介護福祉施設		

## I はじめに

A事業所に入所されているA氏は、臥床されて就寝している際、夜間オムツずらしがあり、服を汚染されている事が多い状況である。A氏が就寝中に気持ち悪い思いをさせない為になぜオムツずらしの行動につながるのか原因を知る為の研究を行った。

## II 目的

本研究の目的は、オムツずらしの原因を追究して朝までぐっすり眠れる事が目的である。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年1月16日～2022年5月15日

### 2. 研究対象

A氏 90代 女性 介護度3 アルツハイマー型認知症 車椅子全介助 トイレ定時誘導

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

#### 1) 2022年1月16日～2022年3月15日

「夜間睡眠表」を作成し、覚醒されている時間帯、良眠されている時間帯を把握する。

#### 2) 2022年3月1日～2022年5月15日

夜間の睡眠状況を把握した上で、定時のパット交換、状況に応じたポータブルトイレ誘導、オムツアドバイザーと連携を行い、やり方を工夫する。

#### 3) 夜間の睡眠状況を把握し、パット交換の工夫を取り入れてからと取り入れてない時の比較をする。

## IV 倫理的配慮

本研究の対象となるA氏のご家族様へ、個人情報の取り扱いについて、口頭と書面の両方で同意を得た。

## V 結果

1. 1月16日～3月15日の夜間睡眠表にて、どの時間帯にオムツずらしが多いか調べ23時～0時に多かった。

表1 夜間睡眠表(時間別オムツずらしの回数)

日付	時間	20	21	22	23	0	1	2	3	4	5	6
1月16日		3	4	0	6	12	2	1	2	3	2	2
3月15日												

2. 3月16日～4月15日に23時～0時までにパット交換を行った。オムツずらしがなくなる事はなく、交換して1時間後にずらしている事があった。その際パットは汚れておらずシートが尿で汚染していた。ポータブルトイレも誘導してみたが排尿がなくオムツずらしはなくならなかった。

3. 4月16日～5月15日の間に今の状況をオムツアドバイザーに報告し尿測を1週間行い、残尿による原因と仮定した。そこで長めに座ってもらい腹圧をかけるよう指示され実施すると複数回排尿があり、朝まで覚醒することなく夜間オムツずらしはなくなった。

表2 夜間睡眠表(時間別オムツずらしの回数)

日付	時間	20	21	22	23	0	1	2	3	4	5	6
4月16日		0	0	0	2	0	0	0	1	1	1	5
5月15日												

## VI 考察

A氏はオムツずらしをする主な原因としては、寝る前の排尿をしっかり促せていなかった事と尿意を感じて無意識にオムツをずらし排尿してしまう事が考えられる。しっかり排尿を促す事で、睡眠の質が向上し、夜間のオムツずらしはなくなった。朝方は覚醒した際に、オムツずらしがある事があり、覚醒してすぐにトイレ誘導する事で朝方の失禁も減っている。この研究でオムツずらしの原因がわかり、夜間の失禁を減らす事ができ、朝まで眠れるようになった。

### 【引用・参考文献】

介護施設「ご利用者様のオムツ外し」の原因と対策  
4つのポイント解説

<https://miraihakawaru.com/causes-and-countermeasures-for-nursing-facilities-users-to-remove-di>



題名	脊髄梗塞後排尿ケアチームが関わり ADL の拡大と行動療法により排尿自立した症例		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	湖山リハビリテーション病院
発表者	大石英美	共同研究者	鈴木佑平 瀧口恵 小山香織
サービス種別	病院		

## I はじめに

脊髄梗塞は脳動脈に比べてアテローム性変化が少なく、側副血行路が発達しているため、脳梗塞の1/50～1/100の頻度で、比較的稀な疾患である<sup>1)</sup>。今回、脊髄梗塞後、排尿ケアチームが関わり排尿自立に成功した1症例を報告する。

## II 目的

脊髄梗塞を診断され膀胱直腸障害、尿閉のある患者に対する排尿ケアチームの関わりの過程と効果を報告する。

## III 方法

1. 研究期間 2021年6月10日～8月10日

2. 研究対象 70歳代女性A氏。急性発症の胸椎10以下の感覚障害、下肢筋力低下があり、MRI検査で胸椎12～腰椎1レベルに脊髄内高信号、腫脹、造影効果を認め、後脊髄動脈症候群と急性期B病院で診断後加療し、リハビリテーションを行っていた。疾患の続発症状には、下肢不全対麻痺、膀胱直腸障害、尿閉があり、尿道カテーテルを留置していた。

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

尿道カテーテル離脱1回目と2回目を、下部尿路機能障害の評価と下部尿路症状に対するキング健康調査票(King's Health Questionnaire:以下KHQとする)、尿失禁症状・生活の質評価質問票(International Consultation on Incontinence-Questionnaire:Short Form:以下ICIQ-SFとする)、日常生活動作(Activities of Daily Living:以下ADLとする)の介助量に対して、機能的自立度評価表(Functional Independence Measur:以下FIMとする)の点数で比較検討した。

## IV 倫理的配慮

院内規定による承認を得て、個人が特定されないよう配慮した。

## V 結果

下部尿路機能障害の評価は、排尿自立度が4点から0点へ減少し、排尿自立度が向上した。下部尿路機能は、7点から3点へ減少し、平均残尿量は346mlから73mlへ減少、下部尿路機能障害は改善した。FIM点数は、上昇し、ADLの介助量が減少した。ICIQ-SFは、尿漏れの頻度と昼間の尿漏れの量が減少した。質問票の聴取を通して、切迫性と腹圧性の混合性尿失禁を呈していた。KHQは、【全般的な健康感】【生活への影響】【心の問題】【睡眠・活力】の点数が減少し、生活の質(Quality of Life:以下QOLとする)が改善した。

## VI 考察

脊髄梗塞(後脊髄動脈症候群)は、稀な疾患で、治療法や再発予防についても確立したものはない。また、運動機能の障害に対して、谷口<sup>2)</sup>は「機能を回復するためのリハビリテーションと並行して排泄行為を再獲得するためには、ケアの力と環境整備が欠かせない」と述べている。現状の症状に対する問題から、行動療法の一つであるDIB(ディブ)キャップを活用するケアの力により、移乗動作に制限なく歩行訓練などの理学療法・作業療法に集中して取り組むことができた。また、居室内やトイレ環境を整備したことで、排泄動作における自己管理能力が向上した。さらに、質問票を通して、QOLの程度を知り得たことで、個人の課題が明確化した。

今後も、多職種が協働し、患者の望む生活像を目指し、関わりの過程と効果を検証していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 伊藤康信:脊髄血管障害(脊髄梗塞, 脊髄出血), 日本医事新報(4986), p52,2019
- 2)一般社団法人 日本創傷・オストミー・失禁管理学会編:排泄ケアガイドブック-コンチネンスケアの充実をめざして, 照林社, 第1版, 2017



題名	ブリストルスケールの活用～排便コントロールの意識の変化～		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	特別養護老人ホーム楓の丘
発表者	西村美代子	共同研究者	渡井啓真
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

利用者の快適な生活を支援するために、排便コントロールは大切なケアの一つだと考えられる。利用者の排便状況を詳しく、正確に把握するため、2020年3月末よりブリストルスケールの導入を行った。その結果、看護師と介護士それぞれの視点からの気づきがあり、より良い排泄ケアへと繋がったため報告する。

## II 目的

看護師、介護士間で共通の評価スケールであるブリストルスケールを用いた情報共有を行うことで、利用者一人ひとりの排便状況に応じたケアを行うことができる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年3月1日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

特別養護老人ホームA施設に入所の利用者

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

毎日の排便の有無にブリストルスケール評価と量を記入する

	1	コロコロ便	硬くてコロコロの糞糞状の便
	2	硬い便	ソーセージ状であるが硬い便
	3	やや硬い便	表面にひび割れのあるソーセージ状の便
	4	普通便	表面がなめらかで軟らかいソーセージ状、あるいは蛇のようなとぐろを巻く便
	5	やや軟らかい便	はっきりとしたしわのある軟らかい半分固形の便
	6	泥状便	境界がぼけて、ふにゃふにゃの不定形の小片便泥状の便
	7	水様便	水様で、固形物を含まない液体状の便

図1 ブリストルスケールによる便の性状分類

## IV 倫理的配慮

今回の研究に当たって、事例として取り上げる方の個人が特定されないことがないよう配慮した。

## V 結果

ブリストルスケールの活用により、看護師、介護士共に、排泄ケアに対する意識の高まりが見られた。そこから下剤だけに頼らない排便コントロールを、各職種が専門性を持ち寄ってチームで検討し、取り組むようになった。結果、利用者の生活全体の観察へと視野が広がり、本来の排泄ケアの目的である利用者の快適な生活の支援へと繋がることのできた。

## VI 考察

ブリストルスケールを活用した結果、それまでの職員目線の排泄ケアから利用者の個別性を重視した排泄ケアへと転換することができた。今後も多職種が一つとなり、利用者の生活が中心という共通の想いで、専門性を活かしながら協力して利用者の快適な生活を支援していきたい。

## 【引用・参考文献】

- 1) 西村かおる, コンチネンスケアに強くなる 排泄ケアブック, 株式会社 学習研究社, 2009年.
- 2) 榊原千秋, 排泄ケアのプロフェッショナルを目指す人のためのおまかせうんちッチ, 木星舎, 2019年.
- 3) 神山剛一, ブリストルスケールによる便の性状分類, 高齢者と介護者のための排泄ケアナビ, ユニ・チャーム排泄ケア研究所, 閲覧日 2022年6月13日, <http://www.carenavi.jp>



題名	重介助者に対する多職種のとりのくみ		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	介護老人保健施設 ききょうの郷
発表者	戸塚諒太	共同研究者	佐野宏美 池田亜弥
サービス種別	介護老人保健施設		

## I はじめに

胃瘻造設者やその家族が胃瘻造設後にも経口摂取の希望を持ち続けていることは多い。介護施設の80%が摂食嚥下訓練を行う予定はなく<sup>(1)</sup>、経口摂取に対する取り組みは少ない。既往の統合失調症により食思が低下し胃瘻を造設したA氏。多職種が連携し離床や発言内容、表情などを共有し関わったことで、A氏の食べたいという気持ちを取り戻すきっかけとなった。

## II 目的

多職種での取り組みを振り返り、他の入所者においても希望を叶える為のきっかけが掴めるようになる。

## III 方法

1. 研究期間 2021年10月12日～2022年5月31日

### 2. 研究対象

A氏、70歳代女性、要介護5 現病歴：脳梗塞  
研究開始時 食事：朝・夕に胃瘻を注入

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 発言内容や表情、しぐさの変化を共有。  
発言の経時的変化とそれに対する職員の対応を記録する。
- 2) 他事業所の言語聴覚士に摂食嚥下の評価依頼。  
経口摂取の状況を記録する。

## IV 倫理的配慮

ご家族様から情報の掲載の承諾を得ている。

## V 結果（2021年11月1日～離床開始）

発言の経時的変化とそれに対する職員の対応を表1に示す。

表1) 発言の経時的変化とそれに対する職員の対応

11月	A氏	「寝かせて」、「横になりたい」
	職員	離床の時間や環境を検討する。
1月	A氏	「靴を脱がせて」 「耳がかゆい」
	職員	どのタイミングでどのような要望が聞かれるのか職員間で周知する。

2月	A氏	「みんな食べてるね」、「おやつだね」
	職員	食事に関する発言が多く、経口摂取の希望ではないか等、カンファレンスで検討する。家族と情報共有する。
4月	A氏	「バニラがいい」 「抹茶はきれい」
	職員	家族と情報共有しながら食べられる物を検討する。
5月	A氏	「ありがとう」 「アイス食べさせて」
	職員	発言内容や経口摂取の状況を家族に伝える。

経口摂取の状況は

3月 言語聴覚士に評価依頼もコロナにより行えず。

4月28日 言語聴覚士による評価実施。おやつでのアイスの提供を検討する。

5月1日～ おやつにアイスを食べ始める。

## VI 考察

金子らは、経口摂取再開に取り組む何らかのきっかけの多くは患者、家族の両者、もしくはどちらかが経口摂取を望んだケースであった<sup>(1)</sup>、と述べている。今回、多職種が密にA氏の会話内容、表情の変化の共有が図れたことで、経口摂取再開のきっかけをつかむ事が出来たと考える。経口摂取の再開では、食事の時間や食事形態の検討に難渋するが、A氏においては他事業所の言語聴覚士に評価依頼をする事で解決した。今後も多職種で入所者の気持ちを共有し、法人内外の他事業所とも連携を取りながら、入所者の希望を叶えていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 檜原美恵子, 介護施設における摂食嚥下姿勢の現状と課題, 川崎医療福祉学会誌, Vol.30, No.2, 2021
- 2) 金子綾香, 在宅療養中の胃瘻造設患者における経口摂取再開のケースと摂食状況のレベルに関する要因, JJHS, Vol.21, No.4, 2019



<b>題名</b>	弱視でも楽しく過ごして頂く為に		
<b>法人名</b>	医療法人社団 緑愛会	<b>事業所名</b>	香紅の里
<b>発表者</b>	佐藤恵美子	<b>共同研究者</b>	甲斐真知子 宮下茜 笹原絵里
<b>サービス種別</b>	認知症対応型共同生活介護		

## I はじめに

A氏は、視力が弱く右目は全盲で光を感じる程度、左目は視力0.1程であった。自宅で過ごされていたが、2013年、被害妄想や短期記憶障害の症状が出始め2014年にアルツハイマー型認知症と診断される。徐々に自宅での生活が困難となり、2019年に入居となる。「ここが何処なのか」「誰と来たのか」などの不安を繰り返し話されることが多くあった。当初、ユニット内を覚えるまで職員が付き添いを行いながら徐々に慣れていただいたが、本人から見えないとの訴えがあり、付き添うだけでは解消されない不安があることに気が付いた。どうしたら不安を和らげ、自分の家のように過ごしていただけるのか、生活の中で工夫した結果を報告する。

## II 目的

グループホームへ入居した事で環境が変化し、行動範囲が狭くなり不安も大きくなったことを改善する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2019年8月～2022年6月

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 女性 要介護3  
認知症高齢者自立度Ⅲb 障害高齢者自立度B1  
アルツハイマー型認知症 視力障害 睡眠障害

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 弱視によって生じる生活の不安を直接本人から聴き取る。
- 2) 職員の弱視に対する理解を深める為、勉強会を開催する。
- 3) 現状を職員間で共有し、PDCAサイクルで回す。  
評価尺度：入居当時と現在の様子を比較する。

## IV 倫理的配慮

家族、本人に研究内容を説明し、同意を得ている。

## V 結果

1. 弱視についての勉強会を行い、弱視の方でも視野で対応が変わってくるのが分かった。A氏の視野を確認し、予想以上に広いと分かった。
2. 場所の説明と誘導を繰り返し行い、夜間は手すりに蛍光テープを貼ることで安全に移動できている。場所の間違いもなくなった。
3. 収納ケースに衣類の種類別で色分けし、標記を大きくすることで、自分で片づけができた。
4. 食事が減ってきたため、本人に聞き取りした結果、見えやすい色が白黒であることが分かった。黒いお盆に白い食器で提供したことによって食事が増えた。
5. 塗り絵の枠を太くし、歌詞カードは大きく濃く表示するなどの工夫で、集中して行えるようになった。

## VI 考察

この研究を通して、弱視だから自立できないという先入観に縛られたケアではなく、弱視でも自立して生活できるように、聞き取りと様子観察からPDCAサイクルを回すことによって、A氏のできる力と楽しさを引き出すことが出来た。現在「見えない」不安は軽減している。今後認知症の進行により不安が大きくなることも考えられるが、笑顔で楽しく過ごして頂けるようにアセスメントを実施し、その時の状態に適したケアを行っていきたい。また、利用者にとって必要な知識を得るために、今後も勉強会を開催してケアに取り入れていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 函館視力障害センターHP, 視覚障害について, 画像, 参照 2022年6月22日  
[www.rehab.go.jp/hakodate/explain.php](http://www.rehab.go.jp/hakodate/explain.php)



題名	さよなら褥瘡、おかえり笑顔		
法人名	社会福祉法人カメラア会	事業所名	カメラア藤沢 SST
発表者	山下 恭兵	共同研究者	熊谷 崇・根本 樹
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

入居者 A 氏の右踵に褥瘡が出来、今まで履いていた靴が履けなくなってしまった、笑顔が少なくなり「痛い」との発言が増えてしまった等、日常生活に変化が見られた為、改善するまでのアプローチを研究し、精査した。

## II 目的

褥瘡改善に至ったが、反省すべき点や改善点もあり、それらを含めた今回の事例を展開することで各職員が褥瘡発生から完治までのプロセスや、褥瘡発生予防の意識の向上に繋がるようにする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年12月1日～2022年4月5日

### 2. 研究対象

A 施設の入居者 1 名 (A 氏)

退院後、12月1日に発見 12月3日に右踵に 1.5 cm × 3 cm の褥瘡診断

### 3. 具体的方法

#### 1) 他職種との連携

- (1) リハビリ課へ右踵除圧のポジショニング相談。
- (2) クッションの選定を行い、右踵の除圧、定期的な体位変換を継続して実施。
- (3) 栄養課に栄養面にて相談、栄養補助飲料を夕食時 1 日 1 本提供。
- (4) 医務課と褥瘡部の処置時に写真撮影を実施。経過を写真使用し他職種とも共有。褥瘡経過シートの活用。

#### 2) ユニットでの対応方法の見直しと実践

ユニット職員に他職種とのカンファレンスの内容を共有し、ケアの統一を図る。その中で、ユニット職員から、右踵が今のクッションでは落ちて

しまうとの報告があり、その都度、クッションを修正。定時体位変換を継続的に行うことで他箇所での皮膚トラブル防止にも努め、写真を使用し職員にも共有。

#### 3) 食事摂取量減少の対策

退院後に食事量の減少が見られ、摂取方法についてユニット会議を開催し、以下の対策を実施。

- (1) 車椅子背部にクッションを入れ、前傾姿勢を保つ。
- (2) 足の踏み台を作り、両足が接地した状態で食べやすい環境を提供。
- (3) 踵部褥瘡の為、靴ではなくスリッパ着用。
- 4) 褥瘡経過シートに基づく評価、および経過写真を使い、月平均食事摂取量との比較を行う。

## IV 倫理的配慮

今回の研究にあたり、家族に写真等を含む個人情報の取り扱いについて研究発表以外の用途には使用しない旨を説明し、承諾を得る。

## V 結果

3月中旬ごろより「痛い」との訴えが無くなり、下旬には以前のように靴を履ける状態に回復。徐々に以前のように笑顔が戻る。他職種にも意見を求め、食事摂取方法も改善した結果、4月5日に右踵褥瘡完治。ご利用者は笑顔を取り戻すことが出来き、職員の意識向上にも繋がった。

## VI 考察

皮膚状態の経過を把握することが褥瘡防止にとって重要であるとともに、対応の過程で少しでも早い完治を目指す共通認識、情報共有を他職種間と持つことも大切であることを実感した。

### 【引用・参考文献】

なし



<b>題名</b>	正しい姿勢で褥瘡改善！！		
<b>法人名</b>	医療法人社団 平成会	<b>事業所名</b>	グループホーム 希の家
<b>発表者</b>	渡邊奈美	<b>共同研究者</b>	芳賀かおり
<b>サービス種別</b>	認知症対応型共同生活介護		

## I はじめに

今回の対象者 A 氏は、11 月に居室内にて転倒し、右大腿骨頸部骨折され、終日車椅子での生活となり尾骨部に褥瘡が出来てしまった方である。褥瘡改善の為、主治医、看護師、職員で試行錯誤に対応するが、悪化するばかりであった。しかし、褥瘡専門の医師及び作業療法士から正しい処置やポジショニングの指導を受け、褥瘡部は劇的に改善された。このことは、自事業所だけではなく、施設や在宅で生活されている高齢者の方々の褥瘡改善に役に立つ情報であると認識し、自事業所から発信できればと研究に至った。

## II 目的

褥瘡の改善が出来、本人の痛みの緩和と日常生活を安心して生活を送れる様にする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021 年 12 月下旬～2022 年 7 月 20 日

### 2. 研究対象

A 氏（80 歳代女性、要介護 5）

既往歴：大腸がん、アルツハイマー型認知症

右大腿骨頸部骨折（温存治療）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

#### 1) 患部の測定

毎日褥瘡処置を行うと共に、毎週、患部を写真撮影し、併せて大きさを測定し主治医へ報告。処置方法について変更等指示を頂き経過観察する。

#### 2) 食事の見直し

A 氏の食事摂取量を分析し、不足している栄養を摂取出来る様にしていく。

#### 3) 専門医及び作業療法士からの助言

- (1) 専門医より処置の方法の指導を受ける
- (2) 作業療法士によるポジショニング指導

#### 4) 実践

専門医及び作業療法士からの指導を職員間で周知し、自事業所にて実践する。2 週間毎に受診し経過を診察して頂く。

## IV 倫理的配慮

ご家族へ説明を行い、了承を得ている。

## V 結果

「尾骨部の褥瘡については、ポジショニングが最大の改善策である」と専門医より助言頂き、作業療法士からの指導のもと実践した結果、劇的に改善が見られた。本人からの痛みの訴えもなく、現在は、穏やかに日常を生活されている。

表 1. 月毎の褥瘡の大きさの変化

月	大きさ（縦×横）	深さ	処置
12 月	3mm×4mm	表皮剥離程度	アケセル AG 使用
1 月	6mm×8mm	深さ無し	アケセル AG 使用
2 月	13mm×15mm	1mm 程	アケセル AG 使用
3 月	11mm×4mm	3mm	シュガーパスタに変更
4 月	10mm×13mm	5mm	シュガーパスタにて処置
5 月	12mm×13mm	7mm	カデックス軟膏に変更
6 月	5mm×7mm	4mm	シュガーパスタに変更
7 月	5mm×7mm	2mm	シュガーパスタにて処置

## VI 考察

尾骨の褥瘡に対しては、臥床時間を設けての除圧が重要だという事は間違った認識であったことがわかった。臥床時間を設けることによって、本人の余暇活動の時間が奪われ、意欲低下に繋がる可能性もある。褥瘡に対する正しい知識とポジショニングにより、褥瘡は予防出来るという事を改めて気づかされ、このことについては、自事業所だけでなく沢山の方にとって頂き、利用者の大切な日常を守っていきたく強く願う。



題名	わたしたちの看取りケア～より良い湯灌に向けて～		
法人名	社会福祉法人草加福祉会	事業所名	マナーハウス麻溝台
発表者	前田 眞也	共同研究者	水野 桃子 太田 友樹 山崎 優芽
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

湯灌とは、仏葬のひとつであり葬儀に際しご遺体を入浴し、納棺前にお体を清めることを指す<sup>1)</sup>。A施設では、2017年の開設当初から湯灌を看取りケアの一つとして実施している。しかし湯灌に対する研修やマニュアルがない為、職員間で湯灌の方法や知識に差があると感じた。課題を明確とし対策することで、より良い取り組みにしたいと考えた。

## II 目的

アンケートにより全職員の湯灌に対する意識や今後の課題を調査し、湯灌をより良い取り組みとすることを目的とした。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年5月13日から2022年5月31日

### 2. 研究対象

A施設の全職員 125名

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

日本語版ターミナルケア態度尺度とA施設で作成したアンケートを使用した。作成したアンケートでは、湯灌経験の有無や職種、経験年数と意見を集計し、全職員の湯灌に対しての意識を調査した。

## IV 倫理的配慮

全職員に対しアンケートを集計する際、本研究の説明と、アンケート結果は当研究発表にのみ使用する事を書面にて説明し、同意を得て調査を実施した。

## V 結果

日本語版ターミナルケア態度尺度の結果(表1)から、A施設の平均値は先行研究における平均値109.9と比較し低かった。もう一方のアンケートの結果(図1)から、湯灌経験者は湯灌に対し「賛成」又は「どちらか」というと賛成が多かったことに対し、湯灌未経験者では「どちらともいえない」が多く、またアンケート

内の自由記載から「どのように湯灌が行われているのか見たことが無くイメージがしにくい」という意見が多くみられた。

表1 日本語版ターミナルケア態度尺度 (回答数118件)

	総得点	下位尺度 I	II	III
満点	150	80	65	5
A施設の平均値	91.7	42.8	45.1	3.7
先行研究の平均値	109.9			

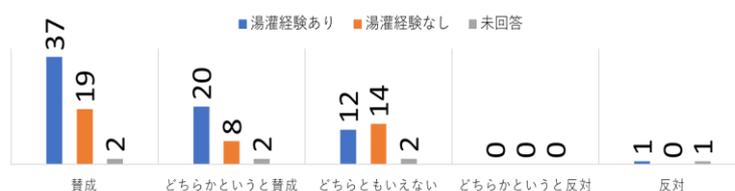


図1 湯灌経験の有無で分類した、湯灌の賛成反対

## VI 考察

日本語版ターミナルケア態度尺度の結果から、A施設では看取りを迎える方へのケアの前向きさと患者家族を中心とするケア(総得点)が低い<sup>2)</sup>と考えられる。もう一方のアンケートの結果から、湯灌未経験者は勤続年数の少ない職員が多く、これにより湯灌の目的や方法を十分に知らないため、湯灌に対し「どちらともいえない」が多いと考えられる。

このことから今後、全職員へ本アンケート結果の共有、湯灌未経験者に対し湯灌の目的や実施方法を共有する場を設ける必要があると考えられる。

### 【引用・参考文献】

- 1) 宮田澄子ら 介護施設における湯灌(死後の入浴ケア)の意義 厚生省の指標第64巻第1号 2017年1月発行
- 2) 中井裕子ら Frommelt のターミナルケア態度尺度 日本語版の因子構造と信頼性の検討-尺度翻訳から一般病院での看護師調査、短縮版の作成まで- がん看護 723-9 2006年11月発行



題名	看取りプランの実践～職員の意識変化の考察～		
法人名	社会福祉法人大和会	事業所名	特別養護老人ホーム和光園
発表者	山内 貴史	共同研究者	小山 恵子 黒坂 留美子 三橋 礼子
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

A施設では看取りに対するアンケートを行うと、何かしてあげたいが、何をしたいかわからないという結果がでた。そこで個のニーズに合わせたプランを作成し、可視化することで寄り添ったケアが行えると考え取り組んだ過程を報告する。

## II 目的

利用者・ご家族の要望を把握することで、その人らしい最期を迎えられるよう職員の意識が変化し、看取りプランが作成できる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年12月～2022年6月

### 2. 研究対象

A施設福祉課職員46名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 取り組みの前後で職員に看取りに対してのアンケートを実施。
- 2) A施設の看取りについてと症例を用いてプランを立案できるように動画を用いた勉強会
- 3) 看取りプランの運用方法の作成と周知
- 4) 個別に情報を収集し、看取りプランを作成・実行し1か月単位で評価を行い、プランを見直す。

評価尺度

- 1) 職員の看取りに対する意識のアンケート調査
- 2) 看取りプランの立案状況

## IV 倫理的配慮

調査対象の職員に説明を行い同意を得ている。

## V 結果

1. 看取りの承諾を得た方全員に看取りプランを立案できるようになった。
2. プランを作成することはできたが、どの人も同じ

ような内容になり、個別に合わせたプランを作成することはできなかった。

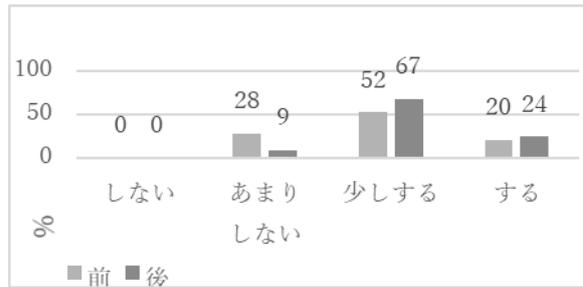


図1.看取りの方に対するケアの意識の変化

## VI 考察

今回勉強会を行ったことで何をしたらよいかの具体的な知識を増やすことにつながった。さらに、看取りプランの運用方法を作成し周知した。それにより知識と実際に行うことがつながり、プランの立案ができるようになったと考えられる。

実際に作成したプランはどの人も同じような内容であった。プランの作成・実行することに集中したことで、個別性まで重視することが出来ていなかったのではないかと思われる。また、個別に合わせたプランを立てるためには利用者・ご家族から要望や生活背景などの情報を収集する必要があるが、個別性への意識が足りなかったため個のニーズに合わせたプランを作成できなかったのではないかと考えた。

一方で、勉強会やプランを作成し、可視化したことで、フロア全体で看取りの人に対して意識が向くようになったと思われる。

今後は看取りの方に対して情報の収集や個人に対する意識を高めてよりその人らしい看取りができるようにしていきたい。

### 【引用・参考文献】

介護と医療研究会著，介護現場で使える看取りケア便利帖，翔泳社，2017，P16～29，P77～89



題名	「最期まで通って頂きたい」～地域で必要とされるデイサービスを目指して～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	デイサービスセンターアルク百葉富士宮
発表者	塩川留美	共同研究者	寺井須美子 森田岬
サービス種別	通所介護		

## I はじめに

「最期までデイサービスに通ってもらいたい」開設から20年、家族からこのような相談を何度となく頂いてきた。この地域で選ばれる理由、私たちが自信を持って行う寄り添うケアについて振り返り、考察し報告する。

## II 目的

入所、入院はしたくない。最期まで自宅で過ごしたい。家族、利用者の意向に寄り添うデイサービスについて考え、自然に笑顔が出る、喜ばれるケアについて発信、多職種連携の強さや必要性について水平展開し、デイサービスに通いながら在宅での看取りが可能であるという選択肢を確立する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2019年2月1日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 男性 要介護2→要介護4  
既往歴 認知症Ⅱa→Ⅳ 両膝変形性膝関節症

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) A氏の状態変化に合わせたケアについて、家族の要望などを職員会議や朝会にて職員へ伝達共有。
- 2) ケアマネージャーと密に情報共有を行い、最期までA氏らしく過ごすために、多職種連携(介護職・看護師・機能訓練士・栄養課職員・在宅医師・訪問看護師)の必要性や各職種ができるケアについて話し合った。
- 3) 1) 2) で話し合ったケアを実践した際のA氏の表情、奥様、同居家族の言動の変化を観察した。
- 4) 地域のケアマネージャーと職員にアンケートを実施した。

## IV 倫理的配慮

対象となる家族へ、本研究と研究発表の説明を行い

同意頂き、個人が特定されない様配慮した。

## V 結果

1. 奥様からは最期まで通えて良かったとの言葉を頂き、非協力的であった同居家族からは、暑くて辛いだろうと環境への配慮などの協力が得られるようになった。
2. 状態に合わせて多職種が情報共有し食形態の提案、見直しを行い、最期まで経口摂取する事ができた。
3. A氏の笑顔や感情を表す言葉を聞くことができた。
4. 在宅にて家族全員で看取る事ができた。
5. アンケート実施により地域のケアマネージャーがデイサービスに求めているケアと、私たちのケアが一致していることが明らかとなった。

## VI 考察

現在、自宅での最期を望む方が7割に対し、実際は病院等の施設で最期を迎える方が8割。自宅で最期を迎えられた方は1割程度である<sup>(1)</sup>ことから最期まで自宅だと希望があるのに叶っていない事が分かる。今回の研究により、利用者・家族の意向に寄り添い、多職種が連携しA氏らしさを重視したケアを行う事で、家族の満足度やデイサービスにおいて自宅では見られないようなA氏の表情や言葉も出現した。そして最期まで自宅で過ごすことができた。つまり、本ケースではデイサービスに通いながら在宅での看取りが可能である事が示唆された。デイサービスは在宅にて最期を迎える事を望む方のために必要な場所であり、私たちは今後も20年、地域で必要とされる施設を目指し家族、利用者へ寄り添っていく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 世界文化社(著), 在宅死のすすめ方 完全版 終末期医療の専門家22人に聞いてわかった痛くない、後悔しない最期, 世界文化社, 2021年



題名	私たちの考える看取りケア ～寝たきりから離床へ～		
法人名	社会福祉法人 湖星会	事業所名	特別養護老人ホームスターレイク仙台
発表者	鎌田隆成	共同研究者	
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

2022年3月に家族での介護が難しくなり施設での生活を望まれA氏が看取りにて入居され、同年6月にご逝去された。入居前は入院されており日常生活動作（Activity of Daily Living：以下ADLとする）は全介助、寝たきりの状態であった。入居当初はベッド上での食事介助を行っており、A氏がユニットフロアにて生活を送る機会はなかった。しかし、看取りケアを行っていく中で居室での生活がA氏にとって最善のケアではないと考え、ADLの状態を考慮しつつ離床させることとした。今回の事例では看取りの状態に入居されたA氏の入居からご逝去されるまでのユニットにおける看取りケアの取り組みの事例を報告する。

## II 目的

1. 「ユニットケア＝暮らしの継続」と考え、ユニット内で他の利用者との時間を共有してもらう。
2. 離床しリクライニング車椅子に座って食事をすることによって誤嚥のリスクを軽減する。
3. 食事の時間を認識してもらう。
4. 職員からの声がけによって生活の質の向上に繋げる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年3月11日～2022年6月17日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代 男性 要介護度4 看取り  
既往歴 2020年：脳梗塞

2021年：誤嚥性肺炎、尿路感染症、脱水

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 食事の際はリクライニング車椅子に移乗し、ユニットフロアにて食事を提供する。
- 2) 毎日の食事量を把握し、その変化を認識する。
- 3) A氏の日頃の様子の変化を把握し、ユニット

内で情報共有を行う。

## IV 倫理的配慮

A氏の家族に連絡を取り、本研究について説明し、同意を得た。

## V 結果

1. ユニットフロアで生活を送って頂くことによって孤立感を解消した。視点が変わることによって視界がひらけて視線が合うようになり他者との繋がりが生まれた。
2. 入居当初は食事前後の吸引が必要だったが、食後のみの吸引まで痰絡みが減少した。
3. 食事量の変化について

表1 1日3食の摂取量の平均値

	3月	4月	5月	6月
主食	54.4%	51.3%	66.6%	71.9%
副食	66.1%	69.7%	76.8%	83.0%
汁物	49.5%	71.6%	77.7%	85.5%

4. 離床することによって声掛けの機会やユニットフロアでの他の利用者の会話を聞く機会が増え、A氏の発語も増えた。

## VI 考察

私たちの考える看取りケアとは「その方らしさを尊重し、その方の日常生活の延長線上のケアを提供すること。」であると考えた。そのケアを実現させるために取り組んだことの1つが「離床」することに繋がり、その結果、他者との交流の機会の増加や食事量の増加に繋がったと考える。

A氏が離床し、食事を摂取することが出来たことは、A氏にあった残存機能が1番の要因である。看取りに対する先入観から「出来ない」と決めつけるのではなく、その方の能力を引き出すことが私たちには求められると感じた。私たち出来ることは限られているがその中で試行錯誤しながら取り組むことが出来た。



<b>題名</b>	父ちゃんがんばれ！！～利用者と家族双方を支える取り組み～		
<b>法人名</b>	社会福祉法人 湖星会	<b>事業所名</b>	デイサービスセンターオハナハウス
<b>発表者</b>	橋本剛希	<b>共同研究者</b>	高橋里美
<b>サービス種別</b>	認知症対応型通所介護		

## I はじめに

利用開始当時からA氏は「デイサービスには行きたくない」と何度も話していた。A氏は午後になると「今日はいつ帰るんだい?」「俺が来たって何もできない」と話されていた。家族からは口頭や連絡帳のメッセージ欄に「あんなにも頼もしい父が今では目も離せない状況です」と認知症が進む不安や戸惑いを毎回伝えていた。そこで私たちはA氏に楽しんでデイサービスに通って頂くこと、また家族の認知症介護の不安を和らげたいとの思いで取り組んだ事例について報告する。

## II 目的

家族の認知症に対する不安を減らすことができる。

A氏が楽しんでデイサービスへ通うことができる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年8月～2022年6月

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 男性 要介護3

既往歴：アルツハイマー型認知症 高血圧症

糖尿病 変形性腰椎症

生活歴：70歳まで土木関係の仕事に勤めていた。

その後は農業を行っていた。

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) 連絡帳や申し送りを通して家族と情報を共有する。

家族の心の変化を読み取る。

2) A氏を知り、楽しみを見つけ、行きたいと思える環境を作る。

## IV 倫理的配慮

本研究に際し、家族に書面での了承を得ている。

また、研究参加によって対象者の不利益や負担が生じないように配慮している。

## V 結果

1. ご利用当初は認知症に対しての不安や戸惑いは少

なかったが、徐々に不安や戸惑いを連絡帳や送迎時に伝えるようになった。その思いを受け止め、労いや励ましを送迎時や連絡帳を通して行った。前向きになられたり、落ち込んで受け入れられない状況を繰り返されていた。その中で、事業所の言い方や伝え方で家族に不快な思いをさせてしまったこともあった。

事業所で話し合いを行い、家族にも寄り添うこととして対応を継続していくうちに、家族がA氏の行動や発言を受け入れられ、冗談を言い合うなど認知症の介護を少しずつ理解できるようになった。

2. 職員がA氏を知ることで会話が生まれ、元気で働いていたことを思い出して気持ちが元気になり、施設に「仕事に行く」と出かける意欲が出てきた。工作や塗り絵が得意だとわかり、毎回作品を持ち帰ることが楽しみとなった。また、「あんた明日は来んのかい?」「あんた居ると楽しいんだ」と職員に話すようになった。しかし、午後になると「今日いつ帰るんだい?」と今でも心配する事がある。

## VI 考察

私達は今まで、利用されている利用者の満足を考え、家族に寄り添うことが足りなかった。今回の事例を通して認知症対応型通所介護の大切な役割の家族支援の大切さを実感した。

これからもA氏が自宅で安心して生活を続けて頂くために支援していきたい。

### 【引用・参考文献】

平成29年度福島県認知症介護実践者研修資料



題名	私たちだからこそできる自律神経へのアプローチ～私、外出は億劫です～		
法人名	株式会社 テイクオフ	事業所名	ケアステージおれんじあやめ通り
発表者	金田明	共同研究者	伊藤由佳
サービス種別	認知症対応型通所介護		

## I はじめに

あまり外出を好まれないA氏が2021年7月より認知症対応型通所介護を利用開始された。元々持病として頭痛があり、デイサービスをお休みされる事が多かった。私たちは認知症や季節性頭痛があるから、外出やデイサービスが億劫なのだと考え、季節性頭痛に良いとされる自律神経へのアプローチが効果的ではないかと取り組み始めた。研究途中で脳外科を受診し、頭痛の原因は季節性頭痛ではなく、脳下垂体腫瘍肥大の圧迫が原因で頭痛が起きている事が判明した。しかし、外出が億劫である以上に楽しみを持って頂きたい、デイサービスを楽しみにして予定通り利用して欲しいと継続して取り組んだことを報告する。

## II 目的

外出が億劫だと感じている方に個別的な関わりで認知症ケアを専門に武器としている認知症対応型通所介護を利用する事で馴染みの関係構築や生活リズムを整える事で、安定したデイサービス利用に繋げることを目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年10月23日～2022年5月31日

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 女性 要介護1 A2 IIb

アルツハイマー型認知症を2019年発症し、脳下垂体腫瘍があるが、手術はしない意向である。

認知症対応型通所介護を週2回利用

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 自宅にいるときの様子、頭痛薬の服薬状況、夕食摂取状況のデータを収集し生活リズムの把握を行う。
- 2) 朝、起きたら朝日を浴びる。
- 3) デイサービスでの体操やレク活動を活動的にを行い適度な運動を実施することで汗をかける

体を作る。

- 4) バランス良い食事の摂取と良質な睡眠を確保する。

## IV 倫理的配慮

今回の研究に関する目的、取り組みを本人、家族に説明し写真掲載及びデータ使用の同意を得ている。

## V 結果

家族と一緒に食卓を囲む事が多くなった。表情も豊かになり、家族間での会話が増えた。自宅での入浴も可能になった。頓服として主治医が処方している頭痛鎮痛剤の服用回数が減少している。

## VI 考察

「運動は体温が上昇するなどの変化で、身体にとってストレスがかかっている状態である。そのストレスに慣れておくことで自律神経が過度に働くことが少なくなると考えられる。」<sup>1)</sup> デイサービスを利用し、体操やレク活動を通して、程良く汗をかける身体作りを行う事が出来ている。体操に加え季節を感じられる手作り昼食や行事、他者との交流や関わりを通し、馴染みの関係性を築いた事で寝てばかりいた生活から活動的に過ごす事で生活リズムが整ったと考察する。その事で自宅以外にもご本人の居場所が出来たことが自己肯定感を生み、頭痛の訴え軽減に繋がったと考える。外出を好まれない方がデイサービスを活用することで、良いストレスと良い関係性を築き、活気ある生活を送ることが出来る様になった。その事が良質な睡眠に繋がったと推測することもできる。利用者の心身の健康は私たち事業者側の心身の健康も大きく影響する。そのため、デイサービスでの生活リズムを整えるためのアプローチは誰にでも有効的である。

## 【引用・参考文献】

- 1) 書籍：森本昌宏，頭痛撃退マニュアル，マキノ出版，2001. 2021.10.1 閲覧



<b>題名</b>	外国籍人財採用・育成とボーダレス化による健康経営（SDG s）の相関関係		
<b>法人名</b>	社会福祉法人白山福祉会	<b>事業所名</b>	全拠点
<b>発表者</b>	三和 賢人 藤井 幸代	<b>共同研究者</b>	なし
<b>サービス種別</b>	特別養護老人ホーム 短期入所生活介護 認知症対応型共同生活介護 小規模多機能型居宅介護		

## I はじめに

本研究のねらいとして、福祉業界の介護現場の人財不足が問われる中、新たな組織マネジメント手法を生み出し、利用者に対して長期的に安定したサービス提供を行うことができる体制づくりと、チームケアの土台となる各専門職の倫理的思考を主として組み立て、国内という狭い領域の視点からの脱却を問うことで、それが法人、施設経営にどの程度影響するのかを仮説及び事実に基づいて分析検証を行った。本研究における「チームケア」の捉え方は、現場レベルでみるものではなく、法人内組織全体で捉えた視点とした。

## II 目的

本研究の目的は、福祉業界の公益性（国際就労支援）ある取り組みであり、それが、社会福祉法人経営にどの程度インパクトを与え、そして社会的評価向上への寄与を意味し、結果、持続可能で安定したサービス提供につながるかという価値を生み出すこととなるかを問うこととなる。

## III 方法

1. 研究期間：2019.11～2022.6（2019～2021年度）
2. 研究対象：2019～2021年度の法人健康経営指標
3. 具体的方法（評価尺度を含む）

毎月、法人の健康経営指標として設定している項目のうち、①定着率、②離職率、③特定技能採用数、④外国籍職員在籍率、⑤派遣人件費を主とし、人材紹介会社経由で入職した日本人の在籍期間、日本人採用にかかった紹介料を指標にして、相関関係があるかを分析した。なお、ここで示す評価尺度の基礎条件として、日本人人財と外国籍人財の給与諸条件、他処遇条件は同等としている。

## IV 倫理的配慮

本研究の対象となるデータは、研究の具体的方法①

～⑤他を単に数値化したものであり、法人内就労状況のデータについては、個人やその属性を特定するものではないことを記載する。

## V 結果

年度	2021	2020	2019	2018
定着率	87.4%	80.1%	85.5%	91.2%
離職率	17.2%	55.3%	22.9%	24.1%
日本人人財	17.0%	55.1%	22.9%	24.1%
外国籍人財	0.2%	0.0%	—	—
外国籍人財採用数	48名	9名	0名	0名
外国籍人財割合	13.2%	4.0%	0.8%	1.3%
派遣人件費（千円）	27,625	46,216	74,821	108,836
人材紹介経由の1年以内退職率（日本人）	68.2%	91.2%	93.2%	96.0%

※外国籍人財の母数が大きくなるほど、離職率が低下していく結果となった。（日本人採用の減少）

※人材紹介経由で就労している者（日本人）の1年以内の退職率が低下していく結果となった。

※離職率の最も低下した2021年度においては、日本人が17.0%（日本人）、0.2%（外国籍）となっており、0.2%となった外国籍人財については、国際結婚による遠方への転居が離職理由。

## VI 考察

本研究結果から、国籍を意識しない採用手法への切り替えが離職率、就労現場の安定化と何かしら相関関係にあるのではないかと考えられる。また、介護福祉士受験の合格率など、日本人全体を含めた全体の合格率と各国出身者の合格率を比較して更なる相関関係を今後探っていくことを進めていく。

### 【引用・参考文献】

参考文献 なし

参考データ 社会福祉法人白山福祉会



題名	「西部包括通信」の4年間～効果とこれから～		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	特別養護老人ホーム
発表者	谷本亜紀奈	共同研究者	野木裕子
サービス種別	西部地域包括支援センター		

## I はじめに

A市西部地域包括支援センター（以下：西部包括）は、2018年4月よりA市からの委託を受け始動した。開設当初より、総合相談窓口としての周知と介護予防・権利擁護の情報発信を目的として、毎月、西部包括通信の発行を行っている。民生児童委員、居宅介護支援事業所のケアマネージャー、寄合処、公民館が主な配布先となっている。

## II 目的

4年間の配布によりどのような成果が得られたのかを検証し、今後のより効果的な活用方法を検討する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2018年4月1日～2022年5月31日

### 2. 研究対象

地区民生児童委員（19名）、地区民生児童委員（22名）、居宅介護支援事業所ケアマネージャー（6名）、寄合処（5名）、寄合処（10名）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 民生児童委員及びケアマネージャーへアンケート用紙を用いて匿名でアンケートを実施した。
- 2) 寄合処の参加者に対し、聞き取り調査を行った。

## IV 倫理的配慮

対象者には本研究の説明を行い、同意を得た。不参加でも不利益を被ることのない旨を説明した。

## V 結果

アンケートの「西部包括の情報が浸透したと感じる」は、はい38.3%、いいえ6.4%、どちらでもない55.3%の結果となった。

アンケートの「楽しみにしている記事内容」の項目では、最も多い順に、健康情報、脳トレ、認知症に関する情報、介護保険や包括支援センターに関する情報、介護予防、詐欺や消費者被害啓発（権利擁護）、の結

果となった。

民生児童委員及びケアマネージャーの記述回答欄より、「配布先から、毎月脳トレを楽しみにしていると言われる」「話のきっかけになるので毎月の訪問時に活用している」「健康情報が役に立つ」との意見が多くあった。また、ケアマネージャーの記述回答欄には、健康情報をケアマネジメントに活用しているとの記載があった。

寄合処の聞き取り調査では、脳トレの記事を活用する頻度が多かった一方で、西部包括の名前や総合相談窓口であることは浸透していなかった。

## VI 考察

総合相談窓口としての周知において、西部包括通信は十分な効果があったとは言えない。今後は配布方法を含め、周知方法を改善する必要がある。

楽しみにしている記事内容のアンケート結果より、西部包括通信は、寄合処での活用や、民生児童委員の活動ツールといった、地域のコミュニケーション活性化の意味での地域づくりに役立っていると言える。

家庭外において情報入手の出来る身近な場、もしくは情報交換の可能な空間が求められている<sup>(1)</sup>ことから、西部包括通信の発行を継続することで、高齢者にとっての身近な情報入手の機会であり続けると共に、より一層内容の充実化を図っていきたい。

### 【引用・参考文献】

- ・井原徹, 地域高齢者の日常生活における生活要求と情報要求の特性, 日本建築学会計画系論文集, 第558号, 2002.8, P167-174.



# 研究発表会

《ROOM 3》

抄録

9月13日(火)

## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 3 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10:00 10:15	医療法人財団 百葉の会	安心・安全なグループホーム ～その為に私達が取り組んだこと～	髭 陽世	49
2	10:15 10:30	株式会社 日本ライフデザイン	転倒を 방지、お住まいで安全に過ごしていく為に ——センサー導入事例より——	蒔田 圭	50
3	10:30 10:45	社会福祉法人 草加福祉会	身体介助による外傷の減少をめざして ～動画活用による適切な介助法の習慣化～	北村 由佳	51
4	10:45 11:00	社会福祉法人 苗場福祉会	転倒・転落事故における環境改善の有効性についての考察	藤川 竜馬	52
11:00 11:15		休憩(15分)			
5	11:15 11:30	株式会社 テイクオフ	牛乳を使った便通改善～運動との相乗効果～	原田 繁	53
6	11:30 11:45	医療法人財団 百葉の会	トイレに行きたい～日々の取り組みと課題～	八木 ひとみ	54
7	11:45 12:00	社会福祉法人 苗場福祉会	便秘は食物繊維だけでは解消しない?～咀嚼と腸内細菌との 関連について～	高橋 巽	55
8	12:00 12:15	医療法人社団 日翔会	下剤に頼らない、自然排便を目指して	足立 奈津美	56
12:15 13:15		休憩(1時間)			
9	13:15 13:30	社会福祉法人 緑愛会	多職種連携により褥瘡治癒に至った事例～施設外部との連携 含む～	中村 香南子	57
10	13:30 13:45	医療法人財団 百葉の会	有料老人ホームにおけるドライスキンの原因追求とケア改善 の一症例	栗田 美沙	58
11	13:45 14:00	社会福祉法人 緑愛会	皮膚状態改善に向けて～緑愛会昨年発表研究の水平展開	廣田 雄人	59
12	14:00 14:15	社会福祉法人 平成会	スキンケアによる帰宅願望軽減	日下部 映吏	60
14:15 14:30		休憩(15分)			
13	14:30 14:45	医療法人社団 緑愛会	最期は家で迎えたい～その思いを叶えるために～	須藤 幸	61
14	14:45 15:00	医療法人財団 百葉の会	学び合うチーム作り～よりよい接遇を目指して～	中村 真穂	62
15	15:00 15:15	医療法人社団 湖聖会(東京)	スタッフ同士で褒めることを文化に ～みんなが認めるベストケア〇〇～	成田 博敬	63
16	15:15 15:30	医療法人財団 百葉の会	お客様の夢をもっと叶えよう ～Dreams come true～	小林 千幸	64

題名	安心・安全なグループホーム ～その為に私達が取り組んだこと～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	グループホームわたしの家
発表者	髭陽世	共同研究者	石澤いづみ
サービス種別	認知症対応型共同生活介護		

## I はじめに

2ユニットのAグループホームで働いている著者（以下著者）が、2019年9月より1ユニットのBグループホームへ支援に行ったことで、Aグループホームのインシデント件数が少ない状況である事に気づいた。当時は事故対策委員会の委員長を任命されたばかりで、委員会としてしっかりと機能していないのではと感じ、このままでは利用者の安心・安全を守り切る事が出来ないのではないかと考えた。著者が危険予知トレーニング（以下KYTとする）について再度学び、委員長として委員会への活動をまとめここに報告する。

## II 目的

KYTを行う事により職員の意識向上と防げるアクシデントの減少を目指す。

## III 方法

### 1. 研究期間

2019年10月1日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

Aグループホーム 介護職員 15名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 日々の業務の中でインシデントを探し報告シートへ記載する事への意識付けを全職員へ行う。（1日1件目標）
- 2) 事故対策委員会会議にてKYTについて議題展開し、委員にて話し合いと改善の機会を作る。
- 3) 2020年度より事業所目標へ内容を盛り込み事業所全体の課題として取り組みを行う。
- 4) アンケートを実施し職員へのKYTに対する意識調査及び変化を確認する。

## IV 倫理的配慮

対象者が特定されないようプライバシーに配慮、個人情報の取り扱いに十分注意した上で実施。

## V 結果

1. KYT関連のインシデントを1日1件、勤務職員は発見、報告を行う事を目標とし、利用者への周囲の環境や行動を詳細に観察できる視点が持てる職員が増えた。
2. 事故対策委員及び介護職員のKYTに対する意識が向上した事により職員間のコミュニケーションや改善の機会が増えた。
3. KYTとしてあがるインシデント報告の件数が増えたが、防げるアクシデント減少までの効果は得られなかった。
4. インシデント報告内容のレベルアップが図れた。

## VI 考察

これまでの取り組みは防げるアクシデント件数の減少までには至らなかったが取り組み開始前より今日まで「前進あるのみ！！」との想いで活動してきたため、振り返りが出来ていなかった事も著者の課題と捉えている。

今後は初心に戻って振り返り、活動を継続し更なるKYTに対するレベルアップ向上を目指す必要があると考える。

又KYTとしての報告内容や、防げるアクシデントに繋げない為の注意点など、職員への周知方法についても検討及び改善を行い、利用者にとって安心・安全なAグループホームとしてあり続ける様、進化を遂げていきたい。

### 【参考文献】

- 1) 田中元, 介護事故をなくすためにやっておくべき51のルール, ぱる出版, 2016



題名	転倒を防ぎ、お住まいで安全に過ごしていく為に ——センサー導入事例より——		
法人名	株式会社日本ライフデザイン	事業所名	ナナーラレンタルステーション
発表者	蒔田 圭	共同研究者	無し
サービス種別	その他【福祉用具貸与】		

## I はじめに

在宅生活においてご自身で移動が行える事はADLの維持・介護者負担軽減に繋がるが、反面「移動が行える」為に、介護負担が増すケースもある。不安神経症がある事から落ち着きがなく、自室から頻繁に出ようとされている方に対して効果的な品がないかとの相談を受け、福祉用具で対応したケースを元に、ADLを損なう事なくどこまで安全を確保する事が出来るか、また介護者（スタッフ・介護者 以下介護者）の負担軽減が図れるかを考察していきたい。

## II 目的

それまでマット型の徘徊感知機器（踏むと音が鳴るタイプ）を使用していたが、設置時にセンサーマットが目立つ事・マットや配線で転倒を誘発する恐れがある為、「身体状態による転倒」以外に「品物による転倒」も気にする必要があった事から、利用者の安全確保と介護者の負担軽減を図る。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年11月～2022年6月

### 2. 研究対象

利用者：A氏、80歳代、女性

疾患：高血圧症に伴うラクナ梗塞（時期不明）

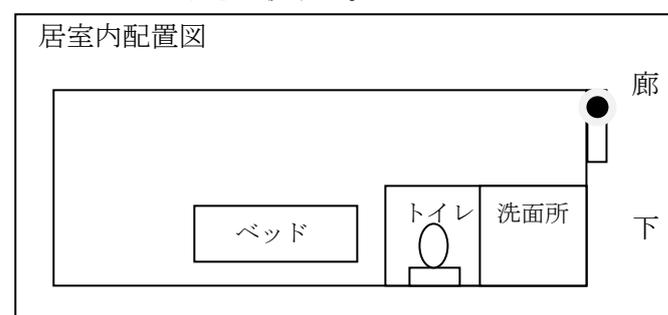
住環境：居室面積18㎡。居室内に洗面所、トイレ有。他社にて特殊寝台一式導入済。

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

新しいセンサーを投入するにあたり、まずどの時点での対応を優先させるかを確認。今回は「一人で部屋から出てしまう」事を防ぐ事を優先させ、扉開閉時に反応するタイプを導入。設置位置は「回収時に跡が残るような事は避けて欲しい」と、施設長より要望。その為、施設の設備担当者を交えて設置位置を検討。

使用については、利用者が室内にいる時は電源を入

れておき、介護者が室内に入る時にはOFFにしてから入室する事を徹底させる事で、「室外から出た時のみ警報が鳴る」状況を確認させる。評価については利用者が居室の外に出た事が介護者に分かり、居室外での転倒を防ぐ事が最優先だが、利用者が電源を操作してしまわない事も注視する。



## IV 倫理的配慮

実名等は明かさず、プライバシーに配慮した上で検討及び記録を行う。

## V 結果

扉上部の、あまり利用者が目を向けられない箇所に設置した事、またケアマネージャーを通じて施設職員に使用方法を説明・徹底した事から徐々に誤報も少なくなり、また足元にセンサーマットを置かなくて済んだ為、居室内での移動時の安全性を確保。転倒のリスクが低減した。

## VI 考察

福祉用具も色々な種類があるが、優先順位を明確にする事で利用者の安全性を確保・介護者の労力低減につながられた事からも、在宅生活を続ける上で適した商品を選定・提案出来る能力の重要性を再認した。

### 【引用・参考文献】

Web ページ（参照 2022年8月30日）、  
公益財団法人長寿科学振興財団, 健康長寿ネット,  
<https://www.tyojyu.or.jp/net/kaigo-seido/fukushikiki/ninchishoroinhaikaikananchikiki.html>



題名	身体介助による外傷の減少をめざして ～動画活用による適切な介助法の習慣化～		
法人名	社会福祉法人草加福祉会	事業所名	マナーハウス横山台
発表者	北村 由佳	共同研究者	提坂 真依
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

湖山医療福祉グループ特養部門においては、外傷がアクシデント発生頻度1位である。A施設においても外傷が多い傾向にある。しかし、介助中の動作が原因と思われる外傷に対して問題点を互いに確認しあう機会が少ない現状であった。介護士関与の外傷要因を互いの動作観察をもとに意見しあい、外傷件数の減少に向けたチームでの取り組みを報告する。

## II 目的

介護士関与の外傷要因を明確にし、介助方法および手順を見直すことによって外傷の減少につなげ、より適切な介助法の習慣化による介護の質向上を図る。

## III 方法

1. 研究期間 2021年11月～2022年6月

### 2. 研究対象

動画対象：全介助の利用者5名

動画被撮影：4F介護職員(常勤/非常勤の計9名)

### 3. 具体的方法

1) 介助場面(離床介助/臥床介助)の動画撮影

(1) 動画撮影者：機能訓練指導員(4F担当)

(2) 動画視聴：全職員の介助動画を各自で視聴。

(3) 動画感想：動画職員に向けて意見評価を記入。

2) 職員アンケート(感想/実業務への意識変化など)

3) 評価尺度：介護士関与の外傷件数。

## IV 倫理的配慮

プライバシーに配慮し、動画を本研究目的以外では利用しないこと、撮影拒否による不利益は生じないことについての説明を口頭で行い、承諾を得た。

## V 結果

1. 介助動画から感じた意見/評価には、修正が望ましいと思う介助動作に対してのアドバイスの意見や評価できる介助動作についての表記があった。

### 2. 職員アンケート結果(一部抜粋)

- 1) 動画撮影：自分の介助を確認する機会となった。
- 2) 他職員の介助場面視聴：不得手な部分を他職員の介助から学べた。
- 3) 他職員からの意見評価を受けて：介助中の注意すべき点が明確になった。
- 4) 意識変化：不得手な場面で模範介助を意識することは増えたが、完全には活用しきれていない。

3. 介護士関与の外傷件数は動画活用以降、減少傾向ではある(図1)。外傷は介助中に触れる頻度が多い前腕/手首/手の甲に多く発生していた。

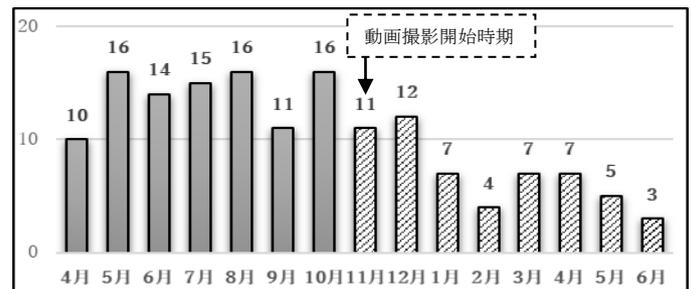


図1. 介護士関与の外傷件数推移(件)

## VI 考察

独り立ち以降、他職員の介助動作を観察することもなくなり、独自のやり方に変化していく傾向がある。皮膚脆弱な高齢者に対し不適切介助では外傷はならない。介助動画を見比べることで、不適切な触れ方や癖のある所作、気配り不足な点に気付き、より適切な介助を意識することが結果として外傷減少に繋がったと思われる。ただし、介助の端々で我流や癖が抜け切れず、皆が模範通りの介助を再現するには達していない。今後も模範介助を意識して技術を磨き上げ、ケアの質向上を目指していく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 平野千晶, 個人のスキル向上と統一したケア, 第6回チームケア学会, 2021, P75



<b>題名</b>	転倒・転落事故における環境改善の有効性についての考察		
<b>法人名</b>	社会福祉法人苗場福祉会	<b>事業所名</b>	ショートステイくりの木
<b>発表者</b>	藤川 竜馬	<b>共同研究者</b>	川崎 孝枝
<b>サービス種別</b>	短期入所生活介護		

## I はじめに

A事業所は、2020年度のアクシデント発生件数が2015年の開設以降最多となった。中でも転倒・転落におけるアクシデントの比率が49.6%と非常に高く、受診や入院に至る事故も増加していた。先行研究において、疾患や身体機能などの内的要因だけではなく、施設内環境など外的要因の影響も報告されている<sup>1)</sup>。

環境改善を行う事で、利用者への安心・安全な環境の提供ができると考え取り組んだ。

## II 目的

転落・転倒における環境改善の有効性を考察する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年4月1日～2022年3月30日

### 2. 研究対象

ショートステイ利用者87名の研究期間におけるインシデント・アクシデントデータ

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 毎月のインシデントから特徴を分析し、傾向を把握する
- 2) 転倒・転落事故に繋がるインシデントが2件以上発生した際に、ミーティングや部署会議にて専門職を交えて、対策の立案や検討を行う
  - (1) 環境調整シートの活用による家具配置調整
  - (2) 有効なセンサーの選定
  - (3) 転落・転倒時における怪我予防の立案
- 3) 評価方法
  - (1) 転落・転倒アクシデント発生件数の比較
  - (2) 打撲・骨折による行政報告件数の比較

## IV 倫理的配慮

個人が特定される個人情報や写真の掲載はせずに、本人の特定に繋がらないものとした。

## V 結果

表1 転倒・転落アクシデント件数（件）

	2020年	2021年	差
フロア	27	11	-16
居室	39	8	-31

表2 打撲・骨折による行政報告件数（件）

2020年	2021年	差
10	2	-8

居室での減少値が高い理由として、ベッド付近へのセンサー設置による早期の行動把握と環境調整によりアクシデント件数の大幅な減少ができた。

## VI 考察

介護施設では内的要因「人」に着目した対策立案されることが多いが、本研究では「環境」などの外的要因への分析と対策を行い、予防手段と講じたことでアクシデント件数と打撲骨折事故が減少した。

先行研究では、施設側が転倒に対する責任を免れるためには、外的要因である施設設備を整えたうえで、転倒リスクを的確に評価し、それに基づいた予防手段を講ずることが要求される<sup>2)</sup>とされている。

当法人では、集計・分析はされているがアクシデント件数は横ばいである。科学的介護が推進されている現代においてデータの集積と、それを分析して事業所単位で有効活用でき、アクシデントの減少に効果的な仕組みを検討していきたい。

### 【引用・参考文献】

1) 角田亘,安保雅博: 転倒をなくすために—転倒の現状と予防対策—. 慈恵医大誌, 2008, 123, P347-371

閲覧日: 2022年7月10日

2) 大高洋平: 高齢者の転倒予防の現状と課題. 日本転倒予防学会誌, 2015, Vol.1, P11-20

閲覧日: 2022年7月10日



題名	牛乳を使った便秘改善～運動との相乗効果～		
法人名	株式会社 テイクオフ	事業所名	ケアセンターとこしえ山形薬師町
発表者	原田繁	共同研究者	佐藤久美
サービス種別	小規模多機能型居宅介護		

## I はじめに

ある日利用者から「施設で牛乳を飲みたい」という声が聞かれた。「牛乳には酸が生じ、発生した酸は、大腸の中にいる細菌の栄養となり、善玉菌が優位となる腸内環境づくりに役立てられ、その結果蠕動運動が活発となり、排便が促されやすくなる」<sup>1)</sup>ということだった。実際事業所に便秘のお客さまもいたこともあり、牛乳を飲んで頂くことで、腸内環境にどのような影響が出るのか取り組んだ結果を報告する。

## II 目的

牛乳を飲むこと及び適度な運動習慣で薬に頼らない自然な排便を促すことができるのか検証する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年2月～2022年1月

### 2. 研究対象

宿泊利用者8名

- A氏 90歳代 女性 介護3 脳血管性認知症
- B氏 90歳代 女性 介護2 低体温症
- C氏 80歳代 男性 介護3 アルツハイマー型認知症
- D氏 90歳代 女性 介護2 心不全 脳梗塞
- E氏 80歳代 女性 介護4 不安性神経症
- F氏 80歳代 女性 介護3 アルツハイマー型認知症
- G氏 80歳代 女性 介護1 うつ病 脳血管性認知症
- H氏 90歳代 男性 介護2 アルツハイマー型認知症

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) 朝食時牛乳を飲んでもらい排便反射を促す。体質的に合わない方は牛乳の代用として水とする。
- 2) 1日約20分運動し腸の動きを活発にさせる。
- 3) 介助または本人聞き取りにより排便確認を行う。
- 4) 排便状況を研究前と比較し評価する。

## IV 倫理的配慮

本研究の対象者及びご家族に対し、研究の目的、個人情報取り扱いについて説明し同意を得る。

## V 結果

表1 排便状況 (水のみ使用)

	実施前	実施後
A氏	4日に1回(自然)	2日に1回
B氏	4日に1回(下剤)	3日に1回
C氏	6日に1回(下剤)	4日に1回
D氏(水)	5日に1回(下剤)	3日に1回(下剤使用)
E氏	7日に1回(下剤)	3日に1回
F氏(水)	5日に1回(下剤)	3日に1回(下剤使用)
G氏	4日に1回(自然)	2日に1回
H氏	3日に1回(自然)	2日に1回

8名中6名が牛乳を毎朝飲用することで、定期的な排便が見られるようになった。牛乳が体質的に合わない水を代用した利用者は今回の研究では自然排便には至らなかった。

## VI 考察

朝食時に牛乳を飲用することによって腸内環境が整い排便に効果的であることが今回わかった。また適度な運動を毎日習慣的に行うことが、腸の活性化を促し便が柔らかくなり便秘が改善されたと考えられる。この研究結果を踏まえて、今後も便秘の予防に努め他利用者や、牛乳を飲めない方については体質にあった代替えとなるものを探っていく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 白畑炊医師(監修), vol.71 牛乳が便秘解消に良い理由は? 飲むタイミングや注意点も押さえよう, 知って得する! 腸活コラム, 健栄製薬, 閲覧日: 参照 2021年1月21日,  
URL: [https://www.kenei-pharm.com/ebenpi/column/column\\_71/](https://www.kenei-pharm.com/ebenpi/column/column_71/)



題名	トイレに行きたい～日々の取り組みと課題～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	小規模多機能ホーム花咲み
発表者	八木ひとみ	共同研究者	前谷和子 藁科千加 山田恵里
サービス種別	小規模多機能型居宅介護		

## I はじめに

A氏は利用当初、トイレでの排泄を行っていたが半身麻痺と拘縮、3年半で12kg以上の著しい体重増加により、移乗時に痛みや苦しみを訴えることが増えた。またスタッフからも「トイレでの排泄介助は無理だ」という声が聞かれるようになり、オムツ交換での対応となった。しかし、A氏からの「トイレに行きたい」という訴えは続いてきたため、介護技術の向上にYouTubeを取り入れ、A氏のトイレに行きたい思いを叶えるために、取り組んだ結果をここに報告する。

## II 目的

トイレでの排泄が行えるようになる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年11月1日～2022年5月12日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代女性 要介護5

現病歴：右視床出血 左半身完全麻痺

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 理学療法士による移乗介助の直接指導を受ける。指導を受けたスタッフを中心に全員に周知する。
- 2) YouTube上の動画<sup>(1)</sup>をスタッフ全員にLINEで配信し、まずはベッドと車イス移乗を練習する。

## IV 倫理的配慮

対象者と対象者家族には、本研究の説明を口頭と書面で行い同意を得た。

## V 結果

動画配信直後よりすぐに、「座って出来る移乗介助」を実行する姿が見られた。「腰の痛みも軽くなった」「まだ上手く出来ないが重みも感じないので、数をこなせば出来そうだ」という意見が聞かれた。一方で、「上手く出来ない」という意見もあった。A氏自身は「こっちの方が痛くない」と移乗介助時に痛みや恐怖

を訴えることは減ったが、まだトイレ排泄に移行できるところまではいかなかった。

## VI 考察

A氏の「トイレに行きたい」という思いを叶えるために、同じ教材を使用し安全に行える移乗方法を考え、誰でもいつでも見ることが出来るYouTubeに着眼した。山本らは「コンテンツを活用して模範となる演技を見ながら練習すること、理解や改善点の気づきについての意識が向上したことが分かった<sup>(2)</sup>」と述べている。この取り組みでもYouTubeという視覚と聴覚の両者に強く働きかけることを特徴とした動画を利用したことで、以前よりも理解も深まりやすく、新しい移乗方法に取り組みやすくなり、実際に体験し、「できそうだ」という成功体験を実感したことは、チーム全員の自信になり次のステップにも繋げることが出来たと考えられる。その反面、上手く出来ないという声もあった。太田らは「多くの移乗技術はそれぞれ、一朝一夕にできるものではない<sup>(2)</sup>」と述べられており、短期間での技術習得は難しいとも考えられる。今後も移乗介助の練習を行い、A氏がトイレでの排泄ができるようチームで取り組んでいきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 長谷川陽介, 女性でも簡単座ったまま移乗ももちろん練習はしています詳しくはYouTube【プロが教える介護技術】やしのきチャンネル, 2022.3.10<https://youtube.com/shorts/B9h4TPykgIE?feature=share>
- 2) 山本朋弘, 池田幸彦, 清水康敬, 体育「跳び箱運動」指導における動画コンテンツ活用の効果, 日本教育工学雑誌 27,P153-156,2003
- 3) 太田眞智子, 中村幸子, 新井幸恵, 介護基礎教育における移乗技術の探求, 十文字学園女子大学人間生活学部紀要第4巻, 2006



<b>題名</b>	便秘は食物繊維だけでは解消しない？～咀嚼と腸内細菌との関連について～		
<b>法人名</b>	社会福祉法人苗場福祉会	<b>事業所名</b>	アーバンリビング鳥屋野
<b>発表者</b>	高橋 巽	<b>共同研究者</b>	平山 由香 阿部 直人 菅野 南
<b>サービス種別</b>	短期入所生活介護		

## I はじめに

高齢者の排便状況は、加齢に伴う腹圧や腸蠕動運動の低下、高齢期特有の精神状態の不安定、咀嚼力低下による食物残渣の少ない食事の日常的な摂取などの要因から、高齢者の便秘、または下痢症状の問題を抱えている福祉施設は多い。

A施設では、便秘に悩む利用者を対象に食物繊維の多い食事提供を試みたが効果が出ない日々であった。

そこで利用者の咀嚼回数に焦点をあて、食物繊維だけでなく腸内細菌の活用に視点を変えたことで効果が見られた結果を報告する。

## II 目的

利用者の一口あたりの咀嚼回数から食物繊維との関連性を明らかにし、腸内細菌の活用で便秘改善を図る。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年6月23日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

【常食群】4名 男女比 1:1 80歳代～90歳代

【軟菜群】4名 男女比 1:1 80歳代～90歳代

※常食群、軟菜群の8名が平均して排便-3日

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 1日3食の咀嚼回数を1週間計測し平均値を算出する。
- 2) 食物繊維での排便コントロール状況の把握を2ヵ月計測する。
- 3) 腸内細菌(乳酸菌、ビフィズス菌)の添加での排便コントロール状況の把握を2ヵ月計測する。

## IV 倫理的配慮

研究対象の利用者、ご家族には口頭にて主旨を説明し、了承している。

## V 結果

表1. 3食での平均咀嚼回数(1週間平均データ)

	平均咀嚼回数	最大咀嚼回数	最低咀嚼回数
常食群	20回	29回	17回
軟菜群	7回	15回	4回

表2. 食物繊維と腸内細菌での排便状況

	食物繊維のみ	腸内細菌+
常食群	-3日⇒-2日	-3日⇒0日
軟菜群	-3日⇒-3日	-3日⇒-1日

以上の結果から、咀嚼回数が少ない場合、食物繊維だけでは排便状況に影響が少ないことが分かった。

## VI 考察

咀嚼回数と食物繊維での排便コントロール状況を評価し、軟菜群は咀嚼回数が少ないことから、咀嚼と腸内細菌の活動には正の関係があるのではないかと考えた。

解剖生理学上、咀嚼は交感神経が亢進し、その後、徐々に減弱しながら副交感神経が亢進する機能を有している。その作用により、消化器系の血流量増加や唾液の分泌が促され、消化機能の開始と共に、腸蠕動運動の亢進が腸内細菌の活性に繋がると考えた。常食群でも同様に排便効果を得ることが出来たため、本研究はA施設の利用者の便秘改善に効果が得られる結果となった。

今回は症例数が少なく、先行研究に当てはまった形となったが、今後は実践的に腸内細菌の添加が行える食品を検討し、更に咀嚼回数の増加を図る活動を組み込んだ便秘改善策に着手していくことを課題とした。

### 【引用・参考文献】

- 1) 名尾良憲,村上善次:老人の便秘, Geriatric Medicine, 11, 72-77, 1973



<b>題名</b>	下剤に頼らない、自然排便を目指して		
<b>法人名</b>	医療法人社団 日翔会	<b>事業所名</b>	グループホーム花つつじ
<b>発表者</b>	足立奈津美	<b>共同研究者</b>	善波佐智 大塚侑里
<b>サービス種別</b>	認知症対応型共同生活介護		

## I はじめに

加齢と共に、便秘の症状を訴える方の割合は増加している<sup>1)</sup>。認知症の進行、ADLの低下から自然排便が難しくなり、下剤の内服で腹痛や不快なほどの下痢を引き起こす等、利用者個人への負担が大きくなっているように感じた。そこで高齢者の便秘に対する情報を調べたところ、お茶を使った方法があると分かった。文献<sup>2)</sup>をもとに、各お茶の効能を調べ、古くから便通に良いと飲用され、高齢者にも馴染みのあるドクダミ茶を使用することで自然な形の排便に近づけられないかと考えた。ドクダミ茶の飲用による下剤使用量の変化についてここに報告する。

## II 目的

ドクダミ茶で自然排便を促し、下剤の使用量を減らす。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年9月～2022年2月

### 2. 研究対象

現在下剤(頓服薬)を使用している入居者8名を対象

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) ドクダミ茶飲用前の排便回数、下剤使用回数を集計。
- 2) 2021年11月よりドクダミ茶を2か月間飲用。
- 3) 飲用前と飲用後のデータを比較。

対象者8名の下剤の使用量の変化を比較し評価する。

## IV 倫理的配慮

対象者及びご家族には当研究の説明を口頭と書面で行い、同意を得た方を調査対象とした。

## V 結果

ドクダミ茶の飲用を開始したところ、8名中6名に下剤使用回数の減少が見られた。そのうちの4名は飲

用前、2日に1回のペース(月15回)で下剤を使用していたのが、約半数の6～9回まで減少することが出来た。また、自然排便の回数増加に伴い、便性状の変化も見られた。研究期間後、さらに1か月継続して飲用を行ったが、対象者全員がほぼ同じ使用回数となり、それ以上の服用回数減少には至らなかった。

## VI 考察

参考文献<sup>3)</sup>をもとに研究を進めた結果、腸に水分を集め、便を流しやすくすること、腸を刺激して動きを活発にし、老廃物を排出するというドクダミ茶の効能を感じられた。研究の目的は、8名中6名が達成しており、個人の負担を減らす結果になったと言える。しかし、計3ヶ月間ドクダミ茶の飲用を行ったが、対象者8名いずれも、完全に下剤の使用が無くなるという事は無く、対象者全員の排便状態の改善に至るには研究期間の設定が短かったように思う。どの対象者もドクダミ茶飲用への抵抗感や、体調不良等の訴えも無く、長期的に飲用を続ける事で、より自然に近い排泄へと近づけることが出来るのではないかと。今後も継続して提供を行い、主治医と相談しながら、排便状況の改善につなげていく。

### 【引用・参考文献】

- 1) 2016年国民生活基礎調査より
- 2) 便秘・下痢を繰り返す方におすすめの健康茶3選, クラシエ, (閲覧日 2021年8月1日)  
<https://www.kracie.co.jp/kampo/kampofullife/body/?p=5063>
- 3) ドクダミに期待できる効能・効果と利用法, 山下薬草店(閲覧日 2021年8月1日)  
<https://www.yakusou-ten.com/dokudami/>



題名	多職種連携により褥瘡治癒に至った事例～施設外部との連携含む～		
法人名	社会福祉法人緑愛会	事業所名	オー・ド・エクラ
発表者	中村香南子	共同研究者	佐藤晴美
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

褥瘡悪化は全身状態に大きく影響してしまうため、高齢者施設における褥瘡予防は不可欠なケアになっている。A氏は入居時に寝たきり状態であり、仙骨部に褥瘡があった。医師が常駐していない特別養護老人ホームにおいて、多職種の関わりで褥瘡が治癒した事例を報告する。

## II 目的

ポケット形成し難治性褥瘡に至った入居者に対して、多職種及び、皮膚・排泄ケア認定看護師（Wound Ostomy Continence：以下、WOC看護師とする）の協力、外科的治療を行い褥瘡が改善した。今後の褥瘡ケアにつなげることを目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2018年5月1日～2020年12月8日

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 女性 要介護5

既往歴：II型糖尿病、左視床出血、右片麻痺  
嚥下障害による胃瘻造設

日常生活自立度：寝たきり度C2・認知度IIIa

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 洗浄・処置：1回/日、入浴2回/週
- 2) WOC看護師評価：1回/月
- 3) 皮膚科往診：1回/月
- 4) 嘱託医回診：2回/週
- 5) 褥瘡・排泄委員会（褥瘡評価）：1回/月

## IV 倫理的配慮

本研究にあたり、家族に個人情報取り扱いについて書面にて説明同意を得る。

## V 結果

入居時より、褥瘡評価に基づきながら、処置内容を見直し実施したが、2019年3月までサイズは大きく

変わらないものの、ポケットの拡大が見られた。同月に外科クリニックにて、切開を実施。経管栄養剤の見直しも行き、ボディマス指数（Body Mass Index：BMI）の改善がみられ、2020年12月8日に褥瘡治癒となる。治癒までの経過は表のとおりである。

確認月	2018年5月 入居時	2018年7月	2019年3月	2019年3月
サイズ	2×1.5cm	2×1.5cm	1×2cm	6.7cm×7.5cm（切開）
ポケット	3×3cm	5×6cm	7.5×9.5cm	-
処置	洗浄 ユーバスタ デルマエイド	洗浄 アクアセルAg	アクアセルAg フィルム	イソジンシュガー ガーゼ
栄養剤	メイグット300×3 アルジネード125	変更なし	変更なし	変更なし
BMI	16.2	15.76	15.55	14.65
確認月	2019年5月	2019年11月	2020年5月	2020年12月
サイズ	3.7×5cm	2×1cm	1×0.8cm	治癒
ポケット	-	0.5×0.5cm	2×2cm	治癒
処置	デックス軟膏処置	カデックス プロスタンディン ガーゼ	オルセノン軟膏 アクアセルAg	プロベト塗布
栄養剤	変更なし	メイグット400×2 メイグット300×1 アルジネード125	メイグット300×1 メイグット400×1 メイバランスソフトゼリー	メイグット300×2 アルジネード125 メイバランスソフトゼリー
BMI	15.25	15.76	16.15	16.45

## VI 考察

施設内での対応にとどまらず、WOC看護師や往診皮膚科医や外科クリニックに受診したことで治療の範囲が広がった。その結果、より専門的な評価、対応が可能となり、医師が常駐していない当施設においても、難治性褥瘡の治癒につながったと考える。

褥瘡発生原因は、不十分な減圧・除圧対策、ずれの存在、全身状態や栄養状態の悪化など多岐にわたる。これらの原因を一つ一つ検証し、多職種の専門性を活かし、情報共有し、統一したケアを行うことが褥瘡の改善に重要である。また、褥瘡治療だけではなく、予防への取組みも重要であり、日常的な関わりの中で、リスクを把握し、早期対応することが必要である。

### 【参考文献】

- 1) 真田弘美ほか：褥瘡 UPDATE-エキスパートのための最新情報と栄養療法，臨床栄養，138（6），医歯薬出版株式会社，2021。



題名	有料老人ホームにおけるドライスキンの原因追求とケア改善の一症例		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	リライフ富士
発表者	栗田美沙	共同研究者	伊藤早紀 長澤聡美
サービス種別	特定施設入居者生活介護		

## I はじめに

2019年冬頃、フロアで洋服が乱れる程身体をかいている方の皮膚科受診をすると、スキンケアについて指摘を受けた。その為、スキンケアを見直しかゆみをはじめとする皮膚トラブル全般の改善を目指した。

## II 目的

かゆみによる皮膚トラブルを減少させる

## III 方法

1. 研究期間 2019年3月～2020年12月

2. 研究対象 A様・80歳代・要介護4

3. 具体的方法

1) タオルに洗浄剤をつけ、ゴシゴシこする洗身方法からボディーソープを泡立て泡を手に取りなでるように洗う方法へ変更した

2) 入浴後にクリーム等を使用した保湿を行った

3) 加湿器や濡れタオル・洗面に水を張るなどの居住空間の加湿を行った

4) 1日最低1000mlを目標として水分摂取の促しを行った

## IV 倫理的配慮

個人情報については同意を得て使用した

## V 結果

2020年12月には皮膚状態が改善しかゆみの様子はみられなくなった。また同様のスキンケアを他利用者にも行い、皮膚剥離や内出血インシデントが減少した。

## VI 考察

それまでの洗身では汚れとともに肌の保湿に必要な皮脂・セラミド・天然保湿因子を洗い流してしまい肌を乾燥させてしまっていた(ドライスキン)。「ドライスキンになることでかゆみを感じる知覚神経C線維の閾値が低くなり、衣類がこすれるなどのわずかな刺激でかゆみを感じるようになる」<sup>(1)</sup>ドライスキンになってしまったことで肌のバリア機能低下がおきて

しまい肌荒れ・かゆみ・かきつきが発生して更なるかゆみを誘発してしまっていた。「湯船に長くつかると肌の保湿・バリア機能を担っている天然保湿因子が体から流出してしまい肌を乾燥させ、かゆみや炎症が起こりやすくなる」<sup>(2)</sup>入浴後に保湿剤をていねいに塗ることで肌の表面に皮膚膜をつくり保護をした。早いターンオーバーができるように内部環境を整えることを目的に1日最低1000mlを目標として水分摂取の促しを行った。洗身方法を見直し保湿を行い正常な表皮をつくるとともに加湿による生活環境や水分摂取による内部環境の改善により皮膚状態が改善したと考える。皮膚状態が改善しかゆみがなくなったことで日中は穏やかに過ごすことができるようになった。ひとりの皮膚状態の改善を受け他利用者にも同様のスキンケアを行った結果、皮膚剥離や内出血インシデントが同様のスキンケアを行わなかった年よりも3件減少した。今後は個人の皮膚の状態に合わせた皮膚洗浄剤や保湿剤の使い分けを行い皮膚トラブルの予防に力を入れていきたい。

## 【引用・参考文献】

- 1) 安部正敏, 皮膚科専門医が見た! ざんねんなスキンケア47, 株式会社学研プラス, 2019, 131頁
- 2) 豊田雅彦, 頑固なかゆみもアトピーも1分肌活で必ずよくなる, 株式会社三笠書房, 2021, 60頁
- 3) 小林美咲, 図解がまんできない! 皮膚のかゆみを解消する正しい知識とスキンケア, 株式会社日東書院本社, 2017
- 4) 梶西ミチコ, 看護の現場ですぐに役立つスキンケアの基本, 株式会社秀和システム, 2021



題名	皮膚状態改善に向けて～緑愛会昨年発表研究の水平展開～		
法人名	社会福祉法人 緑愛会	事業所名	特別養護老人ホーム オー・ド・エクラ
発表者	廣田雄人	共同研究者	久光梓葉 佐藤美穂子
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

2021年8月、A氏の入浴介助の際に500円玉ほどの発赤を臀部に発見。発赤は数日で広がり、全身がただれたように真っ赤になった。2021年度のチームケア学会にて高橋らが報告した事例と類似しており、報告事例を参考に対応方法の再検討を図った。A氏の皮膚状態改善に向けて取り組み、実践したことを報告する。

## II 目的

A氏の身体から発疹・痒み・痛みを取り除き、皮膚状態の改善を目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年8月～2022年7月

### 2. 研究対象

A氏 90代 女性 要介護5

疾患：高血圧、大腸がん、気管支喘息、  
アルツハイマー型認知症、動脈硬化

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

#### 1) 清潔保持

- (1) 毎日の入浴又はシャワー浴
- (2) 弱酸性ボディソープ（コラージュフルフル）の使用
- (3) タオルを使用せず手指で体を洗う

#### 2) 薬による治療

- (1) 皮膚科往診による診察
- (2) 入浴後、就寝前に指定軟膏塗布
- (3) 処方薬の内服

#### 3) その他のケア

- (1) 毎日綿素材の服を着用、交換

## IV 倫理的配慮

A氏と家族に本研究の説明を行い、調査・研究をすることによる不利益等無いことも併せて説明し、同意

を得た。

## V 結果

2021年8月23日より1)2)の対応を実施したが、全身に赤いただれが広がる様子が見られた。9月14日には痒みに加え、痛みの訴えも聞かれるようになり、10月1日には浸出液から臭いも確認できる状況となっていた。

3)の対応を実施すると、10月9日には赤みが薄れ、改善が見られた。

2022年2月3日に再度の発赤見られたものの、皮膚科往診による軟膏調整・再度のスキンケアを実施。5月12日時点で赤みが残る部分が見られるものの良好な皮膚状態を保つことが出来ている。

## VI 考察

A氏の皮膚状態は完治には至っていないが、改善傾向にある。今回の事例では、清潔保持を行っているだけでは改善することができなかったが、衣類の素材の変更、軟膏類の変更など多角的な面からアプローチで検討することで、改善につながったと考えられる。

根本的な原因にはたどり着くことができなかったが、結果として改善しているため、毎日の入浴介助や軟膏塗布、綿衣類の使用など継続し、完治までつなげることができるように対応の模索をしていく必要がある。

本研究を通して、スタッフが利用者に対するスキンケアの考えを見直す良いきっかけになったと考える。多職種協働のもと、皮膚状態を観察し苦痛のない生活ができるようケアを実践していきたい。

### 【参考文献】

1) 高橋太・須藤健・竹田ひろみ, 高齢者のスキンケアについて, チームケア学会, p43, 2021.



題名	スキンケアによる帰宅願望軽減		
法人名	社会福祉法人 平成会	事業所名	リアンヴェール美里
発表者	日下部映吏	共同研究者	今野丈
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

帰宅願望の軽減になる事例を探していた際に、スキンケアにより夕暮れ症候群が軽減したという論文<sup>1)</sup>を発見した。その事例を参考にした、A氏の帰宅願望軽減についての取り組みを報告する。

## II 目的

起床時と就寝時1日2回のスキンケアをA氏自身に行って頂き、夕暮れ症候群の軽減に努める。

スキンケアの癒し効果やストレス緩和の効果により、A氏に穏やかな生活を送って頂く。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年12月20日～2022年3月20日

### 2. 研究対象

A氏 90代 要介護3

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 起床時と就寝時に化粧水をしみこませたコットンを渡して顔に塗って頂く。スキンケア中は前向きな声かけを行う。
- 帰宅願望時を記録する記入用紙を作成して生活表にファイリングする。
- A氏の行動を観察し、時間の長さ、強度、頻度を記入用紙に記録する。

(例)帰宅願望が強く頻回で、職員の声かけに納得できない場合は赤文字で記入し、訴えが数回で職員の声かけに耳を傾ける事ができ納得する場合は黒文字で記入する。訴えの回数とかかった時間を記録する。

評価尺度：帰宅願望の時間、強度、頻度の変化で評価する。

## IV 倫理的配慮

この研究に関して内容、写真の掲載をご家族に了承を得ている。

## V 結果

結果は以下表1の通りとなる。

表1 帰宅願望の平均値

	0.5ヶ月	1ヶ月	1.5ヶ月	2ヶ月	2.5ヶ月	3ヶ月
訴えの強度(回/日)	2	1.5	0	0	0	0
訴えの頻度(回/日)	3	2	2	2	1	1
最短時間(時間)	0.5	0.5	0.25	0.5	0.25	0.5
最長時間(時間)	2.5	3.5	2	3	4	3.5

帰宅願望の訴えは、日によって差があり日時の経過により減少する事は無かった。1ヶ月ごとに振り返ると、時間の長さや頻度は2ヶ月後には短くなったが、3ヶ月後には1ヶ月目と同値となった。しかし、訴えの強さは明らかに減少がみられた。全体を通してみると、帰宅願望の訴え自体は減少している。研究前はフロア内を徘徊し帰宅願望を激しく訴えられる日が、月に平均して2～3回あったが、この研究に取り組んでからはみられなくなった。

## VI 考察

スキンケアは女性の日常に取り入れやすいためか、A氏に拒否はみられなかった。スキンケアの顔面マッサージによるリラクゼーション効果が、A氏のストレスの緩和に繋がったと考えられる。合わせて、スキンケア時に職員から前向きな声かけを行うことでA氏にポジティブな気持ちになって頂き、帰宅願望の訴えの軽減に繋がったと考えられる。

### 【引用・参考文献】

- 1) 須賀京子, 高齢者施設に入所している認知症女性高齢者の夕暮れ症候群の緩和と生活機能の改善を目指すフェイスクアプログラムの開発, 聖隷クリストファー大学大学院 看護学研究科博士後期課程, 2015年9月,  
<https://blg.seirei.ac.jp/hakase/files/2015suga.pdf>



題名	最期は家で迎いたい～その思いを叶えるために～		
法人名	医療法人社団 緑愛会	事業所名	介護老人保健施設 かがやきの丘
発表者	須藤幸	共同研究者	小関千紘
サービス種別	介護老人保健施設		

## I はじめに

介護老健保健施設 A の B 棟は、施設内でも在宅復帰支援に特化した部署である。

C 氏は、前立腺癌、多発性骨転移を患い、主治医より余命半年から 1 年と宣告され、日常生活動作 (Activity of Daily Living: 以下 ADL) 低下により、2019 年から 3 か月毎、計 6 回レスパイト入所をされている。余命宣告後の連携経過をここに報告する。

## II 目的

「最期は家で迎いたい」という C 氏の思いを叶えるため、家族・多職種と連携を図り C 氏に合ったケアの提供ができる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2019 年 6 月 27 日～2022 年 7 月 14 日  
レスパイト入居平均期間 約 3 か月

### 2. 研究対象

氏名：C 氏(男性・80 歳代) 要介護 4  
主病名：前立腺癌 多発性骨転移 心不全

### 3. 具体的方法

- 1) C 氏の状態観察
- 2) 本人の状態に合わせたケアプラン見直し  
在宅に向けての本人の状態維持
- 3) 緊急時対応の勉強会実施
- 4) 家族への密な状態報告

## IV 倫理的配慮

研究目的、個人情報保護について口頭と書面にて説明し、同意を得た。

## V 結果

- 1) 初回に比べ、直近の利用時は ADL も全介助となり、著しい体力の低下が見られた。C 氏の状態変化を比較すると以下の通りであった。

表 1. 初回利用時と直近の利用時の比較

	初回利用時	6 回目利用時
ADL 状況	一部介助	全介助
体重	59.9kg	47kg
食事摂取量	全量	0～1/3
離床時間	1 時間半	30 分前後
その他	体調安定	医療行為の頻度増加 体調不良繰り返す

- 2) 初回入所時より終末期に合わせたケアプランであったが、本人の状態、家族からの希望を加味したプランへ変更した。
- 3) 勉強会を実施したことにより、C 氏の体調の変化を早期に発見できていた。
- 4) 家族との密な情報共有から信頼関係が強化され、家族も職員の姿を見た事で「介護を仕事にしたい」と資格を取り、安心して C 氏を迎える準備をした。

## VI 考察

初回の利用から、C 氏の状態や思いに合わせたサービスの提供ができており、在宅復帰棟として必要不可欠である家族との信頼関係も築くことができていた。その都度、状態に合わせたケアプランの見直しを図り身体に負担の少ないサービスを提供することで、レスパイト入所を繰り返しながらも、定期的に自宅で過ごすこともできていた。その一方で C 氏の状態悪化が垣間見えるようになり、7 月初旬ご逝去された。

今後も老健として利用者の思い、家族の心情に寄り添いながら、チーム一丸となり取り組んでいきたい。

### 【参考文献】

- 1) 介護と医療研究会, 看取りケア便利帖, 翔泳社, 2017, P14, 90, 120
- 2) 全国老人保健施設協会, 新在宅支援推進マニュアル第 2 版, 株式会社 三輪書店, 2022, P25, 28



題名	学び合うチーム作り～よりよい接遇を目指して～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	神明いきいきプラザ
発表者	中村真穂	共同研究者	川村紗祐梨 関清香
サービス種別	いきいきプラザ		

## I はじめに

A事業所は、高齢者を対象に、趣味やレクリエーション・学習活動の場、介護予防の場を設けており、地域の方々と共に楽しみながら学び、仲間づくりの場として特色ある様々な事業を企画・実施している。

コロナ禍に伴う業務量の増加により、他の職員の行動に目を向ける意識が低下しつつあるのではないかと感じた。他者の行動を見る機会を増やす事で、模範となる行動に気付き模倣する機会が増え、職員それぞれのサービスの質や接遇の向上に繋がると考えた。そこで、“いいね！しんめえ～る♪（以下、いいねカード）”を実施した。

## II 目的

他の職員の行動から学び、職員一人ひとりの接遇の向上に繋げる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年11月22日～2022年4月14日

### 2. 研究対象

A事業所の職員 計17名

（総合運営職員：6名、トレーニング運営職員6名、喫茶運営職員：5名）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) いいねカードの作成・実施
- 2) 職員へ今回の取り組みに関するアンケート調査

## IV 倫理的配慮

職員には、研究に関する同意を得た上で研究以外の目的では使用しないことを説明し、個人の特定ができないように配慮した。

## V 結果

### 1. いいねカード

いいねカードの回収枚数は167枚だった。その内、利用者に対する接遇に関するものは94枚、職員に対

する行動に関するもの（感謝含む）は106枚だった。（枚数に重複あり）

### 2. 職員アンケート

いいねカードを通して、周りの職員の行動を意識するようになった人は88%であった。「他の職員から学ぶことが出来た」「自身の強みを知れた」「やる気や自信になった」等の意見があった。また、いいねカードが自らの手元に届く事で自身の行動を振り返る事が出来た人は94%であり、今後もいいねカードを継続していきたいと思った人は82%であった。

## VI 考察

いいねカードを通して他の職員の行動を見る機会が増え、他の職員から学ぶ姿勢を築く事が出来た。また、行動を言語化し文章にして伝えた事により、更に理解を深めることが出来た。

斎藤は「誰もが意見を出し合っているからこそお互いの意識が高まり、相乗効果でチームとしての機能も高まる」<sup>(1)</sup>、「お互いに肯定し合える環境や関係性が育っていく」<sup>(2)</sup>と述べている。

各職員の気付きを全体に共有し、学び合う事で神明全体の接遇の向上に繋がったと考える。また、褒められる事で仕事への意欲が向上した。更に、褒め合うことで尊敬し合い高め合う関係を作ることが出来、良好な職場環境を作るきっかけとなったと考えた。

今後もいいねカード等の取り組みを通して、利用者により良いサービスを届けていきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 斎藤孝,人はチームで磨かれる職場を元気にする72の質問,日本経済新聞出版,2016,16-21・166-199
- 2) 斎藤孝,ほめる力「楽しく生きる人」はここがちがう,株式会社筑摩書房,2013,24-31



題名	スタッフ同士で褒めることを文化に ～みんなが認めるベストケア〇〇～		
法人名	医療法人社団 湖聖会(東京)	事業所名	介護老人保健施設キーストーン
発表者	成田 博敬	共同研究者	南 さおり
サービス種別	介護老人保健施設 通所リハビリテーション 訪問リハビリテーション		

## I はじめに

2021年度のお客様アンケート調査の結果で、職員の接遇に対する苦言が多く寄せられた。また2021年6月に実施した「虐待の芽」アンケートにも他の職員が行っているサービスに問題があると半数以上の回答があった。その対策としてディズニー社で取り組まれていることを受けて、いい職員を見習う、褒める文化を根付けようと考えた。

## II 目的

接遇を改善するために、職員同士が見られていると意識付けをして褒める文化を作り、ケアの向上に繋げていく。

## III 方法

1. 研究期間：2021年11月～2022年4月
2. 研究対象：派遣職員を除く職員124名
3. 具体的方法：
  - 1) ディズニー社の取り組みを参考に、他の職員を褒める「あなたが認める〇〇な職員」というアンケートを作成し実施。(2021年11月～2022年3月職員全体、2022年4月部署ごと)
  - 2) 「虐待の芽」アンケート<sup>2)</sup>の実施。入所施設版と通所サービス版のうち共通13項目を使用。(2021年6月、2021年10月、2022年4月)
  - 3) 「あなたが認める〇〇な職員」のアンケートの結果の開示(毎月)及び結果に基づいた表彰。(2022年3月)
4. 評価尺度
  - 1) 「あなたが認める〇〇な職員」のアンケートの項目別投票数とアンケート記載内容の検証。
  - 2) 「虐待の芽」アンケート結果を研究前と比較。

## IV 倫理的配慮

アンケートは匿名にて実施。表彰された職員への本

研究における個人情報の取り扱いについては口頭と書面にて説明をし、同意を得た。

## V 結果

1. 「あなたが認める〇〇な職員」のアンケートの記載内容では具体的な記載が、回を重ねるにつれて増加した。項目別では「声掛け上手で賞」、「聞き上手で賞」の票数が50以上に対し、「気配りできるで賞」、「ケア技術すばらしいで賞」の票数は50以下であった。

2. 虐待の芽アンケートの結果は以下の通りである。

表1 虐待の芽アンケート結果(抜粋)

チェック項目	2021年6月			2021年10月			2022年4月		
	している	していない	見た・聞いた	している	していない	見た・聞いた	している	していない	見た・聞いた
3利用者に対して、威圧的な態度、命令口調(「OOLして!ダメ!」など)で接していませんか?	11.3%	69.4%	19.4%	4.7%	74.1%	21.2%	4.5%	79.1%	16.4%
6利用者に対して、「ちょっと待つて」を乱用し、長時間待たせていませんか?	11.3%	79.0%	9.7%	12.9%	76.5%	10.4%	10.4%	79.1%	10.4%
13利用者に対して乱暴で雑な介助や、いい加減な態度・受け答えをしていませんか?	0.0%	88.7%	11.3%	1.2%	89.4%	9.4%	1.5%	94.0%	6.0%

## VI 考察

今回の取り組みを行う前後のケアの質を評価するために、「虐待の芽」アンケートの各項目を「あなたが認める〇〇な職員」アンケートの各賞に紐づけた。「声掛け上手で賞」、「聞き上手で賞」に該当するケアの項目は不適切なケアを「していない」回答数が向上した。一方で、「気配りできるで賞」、「ケア技術すばらしいで賞」に該当する項目の結果からは、回答者自身の意識は向上しているが、他職員が不適切なケアをしているところを「見た・聞いた」という回答が依然として多かった。

特定の職員だけが褒められるのではなく、全職員が褒められるようなケアを目指していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 鎌田洋, ディズニーの絆力, アスコム, 2012, pp111-115
- 2) 公益財団法人東京都福祉保健財団, 養介護施設従事者等による高齢者虐待防止に役立つ資料等のリンク集, <https://www.fukushizaidan.jp/105kenriyogo/link/>



題名	お客様の夢をもっと叶えよう ～Dreams come true～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	港区立虎ノ門高齢者在宅サービスセンター
発表者	小林千幸	共同研究者	青木里央
サービス種別	通所介護		

## I はじめに

私たちの施設には「ドリカム」というお客様の夢や希望を叶えるための取り組みがある。ドリカムの目的は「お客様の個性に合ったより良いケアを見つける」「お客様の生きる力をさらに引き出す」の2点である。しかし2021年度のドリカム達成件数は前年度と比べて減少してしまった。今一度ドリカムを大切に、力を入れていきたいという思いから、研究のテーマに設定した。

## II 目的

ドリカムの達成件数が減少した原因を明らかにするとともに、今後増やしていくための方法を考察する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年1月10日～2022年6月4日

ドリカム週間：5月30日～6月4日

### 2. 研究対象

全職員（17名）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 全職員にドリカムについてアンケートを実施。
- 2) 1の結果から「ドリカム週間」を実施し、その後のドリカム達成件数の変化をみる。
- 3) ドリカム週間について再度アンケート実施。

## IV 倫理的配慮

アンケートに回答することにより研究に参加することを同意したこととする。

## V 結果

### 1. ドリカムについてのアンケート結果

- 1) ドリカムの流れを知らない 5人
- 2) ドリカムを実施したことがない 4人
- 3) ドリカムを増やす方法としては、「ドリカムを意識する」「ドリカム週間を実施する」「良い気付きを見つける」という回答があった。

2. ドリカムのマニュアルを作成した。

3. ドリカム週間実施後、お客様の夢を見つけた件数は3件増加、計画中が5件増加した。

4. ドリカム週間実施後のアンケート結果

ドリカムを意識してお客様とコミュニケーションをとるようになった職員は8割を超えた。

## VI 考察

ドリカム達成件数が減少した理由1として、コロナ禍でできる活動・機会を設けることができなかったことが考えられる。外出レクやカラオケなどの声を出す活動が制限され、夢として挙がっていても計画に移行できなかったことが原因である。アンケート結果から、ドリカム達成件数が減少した理由2に、ドリカムについて知らない職員が増えたことも考えられる。ドリカムを実施する目的や意義を理解できれば、職員の取り組む姿勢・意識が変わり、達成件数の増加につながると考えられる。ドリカム週間実施後には8割を超える職員がドリカムを意識してコミュニケーションをとるようになり、実際にドリカムを見つけた件数が増加したので、職員の意識の変化やドリカムの実施方法の把握によって、達成件数の増加につながるといえる。「良い気付きを見つける」取り組みにより、職員のドリカムに対するハードルを下げ、「自分にもできることがある」と思えるようになり、ドリカム達成件数を増やすことにつながるのではないかと考えられる。今回作成したマニュアルは、今後新入職員がドリカムについて理解するためのものとして利用していく。

今回の研究を通して、ドリカムの活動は職員全体で取り組むことが大切であることが改めて分かった。

### 【引用・参考文献】

- 1) 柴山雄三, 心の奥の宝物を探し出せ!～SECI(セキ)モデルを応用したチームケア向上プロジェクト～, 2017年チームケア学会, 2017年11月23日



# 研究発表会

《ROOM 4》

抄録

9月13日(火)

## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 4 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10:00 10:15	株式会社 日本ライフデザイン	デイサービスは人生の通過点	村松 沙織 淡路 拓也	67
2	10:15 10:30	医療法人社団 日翔会	在宅復帰に向けて～自信を取り戻そう～	園山 菜里	68
3	10:30 10:45	医療法人社団 ひがしの会	「黒胡椒、カプサイシン入りシートを利用した嚥下機能の変化について」	市原 広隆	69
4	10:45 11:00	医療法人財団 百葉の会	多職種と一緒に連携してリハビリしよう！ ～会いたい人のために支えたい～	渡辺 貴久美	70
11:00 11:15		休憩(15分)			
5	11:15 11:30	医療法人 北辰会	回復期リハビリテーション病棟における転倒・転落の予防策 ～センサー対象患者の選択～	松本 朝子	71
6	11:30 11:45	社会福祉法人 平成会	内出血予防と職員意識向上の取り組み	一ノ瀬 容子	72
7	11:45 12:00	医療法人財団 百葉の会	職員一人ひとりの危険予知能力について	高橋 しずか	73
8	12:00 12:15	社会福祉法人 水澄み会	セットミスゼロに～薬BOXの活用～	司山 直美	74
12:15 13:15		休憩(1時間)			
9	13:15 13:30	医療法人財団 百葉の会	快適に、そして清潔に過ごしていただくために	柳田 北斗	75
10	13:30 13:45	社会福祉法人 カメリア会	生活習慣の改善による排泄ケア	飯塚 素徳	76
11	13:45 14:00	医療法人社団 平成会	プロジェクトN 骨盤底筋運動で尿漏れ予防	江川 博之	77
12	14:00 14:15	社会福祉法人 苗場福祉会	非言語コミュニケーションによるレビー小体型認知症への関わり方	平賀 美雪	78
14:15 14:30		休憩(15分)			
13	14:30 14:45	株式会社 ライフアシスト	食事形態変更がもたらした自立支援介護への効果	長谷川 安里	79
14	14:45 15:00	社会福祉法人 苗場福祉会	以前の生活を取り戻したい ～自立を促す関りによって～	佐藤 汐莉	80
15	15:00 15:15	医療法人社団 緑愛会	在宅復帰を叶えるために ～チームアプローチの重要性について～	加藤 眞由子	81
16	15:15 15:30	株式会社 テイクオフ	誤嚥性肺炎を未然に防ぐ ～在宅を支える口腔ケア支援の在り方～	佐藤 成郎	82

<b>題名</b>	デイサービスは人生の通過点		
<b>法人名</b>	株式会社日本ライフデザイン	<b>事業所名</b>	デイサービス ARK 葉山の森
<b>発表者</b>	村松 沙織・淡路 拓也	<b>共同研究者</b>	村松 沙織・淡路 拓也
<b>サービス種別</b>	通所介護		

## I はじめに

リハビリ特化型デイサービスにてサービスを提供するにあたって、利用者のADL向上が最も多く聞かれるニーズであるが、今回はサービス提供・研究を通してその成果をより実感できた。またやりがいも感じられた。「通所介護にずっと元気に通って欲しい」と当たり前のように思っていたが、元気になって卒業して欲しいという考えも生まれた。

## II 目的

今回、若年で小脳梗塞を患い、寝たきりの期間が長く活動性が著しく低下し、経管栄養の方を受け入れる事となった。本人及び家族の希望は、将来的な生活機能の回復である。希望の実現に向けての取り組みを研究内容とし、それを発信する機会としたい。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年1月13日～8月31日

### 2. 研究対象

通所介護利用者 A 氏。40歳代、女性、要介護5

発症日：2021年7月6日 利用回数：週2回

主疾患：小脳出血 既往歴：高血圧

移動：リクライニング車イス全介助

排泄：バルーンカテーテル留置

食事：朝・夕経管栄養

昼経口摂取(極刻み、半量、一部介助)

入浴：シャワー浴、洗身・洗体全介助

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) 受け入れに際し各部署連携したカンファレンス
- 2) 送迎方法やサービス提供時間の検討(時短利用)
- 3) 本人の状態に合った機能訓練の内容の検討実施  
こまめに目標設定を行い、都度運動内容が変化。
- 4) 食事の経口摂取訓練

環境整備(介護食器・形態等)、摂取の様子観察

- 5) 職員とのコミュニケーション

共通の話題で通所を楽しく行えるよう工夫。

- 6) 課題・目標についてカンファレンスを都度実施

## IV 倫理的配慮

研究の趣旨を伝え利用者に同意を得ている。

## V 結果

利用時間：10:30～15:30の時短サービスから体力向上に伴い10:30～16:30に時間が延びた。

食事：自力にて全量経口摂取可能。(通所時の昼食のみ)介護食器や滑り止めを用意し、食べこぼし対策。極刻みから刻みに形態変更。

移動：サークル歩行器使用にて終日介助歩行

入浴：シャワー浴、一部洗身可能。失調対策で、タオル使用せずご本人の手で洗身。

コミュニケーション：職員や他のお客様と談笑される様子が見受けられる。「早く良くなって焼肉に行きたい」「仕事したい」と意欲的な意見が出た。

デイサービスの利用回数も増え、高齢の利用者との交流も見受けられる。

## VI 考察

利用者それぞれに課題があり、「目標」がある。そしてそれを実現するために全力でサービス提供する事が我々の使命であると改めて分かった。デイサービスに來たらずっと通って欲しい、ずっと支援していきいたいというのが普通だと思っていたが、利用者お一人お一人の希望を叶え、卒業できる事も大事な目標である。我々の仕事は、人生の通過点としての支援もあるという発想が生まれた。今後同じような症例に出会った時には参考になれば幸いである。

### 【引用・参考文献】

使用なし。



<b>題名</b>	在宅復帰に向けて～自信を取り戻そう～		
<b>法人名</b>	医療法人社団 日翔会	<b>事業所名</b>	介護老人保健施設 おしどり荘
<b>発表者</b>	園山菜里	<b>共同研究者</b>	太田満咲 生村愛
<b>サービス種別</b>	介護老人保健施設		

## I はじめに

今回、おしどり荘に入所したA氏は在宅復帰に向け、リハビリを行っていた。生活動作、歩行機能が向上し、在宅復帰目前だったある日、自室で転倒。そして「また転んだら」という不安で、依存が強くなり、積極的なリハビリが難しくなった。私たちは入所当初の「家に帰りたい」という強い希望、意欲を取り戻したいと考え、再び在宅復帰に向けサポートを行った。

## II 目的

転倒からの不安・精神面での落ち込みを克服し、在宅復帰を目指す。

## III 方法

1. 研究期間：2022年4月～2022年6月
2. 研究対象：A氏 80歳代女性 右大腿骨転子部骨折 高齢の夫と二人暮らし(娘は遠方にいる)
3. 具体的方法(評価尺度を含む)
  - 1)カンファレンスの実施
  - 2)自宅へ外出
  - 3)リハビリメニューの変更
  - 4)ご家族との関わりをつくる

## IV 倫理的配慮

本研究対象者、ご家族に対して研究の趣旨・目的を説明し、写真掲載についても同意を得ている。

## V 結果

### 1. 意欲や様子の変化

転倒への強い不安と消極的な言動が多く、リハビリへの意欲が低下した状態だったが、自宅への外出と、家族との交流をきっかけに、気持ちが前向きになり「もっと歩きたい」とリハビリに対する意欲が向上し、活気が戻った。

### 2. リハビリメニューの変更

自宅での生活動作を想定し、シルバーカー移動の強化、段差昇降訓練の追加を行った。

## 3. BI、FIMの推移

表1 Barthel Index (BI)

	入所時	3か月	転倒後	訪問後(5・6月)
移乗	10点	15点	10点	15点
トイレ動作	5点	10点	5点	10点
歩行	5点	10点	5点	10点
階段昇降	0点	0点	0点	5点

表2 Functional Independence Measure (FIM)

	入所時	3か月後	転倒後	訪問後(5月)	訪問後(6月)
更衣(下)	2点	4点	3点	4点	4点
トイレ動作	2点	4点	3点	5点	5点
移乗	4点	5点	4点	5点	5点

転倒後に低くなっていた点数は、内容を変更したリハビリの実施後に改善しており、入所時と比較してもすべての動作について点数が上がった。

## VI 考察

A氏はリハビリ意欲が高かった分、転倒による気持ちの落ち込みが大きかったと考えられる。自宅への外出は不安をより強くしてしまうのではないかと心配があったが、自宅での生活動作を実感できたことが、モチベーションアップのきっかけになった。また、自宅環境を想定したリハビリメニューに変更した事で、在宅復帰への意欲と、機能の向上に繋がった。ご家族との関わりについても利用者のモチベーション維持のために大切であると感じた。今回の取り組みでは不安が解消され在宅復帰に向けて意欲的にリハビリに取り組むことができるようになった。今後もリハビリ職として機能面だけでなく、精神面へのサポートもしていく事を大切にしながら取り組んでいく。



<b>題名</b>	「黒胡椒、カプサイシン入りシートを利用した嚥下機能の変化について」		
<b>法人名</b>	医療法人社団 ひがしの会	<b>事業所名</b>	小規模多機能ホームみのりの里安芸津
<b>発表者</b>	市原広隆	<b>共同研究者</b>	尾和聖太
<b>サービス種別</b>	小規模多機能型居宅介護		

## I はじめに

70歳以上の肺炎の7割が誤嚥性肺炎である。口腔体操、口腔ケア以外の方法で、また意思疎通が難しい（口腔体操等が出来ない）お客様のリスク軽減も図り、何よりも安心して食事をして欲しいと考えた。

## II 目的

嚥下ニューロリハビリテーションがお客様に与える影響と黒胡椒の形態やカプフィルムなどツールを変えた時に効果の違いがあるかを検証する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年2月6日～2022年7月3日

### 2. 研究対象

- ・当事業所を毎日利用されており、食事時にムセがある意思疎通困難な80代女性A氏と左半身麻痺の意思疎通可能な80代女性B氏 2名。

### 3. 具体的方法

- 1) 嚥下ニューロリハビリテーションの文献を職員に説明し協力を仰ぐ
- 2) 黒胡椒(ホール)10gをガーゼに包み、枕元に設置(1カ月毎に交換)
- 3) 食前1分間、黒胡椒の香りを嗅ぐ
- 4) 食前にカプフィルムを舐める(5/17～)

### 4. 評価尺度

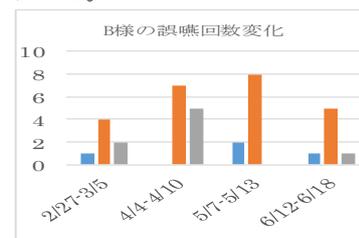
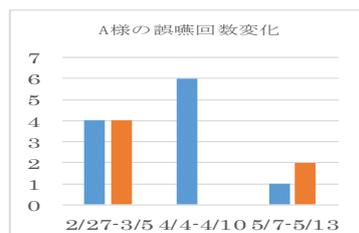
- 1) 嚥下状態確認表(ムセ回数)を作成し1ヶ月のうち1週間の記録を取る
- 2) WST(水飲みテスト)
- 3) RSST(反復唾液嚥下テスト)

## IV 倫理的配慮

利用者とその家族に口頭、書面の両方で同意を得た。

## V 結果

A氏、B氏の誤嚥回数変化、またB氏のWSTとRSSTの結果は以下の通りであった。



## VI 考察

黒胡椒の形態(ホール、アロマ油)が違っても一定の効果を得ることが出来た。黒胡椒、カプサイシン効果によりB氏の唾液分泌量の増加のため流涎に繋がり中断となった。だが、中断が無ければ継続的に効果が得られたのではないかと推測される。専門職や特別な医療機器が無い施設でも費用対効果は高く(30円/月)簡易的な方法と考える。

### 【引用・参考文献】

- (1) 山口学、本多英俊、本多俊伯、池田徳彦「療養型病棟における黒胡椒を用いた誤嚥性肺炎予防」日気食会報、69(1)、2018.pp.13-16
- (2) 海老原覚「嚥下障害のリハビリテーション」日老医誌 2015 ; 52 : 314-321
- (3) 海老原覚「TRP受容体刺激及びアロマセラピーによる高齢者摂食・嚥下障害治療戦略」

[URL:www.rouninken.jp/member/17\\_pdf/vol.17\\_02-17-01.pdf](http://www.rouninken.jp/member/17_pdf/vol.17_02-17-01.pdf)

[NST勉強会 ～摂食・嚥下機能～ \(hospital.tottori.tottori.jp\)](http://hospital.tottori.tottori.jp)



<b>題名</b>	多職種と一緒に連携してリハビリしよう！ ～会いたい人のために支えたい～		
<b>法人名</b>	医療法人財団 百葉の会	<b>事業所名</b>	グループホームみずあおい
<b>発表者</b>	渡辺貴久美	<b>共同研究者</b>	大石明奈 岡部佑馬
<b>サービス種別</b>	認知症対応型共同生活介護		

## I はじめに

A 事業所デイサービスをご利用中の A 氏。2021 年に家族と受診中に転倒、左大腿骨頸部骨折で入院となる。認知機能の低下もあり、安静が守れないと判断されて、保存的加療方針となる。リハビリ目的で市内の介護老人保健施設へ入所するも、家族より、今入所中の場所よりも「本人にとって慣れ親しんだこちらのグループホームへ入居して、リハビリをおこない、歩けるようになり、また一緒に暮らしたい」とご希望がある。入居後のリハビリ支援は可能か、グループホーム職員だけではなく、デイサービスの職員も合わせて検討し、A 氏のために協力することを決意する。多職種で協力して、A 氏や家族が望む生活を継続するために取り組んだことを報告する。

## II 目的

A 氏・家族の「家に帰ってまた一緒に暮らしたい」という希望を叶えるために、多職種で目標を共有し、チーム一丸となり、A 氏を支え、叶えていく。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年5月1日～2021年8月31日

### 2. 研究対象

A 氏 70 歳代 女性 要介護 3  
アルツハイマー型認知症、関節リウマチ

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 多職種での協力、取り組み  
介護職だけではなく、作業療法士（以下 OT）や看護師（以下 NS）にも協力要請
- 2) リハビリへの取り組み  
マシントレーニング、OT による適宜歩行の評価

### 3) 活動性を高める取り組み

家事動作やレクリエーション活動、家族との協力

## IV 倫理的配慮

A 氏と A 氏の家族へ本研究の目的について口頭にて説明と写真使用について同意を得ている。

## V 結果

今回意向を実現するために、グループホームの職員が協力してリハビリトレーニングをおこなった。また、OT や NS、デイサービスの職員も協力するなど積極的に A 氏へアプローチをかけていったことで、A 氏は自宅へ戻ることができた。定期的にリハビリ専門職が関わり、歩行能力が低下した A 氏の評価をし、プログラムを立ててもらえたことで、グループホームの職員でも、歩行訓練をおこない、ひとつずつ目標をクリアしていくことができた。ひとつずつ目標をクリアしていく達成感にも繋がったとの声も聞いている。

## VI 考察

先行研究を調べる過程においても、グループホームから在宅復帰をした例はほぼ見られなかった。飯塚らは「施設での指導はニーズが広く、指導や成果が判定しづらい」<sup>(1)</sup>と述べているが、今回は適切な指導をもらい、多職種で連携できたことで、日常生活動作の向上や生活状況を改善できたと考えられる。グループホームを退所した後も、A 氏や家族の意向をくみ取り、その方らしく笑顔でいれる環境を提供し続けていきたい。

### 【参考文献】

- 1) 飯塚浩二、齋藤真徳、奥田紘祥、大塚幸永、当院における生活機能向上加算対象事業者への派遣活動について、第 55 回日本理学療法学会学術大会、2021 年 12 月 21 日



題名	回復期リハビリテーション病棟における転倒・転落の予防策～センサー対象患者の選択～		
法人名	医療法人 北辰会	事業所名	蒲郡厚生館病院
発表者	松本朝子	共同研究者	高井沙弥子 渡邊恵里
サービス種別	病院		

## I はじめに

回復期リハビリテーション病棟であるA病棟において、一昨年のインシデントレポート件数で最も多かった項目は、転倒・転落であった。現在、転倒・転落予防として離床センサー（以下、センサーとする）を導入しているが、現状はセンサーを設置する基準がなく、個々で設置の判断を行っている。

## II 目的

センサーの設置基準を作成・運用することで、転倒・転落件数の減少に継げることを目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年3月1日～2022年5月31日

### 2. 研究対象

- 1) A病棟看護師16名
- 2) 2020年4月～2021年3月と、2022年4月～5月のA病棟で発生した転倒・転落のインシデントレポート

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) A病棟看護師に対して、現状のセンサー設置の判断を知るためのアンケート調査を実施する。
- 2) センサー対象患者を選択するための設置基準を定め、運用する。
- 3) 基準を使用した後、A病棟看護師に対して、センサー設置基準の有用性に関するアンケート調査を実施する。また、期間内のインシデントレポートのセンサー設置なしの転倒・転落の集計を取る。

## IV 倫理的配慮

アンケート調査については、無記名調査の為、個人情報記載はなしとした。尚、本研究の実施にあたって、医療法人北辰会倫理委員会の審査・承認を得た。

## V 結果

1. アンケート調査の結果から、センサー設置の判断は個々で異なっており、センサー設置の基準があることで、転倒・転落件数が減少すると考えているスタッフが多い事が明らかとなった。
2. センサーの設置基準を作成し、2ヶ月間、基準の運用を行った。
3. 運用後のアンケート調査の結果から、設置基準は有効であり、A病棟看護師全員が今後も設置基準の運用は必要と判断した。また、センサー設置なしの転倒・転落のインシデント件数は4件であり、一昨年の2ヶ月間の平均件数は7.2件であった。

## VI 考察

回復期リハビリテーション病棟では、その病棟の特性から転倒・転落のインシデント件数が多い。センサー設置基準を定めた事で、全ての看護師が統一したセンサー設置の判断ができるようになる。本研究にて、短期間ではあるものの、転倒・転落のインシデント件数が減少したため、センサー設置基準を継続して運用することで、今後も転倒・転落のインシデント件数の減少に繋がっていくことが予測される。今後の課題としては、センサー適応患者の見逃しは減少したものの、病棟内でのセンサー使用数が多くなったため、ナースコール対応頻度が増え、スタッフの業務負担増大に繋がっていることである。今回作成したセンサー設置基準には、センサー継続の評価を定期的に行う項目も含まれている。しかし、現状は評価を行えていないため、今後はセンサーの必要性の判断を定期的に行っていくよう改善が必要である。

### 【参考文献】

全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会機関誌 2011年10月号, 回復期リハ病棟のリスクマネジメント, 全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会, 平成23年11月, p5～13



題名	内出血予防と職員意識向上の取り組み		
法人名	社会福祉法人 平成会	事業所名	リアンヴェール美里
発表者	一ノ瀬容子	共同研究者	佐々木典子 荒井由希
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

原因不明の内出血が多くあがっているA氏の内出血を取り組みにより減らすことができればと考えた。

## II 目的

A氏の身体状況を把握し、原因不明の内出血の減少、職員の内出血に対する意識の向上と再発防止を図る。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年4月～2022年3月

### 2. 研究対象

A氏 90代

服薬：フロセシド4%、スピロラクトン(25)、クエン酸第1鉄Na、アロプリノール100mg、一硝酸イソソルビド錠、

既往歴：アルツハイマー型認知症、喘息、慢性心不全、誤嚥性肺炎

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) 身体状況の把握：入浴前後に皮膚状態の観察を行い「内出血、表皮剥離追跡表」へ日付と大きさを記入し内出血のしやすい箇所を把握する。
- 2) 環境整備：アームレストにカバーをかけ、前開きの衣類への変更を行う。
- 3) 皮膚状態の観察：乾燥していないか確認し、ボディークリーム、ワセリン等を塗布して経過を見る。
- 4) 他職種との連携：理学療法士と協力し、移乗方法の再検討を行う。看護と連携し服薬や体重の推移など栄養状態を把握する。
- 5) 職員の内出血に対する意識の向上を図り、早期発見と再発防止に繋げる。

評価尺度：前年度の事故発生件数との比較を行う。

## IV 倫理的配慮

この研究における内容、写真などの掲載については

A氏、ご家族に趣旨を説明し同意を得ている。

## V 結果

事故件数詳細は以下図1となる。

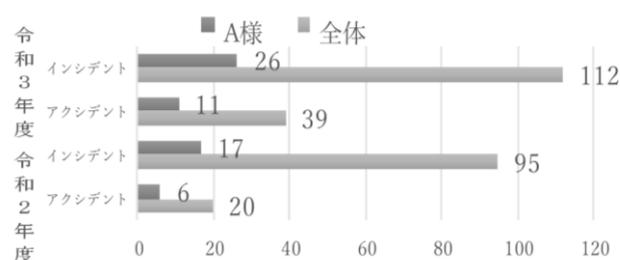


図1 内出血事故件数の比較

1. 2名対応でボディーチェックし内出血、「表皮剥離追跡表」へ記載する事により50%が左半身に出来ている事が判明した。身体状況の把握をすることで早期発見、報告、情報共有が行えた。多職種と連携し移乗方法を統一する事が出来た。
2. 環境整備として車椅子のアームレストにカバーを使用し、前開きの衣類の着脱方法などを統一した。
3. ボディークリームを塗布することで皮膚の乾燥を防止出来た。
4. 体重の減少に伴い内出血が増加しており、栄養補助食品を追加し経過を見ている。
5. 職員の気づきが増え、内出血の早期発見が事故件数増加に繋がったが、早い段階で対策を行うことで、大きな内出血が減少した。

## VI 考察

今回の研究にて、職員の原因追及意識や危機管理意識の向上を図ることができた。内出血事故件数をゼロにする事は難しいが、各部署と連携する事で、アイデアを出し合う現在の体制を継続し、安全安心な生活を送って頂く為に内出血予防に仕組み、原因を多面的に考えて行く事が重要であると考えます。



題名	職員一人ひとりの危険予知能力について		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	介護老人保健施設 鶴舞乃城
発表者	高橋しずか	共同研究者	岡村駿 鈴木皓介
サービス種別	通所リハビリテーション		

## I はじめに

自部署は平日 60 名、日曜日 30 名定員の通所リハビリテーションチームである。これまで、ハインリッヒの法則に従い、インシデントに繋がる前の事象（以下インシデント B とする）を多く挙げる取り組みを行ってきた。半面、報告する職員の偏りや、日々内容の似た事象が多く挙がること、過去に起こったお客様に不利益を与えた事象（以下アクシデントとする）、間違っただけで行ったが、利用者には不利益を与えなかった事象（以下インシデント A とする）の対策が風化している様子があり、取り組みが有効に活用されていないのではないかと考えた。そこで職員に対しインシデント B についての意識調査を実施し、課題を明らかにし、対策を講じた。

## II 目的

1. インシデント B の件数増加
2. 職員の危険予知能力の向上

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年10月1日～2022年5月31日

### 2. 研究対象

通所リハビリ職員 19名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) インシデント B についての意識調査アンケート
  - Q1. インシデント B を記入していますか
  - Q2. インシデント B を見直していますか
- 2) アクシデント・インシデント A の集計の可視化
- 3) インシデント B 記入用紙の見直し
- 4) 危険予知訓練（以下 KYT とする）の実施
- 5) インシデント B の集計・分析

## IV 倫理的配慮

研究目的を説明し、同意を得た。アンケート実施については個人が特定されないよう配慮を行った。

## V 結果

アンケートの結果、記入用紙が職員にとって身近でなく報告しづらい環境であること、過去の事象を振り返っている職員が少ないこと、毎月同じ事象ばかり挙がること課題として明らかになった。

そこで、過去のアクシデント・インシデント A を年度毎、事故分類ごと対策まで振り返りが出来るよう新しく用紙を作成した。また、インシデント B の記入用紙を専用の用紙から申し送りへの記入に変更した。

同じ事象の報告しか挙がらないという課題に対し、危険予知能力の低さと捉え、KYT を例題と自部署の環境に置き換えてのグループワークを行った。

インシデント B の月毎の件数の集計を行い、件数の推移は表 1 に示す内容となった。

表1 月毎のインシデントB集計数

月	10	11	12	1	2	3	4	5
件数	129	120	90	90	260	176	155	101

報告件数については有意な増加が認められなかったが、KYT の実施前後ではよりアクシデントに結び付く報告が挙げられるようになった。

## VI 考察

文献によると「情報収集しているだけでは、防止する事には繋がらない。職場全体で共有する事が重要である。」と述べられている。本研究において、件数ではなく内容に変化が現れたのは、危険予知能力の重要性や、情報共有の意味に気付けたことで、一件一件の事象をより深く捉え始めてられている職員一人ひとりの意識変容によるものだと考える。

利用者に安心、安全に過ごして頂く為に研究結果をチームとして取り組み続けていきたい。

### 【参考文献】

- 1) 地方公務員災害補償基金（著），（47）職場の安全対策 始めよう！危険予知訓練（KYT），2018



題名	セットミスゼロに～薬BOXの活用～		
法人名	社会福祉法人 水澄み会	事業所名	グループホーム ゆうな
発表者	司山直美	共同研究者	渡邊一輝 浅野妙子
サービス種別	認知症対応型共同生活介護		

## I はじめに

現在、業務でインシデント記入を行っているが、特に薬関連が多くその中でも薬BOXへのセット無しという同じ内容の事例が複数上がっていた。職員の確認により今までは服薬介助時のミスは防げているが、早急に原因究明し対策を取る必要があると考えた。今回の発表を機会に取り組むことにした。

## II 目的

現在起きている同じ内容のインシデント事例が再び発生しないやり方に改善し、安心したより良いサービス提供に出来るものになりたいと考える。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年4月～2022年2月末

### 2. 研究対象

介護職6名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 入れ替え管理していたのを廃止し、朝・昼・夕それぞれを3つの薬BOXで管理する。
- 2) 複数の職員でセット・BOX設置・確認をしていたが、セットは夜勤者、BOX設置と確認は日勤者(1名)が行うと統一した。
- 3) シンプルな薬BOXを制作する。
- 4) 暫定でトライし、問題あれば改善を行う。
- 5) 職員の意識レベル向上を目指し学習会を開催する。
- 6) 定期的に薬関連のインシデントを見直す場を設け対策・改善を行う。
- 7) 評価尺度。同様のインシデントが減少していく事で評価する。

## IV 倫理的配慮

本研究参加者には、研究目的・方法を説明し、不利益は無い事、及び個人情報の保護について同意を得る。

## V 結果

1日3回の薬セットを1つの薬BOX管理では無く朝・昼・夜の3つに分け、確認・BOXの入れ替えは日勤担当と統一した。この対策によりセット無しミスが発生しない方法に改善した。

## VI 考察

今回の薬セット無しミスは、記憶による作業が問題を引き起こし、また薬BOXの多くの情報(表示類)が眼に入ること、分かりづらく薬無しが発見しにくい仕組みによるものであった。動作の流れの中で薬BOXの添付無しが発生しない仕組みと、添付の有無が一目瞭然分ければ、薬セット無しミスは事前に防げる。今回の取り組みでいかに今まで人の記憶と確認を頼りに行ってきたか分かった。

また今まで何年と同じ流れで薬セットを行っていたものを急にやり方を変えた事で、薬セット無しミスは無かったものの薬関連のミスを多発してしまった。人による作業の変更の難しさを痛感した。

今後、薬の種類・回数の変更時にいつ、誰がBOX内の変更を行うかについては決められていない。その時になって誰かが行うだろうでは、やはりミスが発生してしまうと想像出来る。毎日の業務なら担当者を決めれば良いが変更がある時は不定期であり、流れに沿った動きが出来るかが課題である。

### 【引用・参考文献記載】

著者：JTソリューションズ「トヨタの片づけ」出版社：KADOKAWA 発行年2015年 P172～P189  
著者：神吉大輔「リスク予防」発行年：2022年 P114～P117



題名	快適に、そして清潔に過ごしていただくために		
法人名	医療法人財団百葉の会	事業所名	介護老人保健施設ききょうの郷
発表者	柳田北斗	共同研究者	木戸千明 青木京子 仁科智美
サービス種別	介護老人保健施設		

## I はじめに

A氏は、ベッド上で過ごす事が多い。トイレで排泄を行うことが困難な為、紙おむつとパットを使用していたが、おむつをいじる行為があり尿や便で衣類まで汚染することが多い。不衛生かつ異食による窒息のリスクも考えられた。そこで着用するおむつの種類を変えて改善がみられるか取り組みを行った。

## II 目的

パットをいじらなくなり、清潔を保ち、快適に過ごしていただく。

## III 方法

1. 研究期間：2022年4月1日～同年5月31日
2. 研究対象：A氏、70歳代、女性、要介護5  
既往歴：脳出血、嚥下障害、高次脳機能障害  
全介助レベルで介助拒否も強く、異食行為があり紙おむつのポリマーを破り、口に入れ窒息する危険がある
3. 具体的方法（評価尺度を含む）
  - 1) 2022年4月1日～4月28日 布パンツとパットを使用し、いじり方や頻度に変化がないか評価する。
  - 2) 2022年4月29日～5月30日 紙パンツのみを使用し、いじり方や頻度に変化がないか評価する。

## IV 倫理的配慮

本研究の対象となるA氏の家族へ、本研究と研究発表の説明行い同意を得ている。

## V 結果

おむついじりの変化を表1に示す。

表1 オムツいじりの変化

期間	回数	多い時間
4月1日～4月28日	17回	15:00
4月29日～5月30日	13回	15:00

布パンツとパット期間（4月1日～4月28日）

最初はパットをちぎる行為があった。2週目からは失禁の有無に関わらずパットを抜くようになった。

紙パンツのみの期間（4月29日～5月30日）

失禁後に紙パンツの縁や股間部を破っていた。

## VI 考察

着用するおむつのサイズや素材による違和感がおむついじり要因の一つである<sup>(1)</sup>との事例より着用する素材によるおむついじりの変化の比較に取り組んだ。紙パンツ時にいじりの回数が減少したことからパットが触れていること自体が不快でパットを引き抜く行為を行っており、パットが無くなったことでいじり回数の減少に繋がったと考えられる。紙パンツ使用時は失禁後のいじりに絞られたことから失禁後の不快感から手を伸ばしてしまうのではないかと考えた。また、おむつ・パットいじりが15:00に集中しており、この時間はA氏が居室で臥床し過ごされる時間帯であった。日中の過ごし方やA氏が興味を惹かれるものを考えるなどの環境を変える事でも変化があるのではないかと考える。今後の展望として排泄パターンを把握しパット交換の時間を調整することでさらにいじり回数の減少が図る事が出来るのではないかと考える。また、生活面や環境作りでも不潔行為の軽減に繋がれるのではないかと考える。

### 【引用・参考文献】

- 1) 認知症のおむつ外しやいじりを防ぐ介護の対策、～まもりんね～認知症の介護で悩んでいるあなたへ、2021年2月7日 2022年3月15日閲覧、<https://mamorinne.com/omutuhazusi/>



<b>題名</b>	生活習慣の改善による排泄ケア		
<b>法人名</b>	社会福祉法人カメラア会	<b>事業所名</b>	特別養護老人ホーム カメラア桜ヶ丘
<b>発表者</b>	飯塚 素徳	<b>共同研究者</b>	3 西南ユニット職員
<b>サービス種別</b>	介護老人福祉施設		

## I はじめに

高齢者の生活において多く発生している問題が便秘である。私達のユニットにおいても最終便から3日～5日経っても排便が無く不快に感じ精神的に不安定になる利用者が見られる。下剤の使用や摘便を行うなどして強制的に排便を促すことも出来るが本人にとってはとても負担が大きい。

日常生活に支障がなく組み込める形で自然に排便を促すことができないかと思い今回この研究を始めた。

## II 目的

QOL 向上

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年4月～2022年5月

### 2. 研究対象

A施設 A氏

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) 朝、夜牛乳摂取。

2) 温庵法

タオルを10分程温めファスナー付きプラスチック・バックに温かいタオルを入れ腹部と腰部を温める。

## IV 倫理的配慮

対象の利用者に対しては、研究内容・方法・同意について説明し、同意を得ている。また氏名はアルファベットで記載し、個人が特定されない様配慮を行った。

## V 結果

開始から順調に排便があった。朝夜の牛乳摂取は効果的だったが排便が出すぎてしまった為一旦中止すると再び便秘になってしまった。

温庵法は本人より効果が見られないとのこと。

また、排便がないものの関わる時間が増えた為本人

の精神状態が安定していた。

## VI 考察

今まで行っていたケアは、ただ現状の問題点を応急処置的な方法で解決しようとするに留まっていただけだと気づいた。

排便コントロールで重要な事は便秘＝下剤ではなく排便体操やマッサージ、食事内容の検討を試み、他職種との連携と情報交換を行いながら下剤に頼らずに最適な排便コントロール方法を見つけていくことが重要である。

自然排便に繋がるよう引き続き実践していきたい。

### **【引用・参考文献】**

腰部温罨法の便秘の症状緩和への効果

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsnas/9/3/9\\_4/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsnas/9/3/9_4/_article/-char/ja/)



題名	プロジェクトN 骨盤底筋運動で尿漏れ予防		
法人名	医療法人社団 平成会	事業所名	デイサービスセンターアルク CLASS
発表者	江川博之	共同研究者	五十嵐奈央
サービス種別	通所介護		

## I はじめに

A氏、B氏のご利用時の様子について、以前より尿失禁が増えており、来所時にすでに紙パンツが汚染している事が多くなっていた。また自身で紙パンツやパットの交換を行っているが、定期的に交換する事ができず、清潔保持が難しい様子が見られていた。

施設では利用者の自尊心を傷つけることなく、今後自分らしく生活する為、失禁防止運動を取り入れてみてはどうかと職員より案が出る。機能訓練指導員と話し合いを行い、全ての利用者を対象とした体操、メニューを考案し、期間を決めて骨盤底筋体操の効果について探っていく事となる。

## II 目的

骨盤底筋を鍛える事で、便・尿失禁の回数が減り、人間らしく尊厳ある生活を送る事ができる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年12月1日～2022年3月31日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代 要介護1 (男性)

B氏 80歳代 要介護3 (女性)

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) 骨盤底筋運動メニューの考案。メニュー作成後は研究者だけでなく、全職員が実施、指導できるように内容の説明を行う。骨盤底筋運動については、体操の時間に全ての利用者を対象とし、実施していく。
- 2) 研究対象となるA氏、B氏に便、尿失禁があった際に、その都度当日出勤スタッフに「正」の字にて記録してもらう。
- 3) 利用時の失禁状況を都度、データとして記録する。

- 4) 研究期間終了後に集計を行い、骨盤底筋運動の効果を確認する。

## IV 倫理的配慮

研究発表の題材とさせていただき、氏名をA氏、B氏とする事の了承を本人、家族に得る。

## V 結果

骨盤底筋運動の効果の確認方法について、月トータル失禁回数÷利用回数の計算を行い、一日あたりの平均失禁回数を探っていく。

A氏 12月平均0.5回 1月平均0.7回 2月平均0.4回 3月平均0.5回

B氏 12月平均1.1回 1月平均0.7回 2月平均0.9回 3月平均0.4回

A氏:平均失禁回数について大きな変化は見られず、効果を確認する事ができなかった。

B氏:12月平均1.1回あった失禁回数が3月には0.4回と減少が見られ、数値的に効果があった。また、一日当たりの失禁回数について利用時に複数回あった失禁が減少し、失禁が無い日も見られた。

## VI 考察

今回の研究は来所されたすべての利用者が骨盤底筋運動を実施しており、利用者より体操のおかげで尿漏れをしない、メニューがほしいという声が聞かれた。今回の研究手法ではA氏に対する効果について効果があると明確な結果は得られなかったが、上記の様な声が聞かれた事から、骨盤底筋運動は失禁に対して効果的なアプローチであり、利用者の尊厳ある生活に役立てる事ができると感じている。

### 【参考文献】

- 1) 梶原史恵他, 「尿失禁に対する骨盤底筋訓練の効果の検証」愛知県理学療法学会誌 25号, 2013年5月31日発刊, P19-23



題名	非言語コミュニケーションによるレビー小体型認知症への関わり方		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	グループホーム花水木
発表者	平賀 美雪	共同研究者	小宮山 未矢 岡村 絵里奈
サービス種別	認知症対応型共同生活介護		

## I はじめに

2021年12月4日に入居されたA氏は夜間になると「誰も居なくなった」と繰り返し眠れない日が多かった。センター方式シート・とひもときシートでのアセスメントし、非言語コミュニケーションでの対応を取り入れた行動・心理症状へのアプローチにより夜間の睡眠時間の確保につながった事例である。

## II 目的

夜間においてA氏が職員と意思疎通が図れ安心して眠ることができる。

## III 方法

1. 研究期間：2022年4月1日～6月30日
2. 研究対象：A氏 80歳代 女性 要介護度3  
認知症自立度Ⅲa 寝たきり度A1  
主病 レビー小体型認知症
3. 具体的方法（評価尺度を含む）
  - 1) センター方式シート・ひもときシートでアセスメント実施
  - 2) 1) 結果より非言語コミュニケーションの実施
  - 3) 研究期間におけるA氏の睡眠データ
  - 4) ユニット職員（9名）へアンケートとBPSD+Qを前後評価

## IV 倫理的配慮

本研究の対象者及びご家族、職員に個人情報と写真掲載の取り扱いについて口答と書面にて説明し同意を得た。

## V 結果

1. レビー小体型認知症の日内変動により夜間は特に言語コミュニケーションの疎通が低下する傾向を把握できた。
2. 非言語コミュニケーションであるアイコンタクト・タッチング等を取り入れたことで夜間での意思疎通が図れ安心して繋がった。

## 3. 研究期間の睡眠データ（平均値）

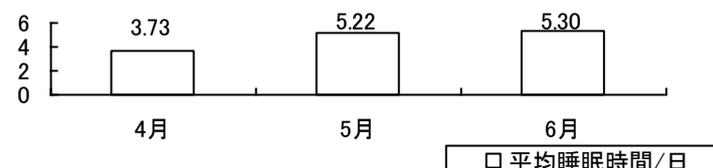


図1 1日あたりの平均睡眠

4. BPSD+Q アンケートから対応の実施前後では負担が減少したと感じている職員が多かった。

表1 BPSD+Q 前後評価（平均値）

	重症度	負担度
対応前	46	38
対応後	31(-15ポイント)	27(-11ポイント)

## VI 考察

レビー小体型の特性を理解し日内変動があることの把握はとても重要である。「対話において言語によるメッセージは全体の35%、残りの65%は話し方や動作といった言葉以外の手段で伝わる」<sup>1)</sup>とある。マスク越しの会話を余儀なくされる現状で、アイコンタクトの重要性を理解し、コミュニケーションの取り方にも症状にあった使い分けをすれば意思疎通が図れ、認知症を抱える方への安心につながると考える。非言語コミュニケーションを苦手と感じている職員に対してアプローチしていくことが今後の課題である。

## 【引用・参考文献】

- 1) 大庭輝・佐藤眞一 認知症 plus コミュニケーション：日本看護協会出版会 2021年 58P
- 2) 認知症介護研究・研修東京センター 四訂認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式の使い方・活かし方：中央法規出版 2019年
- 3) 認知症介護研究・研修東京センター みえる認知症ケアひもときシート“アシスト”BPSD改善ガイド：中央法規出版 2019年



題名	食事形態変更がもたらした自立支援介護への効果		
法人名	株式会社 ライフアシスト	事業所名	介護付有料老人ホームアーバンリビング今宿
発表者	長谷川安里	共同研究者	下込智也
サービス種別	特定施設入居者生活介護		

## I はじめに

A氏は在宅で生活していたが、2021年9月24日より倦怠感認め起立不能となり、精査・加療目的で入院。著名な脱水傾向見られる。入院時、ペースト食にて8～10割自己摂取していたが、10月4日、腰痛訴え強くあり、腰椎圧迫骨折と診断され、コルセット装着となる。コルセットの圧迫が原因で嘔吐に繋がり、3～6割摂取と摂取量が低下しペースト食が続いていた。退院後、本施設での入居生活を送る中で、ご家族より自宅にいた頃と同じように過ごしてほしいと要望があり、入居1週間前から病院にて食事形態を主食軟飯・副食一口大へ変更し退院に向けての準備をされた後、2021年11月29日、本施設へ入居となる。

## II 目的

「みんなと一緒にもの（常食）が食べたい。」という思いを叶えることを目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年11月29日～2022年5月31日

### 2. 研究対象

A氏、80歳台、女性、要介護4

既往歴：高血圧、白内障、脱水、尿路感染症

現病歴：腰椎圧迫骨折

障害高齢者の日常生活自立度 B-1

認知症高齢者の日常生活自立度 IIIa

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

①義歯の調整：歯科往診で義歯調整。食事形態変更。

②環境に慣れる：施設での役割をつくる。

③不安を解消する：家族様と話す機会をつくる。

## IV 倫理的配慮

今回の研究に関する目的、取り組み内容をA氏、A氏のご家族様に説明し、同意を得ている。

## V 結果

入居当初は食事形態を主食軟飯、副食軟菜一口大で平均1～5割摂取していたが、徐々に食事が減少。義歯が合わず食事形態をペースト食へ変更するが、食事量変わらず食思低下。日中は落ち着かず、拒薬や帰宅願望あり。改善策として①義歯の調整をして、食事形態を主食全粥・副食キザミ食へ変更した。②日中、洗濯物たたみ等、レクリエーション活動に取り組む。③家族との面会や電話で話をする機会を作った。①～③を続け、徐々に食事が増加し、8～10割摂取可能となった。歩行はフロア自席からトイレへの歩行器歩行練習を開始し、筋力アップし歩行器歩行が見守りとなった。入居当初の排泄は、リハビリパンツとパットを使用していたが、食事量・水分量が増加するにつれ、尿意を認識できるようになり、トイレへ行く意欲もみられた。失禁も少ないため、布パンツとパットへ変更し、トイレでの排泄が出来るようになった。

## VI 考察

入居時より義歯の調整をしたことで、食事量・食思の低下は改善できた。また、レクリエーション活動で施設での役割をつくり、新しい生活環境への適応を図る。家族と話す機会をつくることで帰宅願望の軽減を図る。そして、不適切な食事形態、慣れない環境、帰宅願望による不安を取り除くことで「みんなと一緒にもの（常食）が食べたい。」という食事に対する意欲が向上すると共に、歩行や排泄に対する意欲が向上したと考える。

### 【引用・参考文献】

竹内孝仁：介護の生理学、秀和システム

竹内孝仁：介護の基礎学、医歯薬出版



題名	以前の生活を取り戻したい ～自立を促す関りによって～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	特別養護老人ホーム雪あかり
発表者	佐藤 汐莉	共同研究者	小林 大 西尾 亜佑美 関谷 昂史
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

食事、排泄、移動など身の回りのことは自身で行っていたA氏が2月下旬に発熱、視床出血にて入院となった。3月上旬に退院されたが、右側に麻痺が残り、介助量が増大した。麻痺のない左側からのアプローチを検討したが、A氏が以前のように右側を使用しながら身の回りのことをされようとする様子が見受けられた。A氏の意向を汲み取りながら自立支援を行い、得られた成果について報告する。

## II 目的

A氏が入院前に行えていた、食事、排泄、移動が自身で行える。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年3月8日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

A氏 80歳代 男性 要介護3 利き手：右手  
既往歴 関節リウマチ、変形性膝関節症、高血圧  
認知症自立度Ⅱa 日常生活自立度J2

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) A氏の日中、夜間の様子を記録に残し、意向を職員間で共有する。
- 2) A氏の意向に合わせた食事や排泄、移動介助に支援内容を変更する。

#### 評価尺度

入院前 食事、排泄は自立。移動は独歩。

退院直後 食事は半介助、排泄は終日オムツ対応（フォーレ留置）、移動は車椅子全介助。

退院後どのように状態変化していくか経過を追う

## IV 倫理的配慮

本人ならびにご家族に本研究の説明を行い、写真掲載についても同意を得た。

## V 結果

【食事】利き手の右手で摂取したいA氏の意向に合わせ、右手での摂取を促したが食べこぼしが多く、エプロン使用。途中から疲れも見られ、介助が必要。4月上旬、食べこぼしはあるものの右手で全量摂取可能。6月には食べこぼしも見られず、エプロン使用なし。

【排泄】退院後はフォーレ留置だったが、4月上旬から2度フォーレの自己抜去あり。トイレでの排泄希望があり、自尿が見られたため、4月下旬からはトイレでの排泄が可能となり、現在では日中の失禁なし。

【移動】退院直後は車椅子介助であったが、フォーレ抜去が見られた頃から立ち上がって歩行されようとする様子が見られた。歩行への希望が強く、歩行での移動を支援。その後もふらつきは見られるも、現在では居室～トイレ間は手すりに掴まり歩行できるまでに回復している。

## VI 考察

利用者の安全を考慮し、麻痺のない左側を主に使用しての動作、介助の検討を考えたが、退院後ご自身で食事を召し上がろうとする姿やフォーレを自己抜去しトイレにて自身で排泄される様子やA氏の意向を読み取り、職員間で共有し、あえて麻痺のある右側の動作を積極的に支援したことによって入院される前の生活に近づけることができたと考える。

利用者が自立して身の回りの動作ができる、取り組める環境づくりによって利用者との関り方と利用者の行動が変わっていき、私達はそこに努めていかなければならないと考える。

### 【引用・参考文献】

Web ページ：{kana,} 【片麻痺の観察と支援】と4つの場面（食事・入浴・排泄・外出）{,vol.28},介護ラボ,{2021年2月11日},閲覧日2022年3月15日, Vol.28 kanalog | 介護ラボ(kanalog-kaigo.com)



題名	在宅復帰を叶えるために ～チームアプローチの重要性について～		
法人名	医療法人社団 緑愛会	事業所名	介護老人保健施設 オー・ド・エクラ
発表者	加藤眞由子	共同研究者	松谷晴香 安室名保美 阿部めぐみ
サービス種別	介護老人保健施設		

## I はじめに

A 氏はくも膜下出血を発症し、日常生活動作 (Activity of Daily Living : 以下 ADL とする) 全てに全介助を要し、食事は胃瘻からの経管栄養であった。キーパーソンの夫 (Key Person : 以下 KP とする) からは「3 カ月で自宅に戻りたい。しかし、A 氏と二人暮らしの為、家族一人の介助で車椅子に移れるようになってほしい」との希望が聞かれた。在宅復帰には、「離床」「オムツ交換」「経管栄養」について KP へのアプローチが必須であった。関係職種全員で介入し、在宅復帰を実現できた事例について報告する。

## II 目的

1. A 氏の移乗動作の介助量軽減を図る。
2. 介護指導を実施し、KP がオムツ交換と経管栄養の対応ができる。

## III 方法

### 1. 研究期間

入所期間の 2021 年 6 月 24 日～9 月 30 日

### 2. 研究対象

A 氏 70 歳代女性 要介護 5

<主病名> くも膜下出血

<症状> 右片麻痺 失語症 右半側空間無視

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

退所の目安を 9 月末とし、ケアマネジャー指揮のもと KP への介護指導時期を退所一ヶ月前から開始とした。KP は介護方法の習得に不安を感じており、多方面から情報が入ることによる混乱が予想された為、KP とのやり取りは相談員とケアマネジャーに窓口を絞って対応した。入所後訪問はケアマネジャー、相談員、リハビリ職員が実施し、退所後に必要なサービスを検討した。リハビリは離床訓練を中心に行った。8 月末から KP に介護指導を開始し、オムツ交換指導は

介護士が、経管栄養指導は看護師が行った。A 氏の介入前後の ADL 介助量の変化の比較の為に、評価尺度は機能的自立度評価表を使用した。

## IV 倫理的配慮

本研究に関する目的、取り組み内容を本人、KP に説明し同意を得ている。

## V 結果

離床は KP が行うことを想定してスライドボードを使用し、入所時は職員二人介助が必要であった。7 月から昼食時の離床を開始した。8 月には立位がとれるようになり、スライドボードを使用せずに職員一人介助で可能となった。9 月初旬には一部介助で可能となったが、高齢である KP の介護負担軽減の為、移乗介助は訪問サービスを活用することとした。ADL の変化を機能的自立度評価表で比較すると、入所時は 30 点だったが、退所前は 36 点となった。移乗、整容、更衣、理解、表出、記憶の項目で向上がみられた。

介護指導については、KP は初めての介護で不安を感じていた為、丁寧な説明と反復練習が必要であった。オムツ交換はすぐに対応できたが、経管栄養の対応は開始準備時の手順で困難さがみられた為、手順書を使用し退所間近まで練習を行った。その後、当初の予定通り 9 月末に当施設を退所し在宅復帰された。

## VI 考察

本症例が在宅復帰を実現できたのは、入所後訪問で退所後の生活を具体的に想定したサービス計画を立案できた事や、離床訓練と介護指導の双方を入所直後から計画通りに進めたことで、KP の不安を取り除きながら関係者全員が具体的な在宅復帰後の生活イメージを共有できた為と考える。また、相談窓口を統一したことで、情報が錯綜せずに在宅復帰を願う KP の気持ちに寄り添うことができたと考える。



題名	誤嚥性肺炎を未然に防ぐ～在宅を支える口腔ケア支援の在り方～		
法人名	株式会社 テイクオフ	事業所名	ケアセンターとこしえあたご
発表者	佐藤成郎	共同研究者	上林拓也 小関麻理
サービス種別	小規模多機能型居宅介護		

## I はじめに

2019年に口腔ケア支援の在り方について研究し、マウスウォッシュ（以下、洗口液とする）は誤嚥性肺炎予防に効果的であるのではないかと考えられた。その後、洗口液を使用したことで2019年1月から2022年8月まで誤嚥性肺炎の発生は0である。同時に入院による解約者も激減した。

しかし、食事の際、咽込む方がいて気になった。共通点は宿泊が10日未満で、自宅での口腔ケアがしっかりと行っているか疑問を感じた方々だった。在宅中の口腔ケアの現状を確認し、自宅でも洗口液を使用し頂くことで、誤嚥性肺炎の予防をより強化したいと考え、今回の研究を開始した。

## II 目的

洗口液の効果を再確認すると共に、在宅中心の利用者の誤嚥性肺炎を予防する

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年8月～2022年6月

### 2. 研究対象

宿泊が10日未満の在宅中心のA氏・B氏

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 口腔ケア手順書の共通理解。ご家族に状況を説明し、自宅で朝・晩洗口液を使用し頂く。
- 2) A氏・B氏に歯垢染色液を使用し、洗口液を使用した前後2ヵ月の比較を行う。
- 3) KT バランスチャートを使用し、A氏・B氏の身体状況を確認する。
- 4) A氏・B氏の利用日に咽込み回数の変化を確認する。評価尺度はKT バランスチャートの嚥下項目で評価を行う。

## IV 倫理的配慮

研究対象者及び家族に対し、研究の目的、方法、

個人情報の取り扱いについて説明し、同意を得る。

## V 結果

- 1)・2) 歯垢染色液使用後のA氏・B氏の口腔内の汚れを検査すると、汚れが多かった。その後洗口液を使用した所、歯間の汚れが減少した。
- 3) 洗口液を使用した前後2ヵ月のKT バランスチャートを比較した結果、A氏・B氏共に口腔状態の項目が2から4へ改善した。
- 4) A氏の咽込み回数に変化は無かったがB氏は減少した。KT バランスチャートの嚥下項目はA氏が変化無く、B氏は2から4へ改善した。

## VI 考察

食べることは生きることである。お口の健康は全身の健康にも繋がっている。口腔内を清潔に保つことはオーラル・フレイルを予防すると共に、食べる意欲、体力維持向上、そして生きる意欲をもたらす。洗口液を製造する会社に効果を確認したところ、殺菌作用のあるCPC（塩化セチルピリジニウム）が含まれている。従って、誤嚥性肺炎予防に繋がると推測される。染色液を使用した結果、口腔内の汚れも2ヵ月前とは違うことは確かだった。そして、現在も誤嚥性肺炎が発生していないことは大きな成果と言える。利用者自身のほんの少しの努力で生活の質が向上できる。事業所を利用している方は今後も自宅での生活を望んでいる。その方を支えるのが私達の役割である。利用者と共に生活を見つめ、ニーズに沿った生活ができる様、今後も継続して口腔ケア支援を行って行きたい。

## 【引用・参考文献】

- 1) 小山珠美, 口から食べる幸せをサポートする包括的スキル, 医学書院, 2017/7
- 2) 一般社団法人日本口腔ケア学会, 関連図から見た口腔ケア, 株式会社永末書店, 2016/8



# 研究発表会

《ROOM 5》

抄録

9月13日(火)

## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 5 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10:00 10:15	社会福祉法人 苗場福祉会	園芸部発足！生花がもたらした彩りある日常	武田 京子	85
2	10:15 10:30	医療法人財団 百葉の会	余暇活動の実施と生活動作能力の関連について	剛力 優斗	86
3	10:30 10:45	株式会社 日本ライフデザイン	自分らしく人生を謳歌するために	紅谷 歩	87
4	10:45 11:00	医療法人社団 ひがしの会	レクで始める生きがい支援 ～くらしを彩るレクへの挑戦～	國崎 見咲	88
11:00 11:15		休憩(15分)			
5	11:15 11:30	医療法人社団 藤友五幸会	生活リハビリでのお客様の身体機能面、職員の働き方の変化について	長谷 健太	89
6	11:30 11:45	社会福祉法人 湖星会	機能訓練を通して生き生きとしたラスールライフを！	熊崎 由衣	90
7	11:45 12:00	株式会社 テイクオフ	自宅でも体操を継続して行うための工夫	奥山 悠衣	91
8	12:00 12:15	社会福祉法人 湖星会	「起きるー！」動きたい気持ちに寄り添ったケア	久住 康博	92
12:15 13:15		休憩(1時間)			
9	13:15 13:30	株式会社 日本ライフデザイン	コロナ禍での地域交流の取り組み	渡邊 伸	93
10	13:30 13:45	社会福祉法人 湖成会	“停電” “断水” “道路寸断” ーこれからの自然災害にどう備えてゆかー	秋山 光	94
11	13:45 14:00	社会福祉法人 狭山公樹会	その小さな気づきが介護の質を高める～気づきに着目した事故防止委員会の取り組み～	片平 隼人	95
12	14:00 14:15	社会福祉法人 日翔会	介護ロボットを有効活用し、転倒・転落事故を減らしたい！！	美甘 泰幸	96
14:15 14:30		休憩(15分)			
13	14:30 14:45	社会福祉法人 湖成会	『食べてもらいたい』をチームと叶える	上妻 夏実	97
14	14:45 15:00	社会福祉法人 大和会	視覚情報による食意識向上への取り組み ～Instagram活用による大人のための食育活動～	山岸 めぐみ	98
15	15:00 15:15	社会福祉法人 苗場福祉会	コストをかけずに嚥下食のエネルギーアップ！？ ～備蓄品の活用～	田村 結衣	99
16	15:15 15:30	医療法人社団 緑愛会	「食べる」ことで続けられる生活	中川 智恵子	100

<b>題名</b>	園芸部発足！ 生花がもたらした彩りある日常		
<b>法人名</b>	社会福祉法人苗場福祉会	<b>事業所名</b>	特別養護老人ホームアルマ美浜
<b>発表者</b>	武田 京子	<b>共同研究者</b>	
<b>サービス種別</b>	介護老人福祉施設 短期入所生活介護 通所リハビリテーション		

## I はじめに

コロナ禍で日々の活動や人の行き来が制限され、利用者や職員の表情は暗くなりがちであった。

そのような中、施設長以下の有志メンバーで思案した結果、生花が持つとされる癒やしの効果をヒントに、2021年8月に園芸部を発足した。

## II 目的

1. イベント開催時に垣間見るとびきりの笑顔を日常に引き出す為に、多くの人が行き交う共有スペースを生花の香りや移り行く色彩で華やかにする事により、季節を演出し安らぎや癒やしを提供する。

2. 日常生活空間から、華やかとなった共有スペースへの「外出」により、気分転換する事が習慣化し、変化ある生活が日常となる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年9月1日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

A 事業所の利用者と職員

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) 嗜好調査を兼ね、季節の花々を積んだ移動式ラック（フラワーラック）にてラウンドする。

2) 利用者の習慣となるよう、季節の花々を1年中切らす事なく揃え、共有スペース等の動線上に効果的に配置する事で、より開放的で明るい空間演出とする。

3) 全部門の利用者を、共有スペースにご案内できるように本取り組みを職員に周知する。

4) 生花の鮮度を保つ為に、晴天時の日光浴だけでなく、外来者にも楽しんでいただく為に、エントランスの外側に、フラワーラックにて移動展示する。

## IV 倫理的配慮

発表にあたり、利用者・ご家族に書面にて内容説明

し同意を得ている。利用者への不利益や特定の業者との取引も存在せず利益相反関連事項はない。

## V 結果

1. フLOWERラックがユニットに入場した瞬間、居合わせた利用者の表情が一気に和らぎ、懐古談も引き出した。また、居室まで移動できるメリットを生かし多くの方に季節の花を觀賞していただけた。

2. 共有スペースは常設された生花により、彩りが日々移り行くものになり、外出ルートだけでなく通所の利用者のお出迎えお見送りが、賑やかで華やかなものとなった。「花を愛でる、見に行く、香りを感じる外出」が、機能訓練のやりがい、きっかけにも繋がった。また、生花の効果として移り行く季節と彩りを演出し、単に眺める、見るに留まらず、生活空間を豊かに変え、利用者や職員に安らぎと癒やしをもたらした。

## VI 考察

イベント時の笑顔を日常に引き出したいと始めた園芸部の活動であったが、各会議体への周知や日々増えていく生花への関心から、協力職員が増え、施設一体の取り組みに成長した。ブログ掲載や写真の配布による家族反響に加え、相談員の営業活動時にも多くの話題を得る等、想定し得なかった副産物も生み出した。

フラワーラックを採用した事で容易かつ効率的に太陽光を追って移動できる事で花持ちも良く、外来者からも多くの反響を得た。本取り組みを、継続実施する為に、2022年度は園芸部の活動費を予算化した。

与えられた施設設計をそのままにするのではなく、本取り組みで学んだ、五感に訴える居心地の良い空間づくりを、施設一丸となって追及していきたい。

### 【引用・参考文献】

1) 農研機構：花の鑑賞によるストレス緩和効果を実証 2020.7.3



<b>題名</b>	余暇活動の実施と生活動作能力の関連について		
<b>法人名</b>	医療法人財団 百葉の会	<b>事業所名</b>	アーマビリータ
<b>発表者</b>	剛力優斗	<b>共同研究者</b>	渡邊かおり
<b>サービス種別</b>	通所介護		

## I はじめに

趣味・生きがいなどの意味のある作業の実施から満足感や充実感を得ることで元気でいられる<sup>(1)</sup>との考えから当施設では余暇活動に重点を置いた選択できるレクリエーション（以下カルチャークラブ）を導入した。現状の振り返りと今後のカルチャークラブ、個別ケア発展のため本研究に取り組んだ。

## II 目的

利用者の余暇活動の実施と生活動作能力の変化との関連性を知り、今後の個別ケアに活かす。

## III 方法

### 1. 研究期間

2018年4月1日～2022年4月30日

### 2. 研究対象

研究期間当初から現在まで当施設に通所され、カルチャークラブに参加される利用者（27名）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

取り組み方に応じて利用者を3グループに分け、Barthel Index（以下BIとする）値の比較。

グループ1：個人作品に取り組む利用者（8名）

グループ2：共同作品に取り組む利用者（7名）

グループ3：活動に声掛けが必要な利用者（12名）

## IV 倫理的配慮

対象となる利用者のご家族へ本研究と研究発表の説明を行った上で同意頂き、個人が特定されないよう配慮した。また研究に対し、協力された場合と異なる場合、それぞれの利用者に対し、利益・不利益が生じないように配慮した。

## V 結果

グループ別のBI値の比較を表1に示す。

表1 カルチャークラブへの取り組み方に応じたグループ別によるBI値の比較

	グループ1		グループ2		グループ3	
	2018年	2022年	2018年	2022年	2018年	2022年
合計	87.86	90.00	85.71	82.86	78.33	65.83

グループ1、2のBI値は維持傾向、グループ3のBI値は低下傾向である。

## VI 考察

原田らは「仕事を持たない高齢者にとって、余暇活動の満足度は生活の満足度につながる」と述べている<sup>(2)</sup>。グループ1は余暇活動が生きがいや楽しみとなり、意欲が向上し活動性も向上したことで生活動作能力が維持されやすいと考えられる。森山らは「QOLの向上には、他者との交流を図り、楽しさや喜びを見出せる余暇活動の充実は欠かせない」と述べている<sup>(2)</sup>。グループ2は他者交流を図りながら余暇活動に取り組み、活動性が向上したことで生活動作能力が維持されやすいと考えられる。

本研究を通して加齢による機能低下がある高齢者に対し、生活動作能力の維持・向上を目指すためには自身のやりたいことを見つけ、自発的に取り組むことが重要であると考えた。今後は多くの利用者が楽しみとなる活動を見つけ、自らやりたいと思える活動が行えるようチーム全体で個別ケアを発展させることが課題である。利用者一人ひとりに合わせた楽しみや生きがいを持った生活を送れるよう支援していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 社団法人日本作業療法士協会，平成22年度老人保健健康増進等事業 包括マネジメントを活用した総合サービスモデルのあり方研究事業，2011
- 2) 原田隆・加藤恵子・小田良子・内田初代・大野知子，高齢者の生活習慣に関する調査(2)-余暇活動と生きがい感について-，名古屋文理大学紀要第11号，2011
- 3) 森山千賀子・土井晶子，日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題-QOLの向上に効果的な余暇活動とは-，白梅学園大学・短期大学紀要45，2009



<b>題名</b>	自分らしく人生を謳歌するために		
<b>法人名</b>	株式会社日本ライフデザイン	<b>事業所名</b>	四季平安の杜鷹の台ケアセンター
<b>発表者</b>	紅谷 歩	<b>共同研究者</b>	木村 紗良・橋本 真慈
<b>サービス種別</b>	通所介護		

## I はじめに

多趣味であった時を、楽しく過ごしていた時を思い出して頂きたく、レクリエーションを通じて日常生活動作（Activity of Daily Living:以下ADLとする）、手段的日常生活動作（Instrumental ADL:以下IADLとする）の向上をサポートさせて頂く。

## II 目的

1. 車イスではなく自身の足で歩けるようになる（以下Aとする）。
2. 趣味であったものの一つを思い出す（絵描き）（以下Bとする）。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年12月～2022年7月

### 2. 研究対象

男性 60歳代 要介護5（開始時：車イス使用）

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

ステップ1

A→下肢筋力UPの為、ベッドでの排泄介助からトイレでの排泄介助に切り替える事と、フロア滞在時は車イスではなく椅子で過ごすようにサポートし立ち上がり動作を増やす。※ふら付きが見られなくなった時点でクリア。

B→余暇時間に（色）鉛筆、スケッチブックや塗り絵を提供し興味を持っていただけるように視覚へアプローチ。※自ら道具に触れることが当たり前になった時点でクリア。

ステップ2※ステップ1を継続

A→移動時に歩行器を使用しウォーキング動作をメニューに組み込む。※ふら付きが見られなくなった時点でクリア。

B→手本となる絵や文字を提供。※手本を真似る事で

クリア。

## IV 倫理的配慮

対象者及び家族に本研究の説明を口頭、書面で行い同意を得た。

## V 結果

2年かからず車イスの使用が無くなり、現在では手引き歩行で外周散歩（1週＝約200m）を行えるまでにADLが向上。絵描きについても回復が見られ、現在ではご自身の名前や動物などを自由な発想のもと書ける（描ける）までにIADLが向上。

## VI 考察

ADL、IADLの向上が見られたが、喜怒哀楽を自身の言葉で表現できるまでには至らなかった。ご本人、ご家族の希望により、今回のトレーニングを継続しつつ、更なるステップUPを目指して構音障害改善のためのアプローチを行っていく。

## 【引用・参考文献】

なし



<b>題名</b>	レクで始める生きがい支援 ～くらしを彩るレクへの挑戦～		
<b>法人名</b>	医療法人社団 ひがしの会	<b>事業所名</b>	介護付有料老人ホーム ヘルスケアホーム井口
<b>発表者</b>	國崎見咲	<b>共同研究者</b>	河俣未来・斎藤風花
<b>サービス種別</b>	特定施設入居者生活介護		

## I はじめに

当 A 施設入居者は食事以外の離床時間が短い傾向にある。また、離床動機となる楽しみや生きがいが少ないとの意見がある。そこで、介護レクリエーション（以下、レク）の機会増加が入居者の生きがい形成の一助となり、離床に繋がるのではないかと考えた。

## II 目的

レク参加機会の増加が入居者の生きがい意識に及ぼす影響を明らかにする。

## III 方法

1. 研究期間：2022年5月6日～2022年5月30日

### 2. 研究対象

A 階フロア入居者 12 名（男性 1 名、女性 11 名、平均 89.4 歳、平均要介護度 2.4）。身体・認知機能に重度障害がなく参加可能な者。

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) 1 回 1 時間のレクを週 3 回実施（例：体操、ゲーム）。介入前後の計 2 回 Ikigai-9 および平均離床時間（介入後はレク実施日の離床時間に限り）を評価し、介入による変化を検討。

2) Ikigai-9 の概要<sup>1)</sup>：生きがい意識を測定する 9 項目による自己記入式の質問紙（各 5 点×9 問＝45 点満点）。得点が高い程、生きがい意識が良好であることを示す。

## IV 倫理的配慮

入居者とご家族には、本研究の内容および個人情報保護について説明し、文書にて同意を得た。

## V 結果

1. **Ikigai-9**：総得点および項目 8「自分の可能性を伸ばしたい」において介入後有意に得点が上がった（総得点：24.6→29.2 点、項目 8：2.42→3.5 点）。

2. **離床時間**：介入前 360.4（最短 200）分、介入後

432.5（最短 270）分と、介入後有意に離床時間延長。

## VI 考察

本研究では、当施設入居者より離床動機となる生きがいが少ないとの声があることから、レクへの参加機会増加による生きがい意識への影響を調査した。

Ikigai-9 総得点および項目 8（項目別得点）において、介入前後で有意な点数増加を認めた。生きがい意識とは“...未来に対する積極的・肯定的姿勢、...から構成される意識<sup>1)</sup>”であるとされる。レクに参加し楽しむ経験を重ねたことで未来の自分の生活に対する肯定感情が入居者に生まれ、部分的な生きがい形成へと繋がった可能性がある。

また、介入によりレク実施日の離床時間が延長した。高齢者において“離床時間が少ない人ほど日常生活動作能力は低下<sup>2)</sup>”し、“廃用を予防するには座位時間を 4 時間以上確保する必要がある<sup>3)</sup>”とされる。本研究では介入前の離床時間が 4 時間未満であった者が介入後 4 時間以上離床していることより、レクは廃用予防にも一定の効果を持つと考えられる。

本研究の限界は期間が短く対象者が少数で、レク実施頻度が週 3 回と少なかったことである。そのため、今後は対象を全入居者へ拡大し毎日レクに参加できる環境作りを行い、入居者が生きがいを持ち生活を楽しめるよう長期的に支援していく必要がある。

### 【引用・参考文献】

- 1) 今井忠則ほか：生きがい意識尺度（Ikigai-9）の信頼性と妥当性の検討, 日本公衛誌 59, 2012, p433-439
- 2) 日本理学療法士協会国庫補助事業調査特別班：要介護高齢者における離床時間と日常生活動作能力との関係, 理学療法学 36 第 7 号, 2009, p348-355
- 3) 上田敏：リハビリテーション医学の世界, 三輪書店, 1992



<b>題名</b>	生活リハビリでのお客様の身体機能面、職員の働き方の変化について		
<b>法人名</b>	医療法人社団 藤友五幸会	<b>事業所名</b>	五洋の里 通所リハビリ
<b>発表者</b>	長谷健太	<b>共同研究者</b>	森下奈々絵 DO DAT
<b>サービス種別</b>	通所リハビリテーション		

## I はじめに

昨今、在宅での動作を安全で継続的に行うための、質の高い在宅支援サービスが求められている。

リハビリテーション（以下：リハとする）の介入はプラットフォーム上や平行棒内の運動が主で実際の日常生活動作（Activity of Daily Living:以下ADLとする）との乖離があるのではと思ひ、五洋の里では2020年10月よりリハ職も介護職と同様に送迎、入浴、食事、排泄業務での利用者との関わりを多く持つことにした。そのような関わりを持つことで、利用者のADLの変化、職員の業務効率や仕事への気持ちなどがどのように変化したかを調査した。

## II 目的

1. 新体制の意味と価値を理解する
2. 質の高いサービスを目指す
3. 職員の業務に対する意識確認をする

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年4月1日～2022年3月31日

### 2. 研究対象

1)2020年4月時点で五洋の里を週2回以上利用の利用者

要介護1:4名 要介護2:3名 要介護3:2名  
要介護4:5名 要介護5:2名 計18名

2)期間内で在籍中の職員7名

### 3. 具体的な方法

- 1) Barthel Index
- 2) 介護度
- 3) 利用者アンケート
- 4) 職員アンケート

## IV 倫理的配慮

対象者には本研究の説明を口頭にて行い、調査は無記名、参加は自由で、不参加でも何ら不利益を被らない旨を説明し、同意を頂く。本研究に関し、開示すべき利益相反事項はない。

## V 結果

### 1. Barthel Index (以下BI)

向上7名 低下6名 変化なし5名

### 2. 介護度

改善2名 低下2名 変化なし14名

### 3. 利用者アンケート (10点満点)

動作について8.4点 満足度7.77点

### 4. 職員アンケート (10点)

働きやすさ6.42 業務改善7.71

デイとしての役割9.00

## VI 考察

加齢に伴う身体機能低下がある中で、BI、介護度は維持、向上が全体の約7割の数値を示している。ADLを専門職の目線で指導、定着させるための生活リハが有効なことがわかる。

利用者アンケートの結果より、ADLにリハ職の介入が増え、身体に合った動作指導をすることで、自分で行える動作が増えている。と実感を頂いているため、高い満足度に繋がっていると思われる。

職員アンケートの結果より、職種の垣根を越えてケアや業務を見直すことで、介助方法の再考、業務改善に繋がり、良い結果に結びついている。また、「多職種で利用者を支える」というデイの役割を深く感じる点ができた点は、仕事のやりがいに繋がる部分のため、大きな成果だと思われる。

今回の結果から、五洋の里の新体制のように多職種でお客様の生活の関わりを多く持つことが在宅支援に重要だと感じた。またそのような関わりが、質の高いサービス、働きやすいデイに繋がり、多職種連携をすることの大切さを実感することができた。

## 参考文献

- 1) 桐野匡史 他:施設高齢者におけるBarthelIndexの交差妥当化



<b>題名</b>	機能訓練を通して生き生きとしたラースールライフを！		
<b>法人名</b>	社会福祉法人 湖星会	<b>事業所名</b>	特別養護老人ホームラースール泉
<b>発表者</b>	熊崎由衣	<b>共同研究者</b>	佐々木朋美 上山香織 西田裕佳
<b>サービス種別</b>	介護老人福祉施設		

## I はじめに

入所中の利用者の状態変化に伴い、体力低下と姿勢保持が困難となり、車椅子をスタンダードからリクライニングへ変更した。そのため、足底を地面に接地する機会が減り、麻痺側である左足関節の拘縮が助長した。また、臥床時間が増えたことで活動時間が減り、昼夜問わず傾眠と覚醒を繰り返し生活が不活発になった。拘縮助長の改善と離床時間の拡大への取り組みを報告する。

## II 目的

多職種と連携を図り拘縮を改善し、生活リズムの改善や意欲向上を目指す。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年12月9日～2022年3月31日

### 2. 研究対象：A氏 80歳代 男性

左半身麻痺 胃瘻造設

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 機能訓練指導員が介護職員へポジショニング指導を実施した。
- 2) 介護職員はポジショニングを体位交換時に実施した。
- 3) 看護職員は経管栄養注入の前に足関節の他動運動を実施した。
- 4) 機能訓練指導員は足関節と足部の可動域訓練、下腿三頭筋のマッサージとストレッチを毎日実施した。（現在は3日に1回実施している）
- 5) 機能訓練指導員は3カ月に1回の関節可動域計測にて評価した。

## IV 倫理的配慮

対象者には本研究の説明を口頭で行ない同意を得た。身元引受人には口頭と書面で説明を行ない、同意を得た。

## V 結果

1. 下腿三頭筋の筋緊張亢進は改善した。
2. 足関節の可動域訓練時の疼痛が消失した。
3. 他動運動で足関節背屈-30度から-10度まで可動域が改善した。

A氏は自動運動で底屈内反に動かす程度であったが、背屈方向へ動かすことが出来るようになった。又、介入当初は下腿三頭筋のマッサージや関節可動域訓練時、アライメントを整える際に疼痛を訴えていたが、現在では「気持ちいい」と仰るほど改善した。足底接地を行うことで足底からの体性感覚による意識レベルの向上があり、日中の傾眠が改善した。その為、夜間の覚醒が減少したと考えられる。そのことが日中帯の意欲向上に繋がり、集団体操では上下肢共に全ての自動運動をこなす事が出来るようになった。

## VI 考察

スタンダード車椅子乗車時、椅坐位では当たり前であった足底接地が覚醒に影響を与え、姿勢保持に如何に関与するかを再確認することが出来た。A氏は足関節可動域の改善はあったが、覚醒レベルが上がったことで自ら動くことが出来るようになり、ポジショニング肢位を保持することが難しい傾向にある。その為、筋緊張亢進が左右されやすく、介入頻度、訓練内容は適宜評価し、継続している。

状態の変化を早期に発見し、多職種で連携し対応策を講じることで利用者の苦痛や疼痛を少しでも減らし意欲向上に繋ぐことが出来ることを改めて学んだ。今後も当施設入所の利用者の拘縮予防と拘縮改善し、日常生活の活性化を目標に介入していきたい。

### 【引用・参考文献】

長田悠, 檀辻雅広, 積極的な体性感覚入力により意識レベルの向上がみられた症例, 理学療法学 Supplement, 2012年[, p.Bf0856].



<b>題名</b>	自宅でも体操を継続して行うための工夫		
<b>法人名</b>	株式会社 テイクオフ	<b>事業所名</b>	ケアステージ ARK 山形中野目
<b>発表者</b>	奥山悠衣	<b>共同研究者</b>	青山勤 高橋廣
<b>サービス種別</b>	通所介護		

## I はじめに

2021 年の研究では、体操を継続することで得られる効果（腰部と膝の屈曲の改善）をテーマとした。その体操をお知らせとして利用者に配布するも、継続して体操をしている方がいない。家族から「自宅でもできる体操を教えてください」と耳にする一方で、体操をお知らせとして配布しても活用できていない現状を改善したいと考えた。

## II 目的

より多くの利用者の身体機能の維持・向上を目指し、利用者が継続して体操をするためには、お知らせにどんな工夫をすると効果的なのか明らかにしたい。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022 年 5 月 23 日～2022 年 6 月 21 日

### 2. 研究対象

デイサービス利用者

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) お知らせにデイサービスと自宅で体操に取り組んだ回数を記載する欄を設ける。利用時に持参し、職員が確認する。
- 2) イラストではなく慣れ親しんだ職員の写真を使用して体操の説明をすることで利用者からの反応をうかがう。
- 3) 認知機能や身体状況に関係なく、誰でも理解しやすくどこでもできる体操とする。転倒予防の体操を二種類掲載する。

## IV 倫理的配慮

個人情報が入り込まないよう配慮している。

## V 結果

- 1) 配布数 51 枚に対し、期間中の解約・休止は 4 名おり、47 枚が結果の対象となった。お知らせを活用

して自宅でも体操を実施 31 名（66%）、お知らせの持参はあるがデイサービスでの実施のみ 5 名（11%）、お知らせの紛失 11 名（23%）という結果となった。

自宅でも体操を実施した方の年齢層は 60 歳代 1 名、70 歳代 2 名、80 歳代 11 名、90 歳代 17 名だった。

- 2) お知らせに職員の写真を使用したことで、意欲向上に影響を与えたと思われる方は 1 名だった。
- 3) 体操の回数は一種類につき 3 回～250 回と、一人ひとりの身体の状態によって差があった。家族が付き添って一緒に行っているという声もあった。

## VI 考察

以前はお知らせの配布だけでは体操を継続できなかった。しかしお知らせに体操の回数の記入欄があることで、家族から利用者へ働きかけるきっかけにもなり体操の継続につながったと考えられる。自宅でも体操を実施した方の年齢層を見ると 90 歳代が最も多い。この結果から、高齢になるほど体操の必要性を感じる利用者や家族が多いことがわかる。これからも在宅生活を続けるために体操という習慣を続けられるよう支援していきたい。

デイサービス利用時に職員と一緒に体操をしてみると体操が理解しやすいようだった。利用者の反応を見ても、職員の写真による効果は低いと感じられた。

ある利用者の訪問リハビリの方より、「足を置く位置に印をつけると理解しやすい」と助言を頂いた。このことは今まで関係の薄かった他事業所との連携を図れる可能性を見出した。また、家族から「家族で体操しています」と反応があったことは、体操で利用者と家族の交流の橋渡しができたと考えられる。

### 【引用・参考文献】

- 1) 永島徹, 必察! 認知症ケア 2 実践編, 中央法規出版株式会社, 2016, P176



<b>題名</b>	「起きるー！」動きたい気持ちに寄り添ったケア		
<b>法人名</b>	社会福祉法人 湖星会	<b>事業所名</b>	特別養護老人ホームラースール苗穂
<b>発表者</b>	久住康博	<b>共同研究者</b>	荒木真実 佐久間一誌
<b>サービス種別</b>	介護老人福祉施設		

## I はじめに

A氏は、日中は車椅子を自操して落ち着かず、夜間は不眠で1時間毎に目覚め、排泄誘導を行ってきた。100歳を超えていることもあり、薬を増やすと傾眠され食事も摂れない状態に陥った。また狭い空間で自操を繰り返すことで転落事故も起こしてしまった。そこでA氏が何をしたいのか、どこに行きたいのか職員が考え、本人の動きに合わせた関わりを持ったことにより、徐々に生活リズムが整い、生活の質(Quality of Life: 以下 QOL とする)の向上に繋がった。その結果を報告する。

## II 目的

1. 車椅子自操の動きを止めず、本人の思いを探る。
2. 生活リズムを整え、QOLを向上させたい。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年6月5日～8月31日

### 2. 研究対象

A氏 100歳代 要介護4

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) 職員の気持ちや関わりの変化を見ていく
- 2) 本人の表情・行動の変化を見ていく

## IV 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、ご家族へ研究の趣旨と目的を説明し、同意を得ている。

## V 結果

1. どれくらい動けるのだろうかという職員が疑問を持ち、廊下での自操を試行した。ユニット内で自操していた倍以上の距離を動くことができ満足した笑顔が見られた。それを職員間で共有し、それまでの自操を止める関わりではなく、安全な環境を整え、本人が満足するまで支援する関わりを行っ

た事で、気持ちや対応の仕方に変化がみられた。見守るだけではなく、動きの先にあるもの「本人の気持ち」はどこに向かっているのだろうか、何をしたいのだろうかとその時の気持ちを探り、動きに合わせた関わりを図るようになった。

2. 言葉では聞く事はできなかったが、本人の動きたいという気持ちは徐々に変化し、食事や水分・おやつを摂る等リビングで過ごす際の集中力が増し、食欲が向上し体重も増加していった。又、眠れるようになった事で、穏やかな表情で過ごす事が多くなった。

## VI 考察

転落事故をきっかけに本人が本当はどうしたいのかと職員が考え、本人の動きに合わせた関わりを重ねることで、職員の支援方法に変化が見られた。1つの成功体験が次の支援に繋がり本人のしたいことを1番に考えて行動するなど職員が変化したことでA氏の安心感にも繋がったのではないかと考える。

本人の気持ちを知りたいという思いが、職員間で本人の気持ちを代弁し、支援を繋げ、気持ちに寄り添った関わりを続けたことで、満足度や、車椅子の自操に伴う適度な疲労とストレス解消などが夜間の中途覚醒の減少に繋がったと考える。

100歳を超えていても、自分たちが行動を変えることで生活に楽しみを見出すことができ、最高の笑顔を引き出すことができた。今回の学びを今後も水平展開していきたい。

### 【引用・参考文献】

三島和夫, 眠りのメカニズム, e-ヘルスネット, 厚生委労働省, 2022年6月10日閲覧,  
<https://e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heaet/k-01-002.html>



題名	コロナ禍での地域交流の取り組み		
法人名	株式会社日本ライフデザイン	事業所名	小規模多機能ホーム とこしえ田名
発表者	渡邊 伸	共同研究者	アーバンリビング相模原 滝澤 優
サービス種別	小規模多機能型居宅介護		

## I はじめに

新型コロナウイルスが蔓延する中でも、地域密着型サービス事業所は地域交流を図る必要がある。

地域交流の在り方も様々であり、感染対策を講じながら基準を満たす取り組みが出来ないか検討した。

## II 目的

コロナ禍でも可能な限り安全に地域と繋がる取り組みを検討する。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年4月～2022年3月

### 2. 研究対象

A 施設 利用者・職員

B 施設 入居者・職員

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

地域隣接施設である B 施設と連携を図りながら地域交流・災害対策を実践できるよう「炊き出し訓練」としてイベント化しつつ BCP でも求められる災害・感染に対して取り組みを行った。

取り組み内容は運営推進会議で報告し、意見を頂いた。

地域の方の意見を外部評価で伺い次年度以降の取り組みの参考とした。

## IV 倫理的配慮

研究について説明の上、書面にて同意を得ている。

## V 結果

コロナ禍での開催の為基本的感染対策の実施の他、炊き出しはバイキング方式で飲食は各フロア・施設で召し上がって頂いた。

「炊き出し訓練」として行う事で施設運営上必ず実施すべき研修の実施と今後求められる BCP の訓練、備蓄品の確認が同時にでき、効率的だった。

災害時に福祉施設に求められるものは何か改めて

考えさせられた。

## VI 考察

地域交流や防災訓練、災害・感染対策など地域密着型サービスに求められる内容は年々増えているが、イベント化しつつ計画的に行う事で無理なく、かつ楽しみながら実施できることが分かった。

準備期間や運営推進会議・外部評価の機会を活用して地域に書面になるが発信することが出来た。

コロナ禍で行われる地域防災訓練参加へのお声がけを頂くなど、地域代表の方々との継続的なつながりが維持できており目的は達成出来ている。

地域密着型サービス事業所に求められる地域交流については、様々な取り組みが想定されるが改めて「計画的である事」「持続可能である事」「関わる人が主体的に楽しめる事」をポイントに地域性に合わせた関わり方を「無理なく」模索し続けていく事が大切だと考える。

### 【引用・参考文献】

なし



題名	“停電”“断水”“道路寸断” —これからの自然災害にどう備えてゆくか—		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	複合型介護福祉施設 熱海伊豆海の郷
発表者	秋山光	共同研究者	防災防火委員会
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

2021年7月1日からの大雨を発端とし、A市B地区において土砂災害が発生。A事業所においては施設本体への直接的な被害こそ免れたものの、被害範囲は付近一帯の主要道路を巻き込む程広大であり、停電や断水、道路寸断などその影響は2019年10月に発生した台風19号による断水を大きく上回るものとなった。

上述した台風19号に続いての自然災害であり、これについて取り扱った以前の事例研究発表においても述べた通り、今後更なる被害を受ける可能性も決して否定はできず、また同業他施設においても対策が講じられるよう、被災した者としての務めとして、災害状況を整理した事業継続計画（BCP）の見直し、自施設だけで対応が出来ない場合の法人、グループ支援を報告する。

## II 目的

当時の状況について職員から情報を集め、良かった点・不足していた点などを整理し分析。今後やるべき事、維持発展させてゆく事などを明らかにしてゆく。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年7月～2022年3月

### 2. 研究対象

A事業所

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

当時対応に携わった職員から聞き取りを行うと共に、施設内外の記録を参照し当時の状況や懸念事項を分析。今後対応が必要となる課題を明らかにしてゆく。

2020年に実施した研究発表

「断水への備え」を比較対象とした。

## IV 倫理的配慮

データの集計・分析に際し個人の特がされないよう無記名で実施すると共に、特定へ繋がるものに関しても言い回しを変更するなどの対応をとった。

## V 結果

集計・分析の結果、素早い防災本部設営や各種備蓄が有用であった事、断水への対応力など2019年の台風19号における経験が活かされた場面が多数あった一方で、道路の寸断や発災初期における多方面からの問い合わせ、被災の長期化といったこれまでの想定にない事態に際し、新たに多くの課題や問題点が明らかとなった。

また、届いた支援物資と現場のニーズとのギャップ、情報の共有・伝達の不備不足など、実際に対応した結果として不足が明らかになった事項も多数あった。

## VI 考察

2020年に実施した研究発表「断水への備え」よりもはるかに大きな想定外の災害の場合、それに合わせた事業継続計画（BCP）の策定が必要になる。BCPでは、道路の寸断や被災の長期化など、“災害”の想定をこれまでより更に広げ備えを拡充すると共に、それらを運用・実行する組織と職員個人の防災に関する能力の更なる向上に努める必要があると考えられる。

また、今回のようなケースでは施設単体での対応能力には限界がある事、法人・グループという全国規模の組織である事の利点を考慮した日常の中での連携、訓練の必要がある事を感じる。

### 【引用・参考文献】

内閣府 防災情報ページ

「令和3年7月1日からの大雨による被害状況等について」

[https://www.bousai.go.jp/updates/r3\\_07ooame/index.htm](https://www.bousai.go.jp/updates/r3_07ooame/index.htm)、参照 2022年6月28日



<b>題名</b>	その小さな気づきが介護の質を高める～気づきに着目した事故防止委員会の取り組み～		
<b>法人名</b>	社会福祉法人狭山公樹会	<b>事業所名</b>	特別養護老人ホームひろせの杜
<b>発表者</b>	片平 隼人	<b>共同研究者</b>	有松 蘭
<b>サービス種別</b>	介護老人福祉施設		

## I はじめに

昨年度10月から事故防止委員会の改革に着手した。見えてきた課題は「自分の不足に向き合い続けること」と感じ、取り組んだ経過と結果を報告する。

## II 目的

利用者へのケアに対する行動量を増加させ職員の成長と繋げていく事が目的である。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年11月1日～2022年6月30日

### 2. 研究対象

A 施設職員 80名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 委員会の開催数 2回/月  
(2022年4月より1回/月)
- 2) 各ユニット会議 1回/月
- 3) シンキングタイム (2021年9月～)
- 4) ケアミーティング (2021年9月～)
- 5) 事故発生緊急速報
- 6) 委員長と委員のユニット事故分析  
(2022年4月～)

評価尺度

- 1) インシデント・アクシデント報告件数
- 2) ケアミーティング開催数

## IV 倫理的配慮

本研究にあたり、職員へ口頭にて説明し、同意を得ている。

## V 結果

改めてインシデントの重要性について徹底的に委員会で議論し、その結果を委員は各部署で自らの力のある言葉で発信し委員自身が行動する姿勢へと変化し、インシデントの重要性について理解が難しい職員には「シンキングタイム」と名付けた委員と一緒に個々に考える機会を設け丁寧な関わりを実施した。そ

の関わりの中で「やり方・方法」と「意味・価値」どちらの理解が不十分なのかを明確にし、課題解決に向けた職員個々のアクションプランを立てて実行した。ケアミーティングは目標開催数より5回多い25回となった。事故分析においては委員長と委員でもに行い、部署の現状と課題を共有し薬剤事故等重要事故に関しては事故発生当日に注意喚起の速報を全部署に流し即座に施設全体で共有した。各職員の行動量を増やし、インシデントの報告目標件数を勤務日数に対し1/2以上に設定するなど、具体性と行動性を高めた結果インシデント報告件数は2020年度と2021年度の比較で約3倍(+4191件)に、アクシデント件数は同様の年度比で約1/2(-334件)に減少し、2022年6月には事故件数が施設開設以来最小の月14件となった。

## VI 考察

以前の事故防止委員会は目標を設定し、目標に向かって行こうという月並な取り組みであり事故件数などに変化は見られなかった。今回、まずは事故防止委員がインシデントの重要性を十分に理解し、自らの強い言葉で行動し、他の職員にも行き届いたインシデント理解への関わりを行うなど目に見える形で目標達成への仕組みや道筋を整えたことが劇的な結果をもたらしたと考える。事故防止委員会の取組みを通し、結果として利用者の生活を支えるという使命を施設全体で体現することが出来たことは大きな成果と考える。

### 【引用・参考文献】

1. 安藤広大, 数値化の鬼「仕事ができる人」に共通する、たった1つの思考法, ダイヤモンド社, 2022年
2. 菊池雅洋, 介護の誇り, 日総研出版, 2017年



題名	『食べてもらいたい』をチームと叶える		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	特別養護老人ホーム百恵の郷 栄養部門
発表者	上妻夏実	共同研究者	福田美幸
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

認識機能の低下に伴い、食事に対する認識も徐々に低下がみられる利用者に対し、最期まで食事を楽しんで頂くために、食に携わる者として出来ることを考える契機となった。

## II 目的

食事を食事として認識し、「楽しく召し上がる」という食事本来の感覚を再度感じていただき、摂取量の安定化に繋げる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年3月1日～2022年5月20日

### 2. 研究対象

A様 90歳代 女性 要介護4

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

食事摂取量低下の原因が認識機能の低下によるものと仮説を立て、認識しやすいよう下記取組を行った。

- ・主食を粥から、おにぎりに変更した。
- ・利用者の目の前で調理し、作業も一緒に行った。
- ・食べやすいよう、また持った感触を感じていただけるよう手づかみで食べられるようにコロケ、フライドポテトを提供した。
- ・寿司の日企画では、通常のきざみ食用の散らし寿司ではなく、一口サイズの握り寿司を提供した。
- ・体調崩された後、食事への認識機能がさらに悪化好きなものが食べられるように、また少しでも認識しやすいように食事形態を常食で提供した。

## IV 倫理的配慮

対象者には本研究の説明および写真の使用、また不参加でも不利益を被ることのない旨を説明し同意を得た。

## V 結果

見た目を工夫し、食事だと認識しやすい形で提供することで、食事摂取量の改善が見られた。しかし認識機能が低下すると、人は食事を目の前にしても食べられる物かそうでない物かの判別が困難になる。

## VI 考察

今研究の目的は、利用者とのお別れで達成できないものとなった。五感が正常に働く私たちは、たとえ食材が細かく刻まれていても自然と認識出来るが、利用者の中には、認識機能の低下により、食べ物を認識出来なくなることが判明した。栄養部門としては、食材や調理方法を工夫し、利用者の五感に刺激を与え、美味しそうに感じられる食事を作ることが専門性を発揮できる点だが、利用者の生活歴から嗜好を知ることや、食事に関連する動作や他要因は、他職種との連携が必須となる。認識機能の低下を留めることは難しくとも、残存機能および、限られた日々において我々が何を行うべきか、最期まで食べたい、食べていただきたい、というご本人様、そしてケアに関わる人々の願いを叶える為に熟考し、行動していく事は誰にでも可能である。

今後は、日頃のカンファレンスでの情報を基に、利用者の食形態変更理由が、嚥下機能の低下で誤嚥のリスクが高いからなのか、認識機能の低下により食事を体が受け付けなくなり食事量が低下したためなのかの判断を可能にし、認識機能は低下しているが嚥下機能が残存している場合、他職種連携を意識した個別ケアを実施していきたい。

### 【引用・参考文献】

認知症ねっ. 2022.4.16 閲覧日

<https://info.ninchisho.net/symptom/s160>



題名	視覚情報による食意識向上への取り組み～Instagram活用による大人のための食育活動～		
法人名	社会福祉法人大和会	事業所名	やまと保育園
発表者	山岸 めぐみ	共同研究者	金子 亜美 市川 茉誉 澤永 香名
サービス種別	保育所		

## I はじめに

子どもの健やかな成長には「食」が欠かせない。先行研究<sup>1)</sup>では、親の食行動や食意識は子どもの食教育に反映され、大きな影響を与えていると言える。2020年 COVID-19 感染拡大により、行政による登園自粛対策中における園児の食生活の乱れが明らかとなり、大人へ向けた食育活動が必要であると考えた。

## II 目的

本園の給食を可視化することで、保護者の食意識の向上を図ること目的とし、視覚情報（SNSによる情報発信）の有効性を明らかにすること。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年7月～2022年4月

### 2. 研究対象

研究期間中在籍の園児の保護者 77名（内有効回答数 62）、研究期間中在籍の職員全 38名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

Instagramで、給食アカウント（以下給食インスタとする）を開設し、給食写真やレシピ、作り方動画、食材の知識等、食に関する情報発信を行う

評価尺度

研究対象者にアンケート調査を実施し、視覚情報の有効性を分析する。

## IV 倫理的配慮

研究対象者に回答による不利益を被らないこと、また、収集した回答は研究以外の目的には使用されないこと等を書面にて説明し、同意を得た。

## V 結果

1. 保護者の Instagram 利用数は 62 名中 40 名で、給食インスタを見ている人は 62 名中 30 名だった。

2. 保護者の興味・関心が高い投稿は図 1 の通りで、食事作りの参考に使っているという意見が多い。

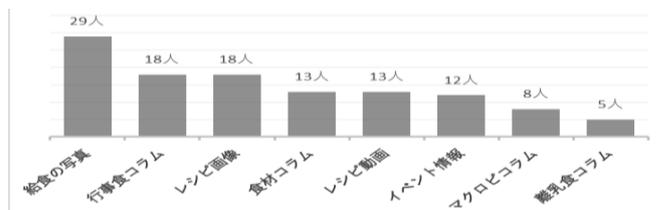


図 1. 保護者の興味・関心が高い投稿（複数回答）

3. 給食インスタについて保護者からは、以下の自由記載が寄せられた。「わかりやすくてためになる」「子どもとのコミュニケーションに繋がる」「食材や行事食等知らないことを学べた」「食の大切さに気付かされた」「毎日気軽に作ることが大切だと思った」

## VI 考察

給食インスタを見ている親からの反響は大きく、食意識の向上に繋がったと言える。同時に、園児と密接に関与する保育士の知識向上や、園の PR(情報の開示)に繋がるという副効果が得られた。また、国内における Instagram 利用率は全年代で増加傾向にあり、特に若年層の利用率が高い<sup>2)</sup>。更に、ある調査<sup>3)</sup>では、子育てに関する情報収集手段として最も多く利用されているのは Instagram であり、情報発信の手段として適宜であると考えられる。今後は園全体で連携をとり、親の更なる食意識向上を目指していく。本研究では、情報を活用・実践してもらうことの検証には至っていない為、今後検証していきたい。

### 【引用・参考文献】

- 1) 山口静枝, 母親の食行動パターンと幼児の食教育との関連, 栄養学雑誌, 54, 1996
- 2) 総務省情報通信政策研究所: 令和 2 年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査, 参照 2022 年 5 月
- 3) 子育てにおける SNS 利用意識調査, (株)ベビーカレンダー, 参照 2022 年 5 月, <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000026.000029931.html>



題名	コストをかけずに嚥下食のエネルギーアップ!?～備蓄品の活用～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	特別養護老人ホームこころの杜
発表者	田村 結衣	共同研究者	増田 恵理
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

A施設で嚥下食として提供している『ソフト食』は、見た目にも常食に近く利用者から好評である。

しかし嚥下機能が低下した方が安全に召し上がれるよう、食材に水分を足して作成する為、提供量は増える半面、エネルギー量は常食と比較し6割程度に留まる。加えて食事とは別に高エネルギー補助食品を提供している状況である。提供量が多いことは利用者の負担になっているのではないかと考え、取り組んだ結果を報告する。

## II 目的

提供量を増やさず、且つコストをかけずにソフト食1食当たりのエネルギー量を上げる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年2月17日～2022年5月31日

### 2. 研究対象

A施設

栄養科職員2名 介護職員5名 看護職員2名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 作成材料の検討、試作
- 2) コスト、味、エネルギー量、提供量の比較
- 3) 他部署を交えての試食、意見交換
- 4) 作成方法の確定

## IV 倫理的配慮

該当職員に対して研究の目的を説明し、個人が特定できる内容は使用しない事として、理解と了承を得た。

## V 結果

1. 鶏胸肉のソフト食の試作を行った。エネルギー量(単位:キロカロリー以下kcal)とタンパク質を強化する粉末(以下粉末)、高エネルギー量の液体(以下液体)、白粥(以下粥)を添加し、試作を行った。

表1 試作品1食当たりの比較

使用材料	エネルギー量	コスト	量
粉末	+50kcal	+14円	増減なし
液体	+200kcal	+200円	
粥	+30kcal	+19円	

2. 粉末の試作品は、粉っぽさが残り、飲み込みにくいという意見が挙がった。

3. 液体の試作品は、固さに影響は無く、味も美味しいと意見が挙がったが、コストが高かった。

4. 粥の試作品は、固さに影響は無く、味や舌触りが良いと意見が挙がった。コストは比較的安かった。

エネルギー量は常食と同等になった。

5. 今まで賞味期限間近で献立に組み込み消費していた災害用備蓄の粥を、毎食のソフト食加工時に使用することで、追加コストをかけずにエネルギー量アップを図ることができると分かった。定期的に活用できる仕組みづくりを開始した。

## VI 考察

今後は他の食材にも展開し、ソフト食の提供量を減らす、或いは高エネルギー補助食品無しでもエネルギー量が充足されるよう取り組んでいきたい。また実際に利用者に提供し、体重推移、嗜好調査等のデータを取り、研究を継続する。

更に災害用備蓄の粥を定期的に使用する仕組みができることで、今までよりも賞味期限が短く、より安価な物に切り替えることが可能であると考えます。

### 【引用・参考文献】

- 1) 藤谷順子、江頭文江\*やわらかい食事を必要とする方に\*ペースト状の食事編 女子栄養大学出版部 発行2016年11月 閲覧日2022年7月18日  
[https://www.meiji.co.jp/meiji-nutrition-info/pdf/science/info/nutrition\\_guidance\\_02.pdf](https://www.meiji.co.jp/meiji-nutrition-info/pdf/science/info/nutrition_guidance_02.pdf)



<b>題名</b>	「食べる」ことで続けられる生活		
<b>法人名</b>	医療法人社団 緑愛会	<b>事業所名</b>	グループホーム ゆらり
<b>発表者</b>	中川智恵子	<b>共同研究者</b>	高橋志帆
<b>サービス種別</b>	認知症対応型共同生活介護		

## I はじめに

2018年10月に入居されたA氏。2021年3月頃から食事が低下し、体重が減少するようになり、体重の減少に伴い体力が低下。臥床時間が長くなり、褥瘡も発生するようになってしまった。受診し様々な検査するも異常みられず、主治医は認知症の進行によるものと診断あり。胃ろう造設の提案を受けるが、家族は「口から食事を摂って欲しい」とグループホームでの継続した生活を希望される。A氏が今後もグループホームでの生活を送れるように行った個別ケアの取り組みと結果を報告する。

## II 目的

グループホームでの生活の継続の為、食事に対する意欲の向上を図り体重の増加と健康の維持に繋げる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年3月1日～2022年6月5日

### 2. 研究対象

A氏 90歳代 男性 要介護度2  
認知症高齢者自立度Ⅲa 障害高齢者自立度A2  
疾病名 混合型認知症 甲状腺機能低下症

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 食事を把握し食事形態と内容の見直し  
誰が見ても分かるように食事をグラムで測定  
繊維の吐き出しがある為刻みやミキサーで提供  
好みの物を多く提供
- 2) 主治医・医療連携と連携を図る  
体重、食事内容の相談・報告
- 3) 家族との関わり  
家族と週に1回のWEB面会  
定期的な手紙、写真のやり取り
- 4) 体重管理

月に1回の体重測定を入浴時の体重測定に変更

## IV 倫理的配慮

倫理的配慮について対象者・家族へ口頭と書面で説明を行い、同意を得た。

## V 結果

1. 毎食食事内容と摂取量を測定しながら見直し、好んで食べられる物をユニット内で共有した。
2. 食量・内容を報告し栄養剤処方される。栄養管理行い、血液検査で栄養状態良好となる。医療連携にて褥瘡の処置も行われ完治している。
3. 家族との定期的なWEB面会や手紙のやり取りで楽しみを持って生活出来るようになっており、意欲の向上にも繋がっている。
4. 2021年11月19日～2022年6月5日現在までで3.3kg増量となる。体力が徐々に戻ってきており、離床時間が長くなった。褥瘡の再発防止にもなっている。

## VI 考察

A氏が「食べたい」と思う食事の提供をチームで取り組んだことで、体力・意欲の向上に繋がり、グループホームでの生活が継続できる結果となった。又、数値で食事を具体的に把握し、正確に主治医・看護師と連携が図れたことで、栄養状態や褥瘡の悪化を防ぐことができた。

利用者の状態を一番近くで把握している職員が調理し、個別に対応出来る事がグループホームの持ち味であると職員が気付けた事例であった。

今後も今回の事例を参考にし、ひとりひとりに寄り添った、統一した個別のケアを実践していきたい。





# 研究発表会

《ROOM 6》

抄録

9月13日(火)

## チームケア学会 研究発表 【 ROOM 6 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10:00 10:15	医療法人社団 水澄み会	介護老人保健施設におけるリハビリテーション部門の働き方 (施設内クラスター発生時)	石橋 拓真	103
2	10:15 10:30	社会福祉法人 苗場福祉会	新型コロナウイルスとの闘い!! ～C-MAT 指導による感染対策の浸透～	藤ノ木 克子	104
3	10:30 10:45	医療法人 北辰会	COVID-19 の特徴的な画像所見と、当院の検査画像の比較・検討	花村 圭祐	105
4	10:45 11:00	株式会社 日本ライフデザイン	アロマで白癬対策 ～さらば水虫!～	山畑 淳子	106
11:00 11:15		休憩(15分)			
5	11:15 11:30	医療法人社団 ひがしの会	A氏の活動意欲を引き出すために ～その方に合ったアクティビティを考える～	友田 崇仁	107
6	11:30 11:45	社会福祉法人 湖成会	「出来ないなら、何とかする!」新たな発想の展開へ	望月 宏子	108
7	11:45 12:00	医療法人社団 平成会	アルクの畑～意欲向上と生活の質向上への取り組み～	佐藤 嵩馬	109
8	12:00 12:15	医療法人社団 緑愛会	デイサービスにおけるレクリエーションのイメージ改革	安孫子 彩	110
12:15 13:15		休憩(1時間)			
9	13:15 13:30	株式会社 ライフアシスト	「新人育成」とは?? ～1年間の軌跡から読み解く～	天野 里香	111
10	13:30 13:45	株式会社 日本ライフデザイン	介護職員の成長を見守りケアを行う研究	滝澤 優	112
11	13:45 14:00	医療法人社団 藤友五幸会	プリセプターとプリセプティ어의思いを紐解く	片渕 紅葉	113
12	14:00 14:15	社会福祉法人 カメリア会	介護士と共に ～機能訓練士の遊びリテーションとユニットケアへの介入～	近藤 稔宏	114
14:15 14:30		休憩(15分)			
13	14:30 14:45	医療法人財団 百葉の会	ブログからはじめる広報活動 ～より多くの人にいきいきプラザを知ってもらうために～	神澤 志織	115
14	14:45 15:00	社会福祉法人 湖成会	お客様と一緒に時間を創り出す ～持ち物チェックアプリの導入～	渡邊 ゆき	116
15	15:00 15:15	社会福祉法人 カメリア会	『つながり』～職員と施設をつなぐ連絡手段 カメリアから君へ～	浅井 司	117
16	15:15 15:30	医療法人社団 湖聖会(宮城)	「俺トイレさ行きたいんだ!」～寝たきりからトイレで排泄が出来るまでの取り組み～	阿部 航大	118

<b>題名</b>	介護老人保健施設におけるリハビリテーション部門の働き方（施設内クラスター発生時）		
<b>法人名</b>	医療法人社団 水澄み会	<b>事業所名</b>	介護老人保健施設 アゼーリみずすみ
<b>発表者</b>	石橋拓真	<b>共同研究者</b>	吉岡晃
<b>サービス種別</b>	介護老人保健施設		

## I はじめに

近年、新型コロナウイルスの感染拡大により、リハビリテーション(以下:リハビリ)の働き方について見直す文献が増えてきている。一般的にリハビリを実施するには徒手療法と呼ばれる利用者に密接する治療などを基本としている。施設内クラスター発生時にはリハビリは感染予防のため中断となるため、発生時のリハビリ職員の働き方について見直す必要があると考えた。

## II 目的

当施設は3月にクラスターが発生、リハビリ業務を中断し、介護の見守り要員にタスクシフトした。24時間隔離エリアの担当になったが働き方には課題があると感じた。本研究では、老健で働くリハビリ職員に求められる働き方と、クラスター発生時のタスクシフトや課題について考察していく。

## III 方法

### 1. 研究対象

当施設で働く、リハビリ、介護、看護の職員

### 2. 具体的方法(評価尺度を含む)

リハビリ職員からは自らの体験をもとに、課題を抽出する。多職種からの意見を踏まえ、タスクシフトできる業務の参考にする。

## IV 倫理的配慮

アンケート調査を行う職員には事前に説明を実施。

## V 結果

リハビリ職員に行ったアンケートからは、自主訓練表を作成して、直接介入しなくてもできるリハビリを提供できればよかったという意見が多く挙がる。リハビリが実施できない状況だからこそではあるが、終日ケアの面で介入したおかげで日常生活動作を把握でき、クラスター終了時のリハビリに活かすことが出来た。多職種からは、隔離エリアの見守りを24時間対応してくれて助かった。人員補充になって助かった。

という意見とそれに対して、最小限のリハビリを考えてほしかった、おむつ交換や電話対応などして欲しかったという意見もある。

## VI 考察

見守り要員としての役割は多職種のアンケート結果からも一定の評価が把握できるが、クラスター発生時のリハビリや、介護業務へのタスクシフトに置き換えると課題があると考えられる。クラスター発生時のリハビリについては辻下<sup>1)</sup>によるとコロナ禍におけるリハビリの課題は濃厚接触業務、3密回避困難、社会活動制限とあり、感染拡大防止のためにもクラスター発生時のリハビリを実施することは困難であると考えられる。

加賀<sup>2)</sup>によると老人保健施設のリハビリは生活期へ働きかけることが重要であり、リハビリが担う役割として直接的な援助だけでなく、生活期に関することに働きかける間接的援助の重要性を述べている。当施設のリハビリも、生活期に関わる機会を増やすことを方針に入れ、タスクシフトの観点では見守り要員だけではなく、介護の一員として役割を果たし、おむつ交換などの業務を行えるなど、介護技術の向上や、夜勤業務への介入も必要なのではないかと考え、今年度の取り組みとして始めている。

生活に関わるリハビリを目指し、クラスター発生時にも活用できる生活リハビリの考案や、ケアの充実化に繋げることを今後の課題とする。

### 【参考文献】

- 1) 辻下守弘:リハビリテーション領域における現状, バイオフィードバック研究, 2021年.48巻.1号
- 2) 加賀順子:介護老人保健施設におけるリハビリテーション職の援助行動に関する質的研究:多職種連携による入所者リハビリにおいて, リハビリテーション連携科学, 20(1) 48-56 2019



題名	新型コロナウイルスとの闘い！！～C-MAT 指導による感染対策の浸透～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	特別養護老人ホームシンフォニー
発表者	藤ノ木 克子	共同研究者	池津 善貴 鈴木 ひかる 吉田 香奈絵
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

2022年2月に発生した新型コロナウイルスによるクラスターでは、大勢の職員へ感染が広がり、終息まで長期間にわたってしまった。群馬県よりクラスター防止対策チーム（以下 C-MAT）が派遣され、クラスター防止対策について指導を受けた。その経験から、マニュアルの変更・職員へ対応の周知徹底、感染予防の意識を高めるための啓蒙を行った。2022年5月にもクラスターが発生したが、早期に終息することができた。感染対策の浸透の違いを明らかにし、なぜ早期に終息することが出来たのかその経過を報告する。

## II 目的

C-MATの指導内容を盛り込んだ効果の高い感染対策が周知でき、感染予防ができる。

## III 方法

1. 研究期間：2022年2月8日～2022年6月30日

2. 研究対象

A 施設看護・介護職員 80名

3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 2022年2月発生時の対応
  - (1) ゾーニングの実施
  - (2) ユニット職員の固定配置
  - (3) 出退勤出入口の区別
- 2) 2022年5月発生時の対応
  - (1) 新たな事業継続計画(Business Continuity Plan)の取組とゾーニング変更実施
  - (2) 感染症備品配置の見える化
- 3) 2022年2月、5月に発生したクラスターの健康観察期間及び罹患者数の推移で効果を評価

## IV 倫理的配慮

本研究の主旨と個人情報の取り扱いについて、関係者全員に口頭で説明し、全員から同意を得た。

## V 結果

1. 2022年2月の発生時、消毒の手技やゾーニングの曖昧さ、一部の職員に勤務の負荷がかかり終息が長期化した。

〈2022年2月のC-MAT来設〉

個人用防護具（personal protective equipment：以下PPEとする）着脱や手指消毒、清掃、ゾーニング方法の指導を受け感染予防マニュアルの変更を行う。

2. 2022年5月には3ユニットに感染者が発生したが、初めて感染対策を行う職員も不安なく行えた。

〈2022年5月のC-MAT来設〉

出勤時の検温、PPE着脱の場所、着脱の方法の再指導を受け、出勤者の出入口を見直した感染予防マニュアルとゾーニングの見える化を行った。

3. 表1 健康観察期間、罹患者数の推移

	2022年2月	2022年5月
感染ユニット数	1ユニット	3ユニット
職員罹患者数	9名	7名
健康観察期間	2/8～3/6 27日間	5/16～5/30 15日間

2022年5月は同時に3ユニット、職員陽性者7名となったが15日間と短い健康観察期間で終息できた。

## VI 考察

今回の試みから、感染対策が職員に浸透してきたと考える。体調変化時の出勤可否について上長報告の頻度が増え、明確な感染予防とゾーニングの見える化から勤務への不安も以前より解消されたと考える。今後明確な情報発信をおこなうこと、感染対策向上に向けた意識付けが継続的な課題と考える。

### 【引用・参考文献】

1) 群馬県 新型コロナ「福祉施設における感染対策」  
<https://www.youtube.com/watch?v=oAh701zs5Xk>

閲覧日：2022年2月14日



題名	COVID-19 の特徴的な画像所見と、当院の検査画像の比較・検討		
法人名	医療法人 北辰会	事業所名	蒲郡厚生館病院
発表者	花村圭祐	共同研究者	高橋翔
サービス種別	病院		

## I はじめに

新型コロナウイルスによる感染症 COVID-19 が世界的に流行し、当院も対応が必要になった。

肺炎が顕著な症状であり、画像診断の有用性が高いことを踏まえ、2020年8月より入院患者受け入れ時の胸部 X 線 CT 検査 (以下、CT 検査) を必須とした。

## II 目的

CT 検査終了後、担当した診療放射線技師が、疑い所見を検出し、医師はじめ各スタッフへ報告・展開し、院内での感染拡大リスクを減らすことを目的とした。

## III 方法

### 1. 研究期間

2020年8月1日～2022年3月31日

### 2. 研究対象

上記期間にて、当院にて胸部及び胸腹部の CT 検査を行った患者計 1011 名

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

上記期間の、当院読影医師による CT 検査の読影レポートを見直し、「COVID-19 を否定できない」旨の記載があった検査につき、公益社団法人日本医学放射線学会 (以下、JRS) が示す指針と比較し、検証した。

## IV 倫理的配慮

氏名など、個人が特定できる情報を利用せず、既に終了している検査結果のみを用いた。

尚、本研究の実施にあたって、医療法人北辰会倫理委員会の審査・承認を得た。

## V 結果

当院の「COVID-19 を否定できない」等の記載のあった検査は 50 件該当し、JRS が示す以下の指針と比較すると典型的な所見 (以下に示す) が 44 件であった。

1. 初期は片側ないし両側性の胸膜直下のすりガラス影、背側または下葉優位 31 件

2. 円形の多巣性のすりガラス影 2 件

3. 進行すると crazy-paving pattern やコンソリデーションなどの割合が増加 7 件

4. 器質化を反映した索状影の混在 4 件

その他、非典型的な所見が 6 件であった。また、当院医師により記載された文言で「肺野濃度上昇に伴い」等、指針と同じ文言ではない検査があった為、画像と比較し指針に当てはめた。尚、「COVID-19 を否定できない」の該当患者全員に対し、遺伝子検査を行った結果、陽性者は居なかった。

## VI 考察

当院では、特に初期の所見に多い「すりガラス影」による COVID-19 の疑いが多かった。肺炎所見を積極的に拾い上げたこと、当院の患者の年齢層が高いことが重なったためだと考えられる。また、疑い患者の中に陽性者が居なかったことから、JRS の指針はあくまで COVID-19 と診断された患者に多かった所見であり、所見がある＝COVID-19 である、は成り立たないことが分かった。

## VII 結論

直近で流行したオミクロン株は画像診断で発見することが難しい為、当院では入院患者に対する CT 検査が必須項目から除外され、本研究の目的を果たす場面が減少した。しかし、CT 検査は日頃から行っており、今回得られたものを念頭に置きながら、注意深く観察を行っていく必要があると考えている。

### 【引用・参考文献】

Web ページ: 公益社団法人日本医学放射線学会「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) に対する胸部 CT 検査の指針 (Ver.1.0), 参照 2022 年 5 月 27 日, [http://www.radiology.jp/member\\_info/news\\_member/20200424\\_01.html](http://www.radiology.jp/member_info/news_member/20200424_01.html)



<b>題名</b>	アロマで白癬対策 ～さらば水虫！～		
<b>法人名</b>	株式会社日本ライフデザイン	<b>事業所名</b>	アーバンリビング稲毛
<b>発表者</b>	山畑 淳子	<b>共同研究者</b>	明尾 一賢 花島 恵美 内田 安曇
<b>サービス種別</b>	特定施設入居者生活介護		

## I はじめに

昨年、利用者の足の白癬が増加傾向にあった。白癬対策を行うため調べていくと、ティートリーというアロマが、抗真菌作用があることを知った。そのため、看護師から指導と協力のもと対策を行った。

## II 目的

白癬感染者の減少が目的。白癬は他の病気にもつながることから、アロマオイル入りのアルコールスプレーを用いて感染予防、感染者の減少を図った。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年2月2日より開始。  
2022年7月23日までの評価とする。

### 2. 研究対象

利用者103名全員が対象。(白癬になっていない方)

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) アロマオイル入りのアルコールスプレーを使用。抗真菌作用を持ちカビを撃退するティートリー、ゼラニウム、レモングラスが水虫対策に効果あり
- 2) 足元はそれぞれ利用者持ちのタオルを使用した。
- 3) 入浴後、水分をしっかりと拭き取った後足にアロマスプレーを噴霧しドライヤーで乾かしながら古い角質を取り除いた。既に白癬に罹患し出血や皮膚に亀裂のある方はアロマスプレーの対象外

## IV 倫理的配慮

プライバシーに配慮し、個人情報の取り扱いに十分注意した上で実施した。

## V 結果

施設各階別白癬の現状。

2F 2月7名 → 7月2名(5名減少で軽い症状)

3F 2月6名 → 7月7名(増加したが軽い症状)

4F 2月5名 → 7月4名(1名減少と軽い症状)  
足元のタオルを共用しない事で感染が減った。  
乾燥することで蒸れがなくなり白癬菌の繁殖しづらい状況を作れた。

## VI 考察

1. アロマセラピーの本を参考に看護師が調合したもので、アルコールで消毒しアロマで気持ちもリラックスして頂こうと考案した。
2. やや症状のある利用者の増減が変わらない階があることから、利用者に対策が不十分なのか考察していく。

### 【引用・参考文献】

渡邊聡子, アロマセラピーのきほん事典, 西東社, 2010年3月1日



<b>題名</b>	A氏の活動意欲を引き出すために～その方に合ったアクティビティを考える～		
<b>法人名</b>	医療法人社団 ひがしの会	<b>事業所名</b>	デイサービスセンターサザンリーフ宇品海岸
<b>発表者</b>	友田崇仁	<b>共同研究者</b>	梶本晴香
<b>サービス種別</b>	通所介護		

## I はじめに

A事業所のデイサービスをご利用されているA氏は利用中、提供する脳トレーニングなどのアクティビティに参加されず、テレビを見たり、新聞を読まれていることが多くみられた。日々関わっていく中で、どうしたら楽しんでアクティビティに取り組んでもらえるのかと考えるようになった。

## II 目的

A氏に合ったアクティビティを提供することにより、活動意欲を引き出し、充実した1日を過ごして頂く。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年1月10日～2022年5月30日

### 2. 研究対象

A氏 80代 男性 要介護2

小脳梗塞 右半身麻痺 コミュニケーション可

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) A氏の家族に生活歴、趣味等の聞き取りを行う。  
(ライフヒストリーカルテを使用)
- 2) A氏用の個別アクティビティ表を作成する。  
個別アクティビティ表を元に提供を行う。  
1か月後、再評価を行う。
- 3) 改定長谷川式簡易知能評価スケール（以下HDS-Rとする）、General Health Questionnaire（精神健康調査票）12（以下GHQ-12とする）を個別アクティビティ表の使用前後の計2回行う。

### 4. 評価尺度

- 1) 個別アクティビティの参加回数
- 2) HDS-R
- 3) GHQ-12

## IV 倫理的配慮

本研究の対象となる利用者とその家族に個人情報

の取り扱いについて、口頭と書面の両方で同意を得た。

## V 結果

個別アクティビティの参加回数は3月16日～4月15日の1か月で20回、4月16日～5月15日の1か月で26回であった。HDS-Rの結果は個別アクティビティ表を作成し使用する前が8点、使用から2か月後に実施した際はA氏の「口が痛い」との訴えがあり途中で中断し、実施不可となった。GHQ-12の結果は使用前がGHQ採点法で1点、2か月後は0点であった。

## VI 考察

A氏に合ったアクティビティを提供するにあたり、デイサービスの利用開始前に取った情報以上にライフヒストリーカルテを使用することによって、より密な情報を得ることができ、今までとは違った個別アクティビティを提供するのに有効であった。そのことが2か月間の間にアクティビティの参加回数が増えた要因の1つではないかと考えられる。認知面に関しては有効性があったかどうかは不明である。精神的な健康度を測定するGHQ-12の結果は大きな変化は見られず、活動が増えたことによるストレスもなく行っていたと考察され、A氏に合ったアクティビティの提供であったのではないかと考える。

デイサービスではA氏のように職員が何を提供してよいか悩むケースがよくある。今回の研究で、一人一人の情報を把握し、その人に合ったサービスを提供することが活動意欲につながり、より充実した利用につながる事が分かった。

### 【引用・参考文献】

- 河野和彦：ぜんぶわかる認知症の事典，成美堂出版，2017.6  
浦上克哉：科学的に正しい認知症予防講義，株式会社翔泳社，2021.3



題名	「出来ないなら、何とかする！」新たな発想の展開へ		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	デイサービスセンター稲瀬
発表者	望月宏子	共同研究者	
サービス種別	通所介護		

## I はじめに

2020年から新型コロナウイルス感染拡大に伴い、今までの「あたりまえ」では利用者に安心してサービスを提供できないと考える日々であった。特に企画においては感染予防の為、演芸ボランティアの来設依頼、地域交流会を中止する状態が続くなか、「出来ないから、やらない」ではなく「出来ないなら、何とかする」気持ちで職員ひとり一人が利用者へ楽しく記憶に残る企画の見直しと改善を図った結果を報告する。

## II 目的

利用者が安心して、楽しみながら企画に参加し、職員ひとり一人の新たな発想でケアの質の向上を継続していく。

## III 方法

1. 研究期間：2020年4月～2022年6月30日

2. 研究対象：A施設の利用者

3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 企画方法の見直し、改善方法を検討。特に季節行事企画の向上を図る。
- 2) 企画立案を非常勤職員も参加し、新たな発想を展開、チームケアの向上を図る。
- 3) 2020年4月以前から利用中の利用者にコロナ前後の企画に関する聞き取りアンケートの実施。

## IV 倫理的配慮

対象者には本研究の説明を口頭と書面で行い、同意を得た方を調査対象とした。調査は無記名であり、調査への参加は自由で、不参加でも何ら不利益を被ることはない旨を説明した。

## V 結果

- 1) 大きな企画は職員の出し物をメインイベントに変更。密を避ける為、大きな企画を数回に分け実施し、利用者が公平に企画に参加できるようにした。個別企画の内容を見直し、以前から行っていた手芸、園芸、書道教室を向上させた。

- 2) 車中感染予防のため、外出企画を中止。好評だった10月企画の案山子見物ドライブ企画に代わる企画を立案し、利用者参加型の「案山子人前結婚式」を開催した。
- 3) 非常勤職員による企画立案により、チーム全体で企画に取り組む体制が構築された。また新たな発想により、企画の内容が例年と違うものとなり顧客満足度が図れ、顧客満足度アンケートにおいて、「現在のケア・サービス内容に満足していますか？」で満足している回答2020年度100%及び2021年度97%と2019年と比較して向上が図れた。

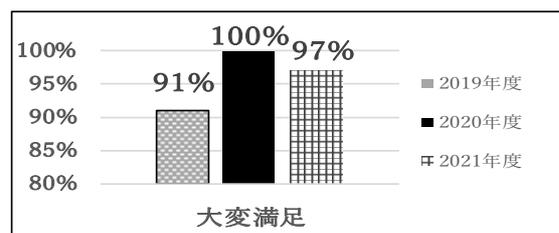


図1 顧客満足アンケート「現在のケア・サービス内容に満足していますか？」の大変満足度結果

- 4) アンケートでは、利用者が以前にも増して企画の満足度が向上し、企画に対する職員への頑張りを見て親密さが増したことが分かった。

## VI 考察

新型コロナウイルス感染予防が叫ばれる中、コロナと共存しながら利用者の楽しみを奪わず、笑顔を絶やさないケアの継続をする中で、改めてデイサービスの存在意義とは何か考えるきっかけとなった。利用者、ご家族、地域の方々に「安心・楽しみのある居場所」を提供できるためには何をすべきか職員ひとり一人が考え、気づき行動に移すことの大切だと感じた。新型コロナウイルス感染拡大により地域交流がうすれ始めている中、その絆を絶やさない為に新たな方法を確立することが今後の課題となっている。



題名	アルクの畑～意欲向上と生活の質向上への取り組み～		
法人名	医療法人社団 平成会	事業所名	デイサービスセンターアルク
発表者	佐藤嵩馬	共同研究者	加藤一也
サービス種別	通所介護		

## I はじめに

施設建物西側に裏庭スペースがあるのだが、有効活用ができていなかった。裏庭の有効活用を目的に2022年3月に畑エリアの作成、畑までの道のりの整地を行った。畑作業をすることで、認知機能面の低下予防と生きがい・やりがい(意欲向上)を図れると考え、利用者に畑作業へ参加して頂いている。

## II 目的

豊田らによると「高齢者に対する園芸療法では、心身機能の廃用防止のほか、認知機能低下に伴って日常生活においてできることや喜びを感じる事が少なくなっている対象者の有用感、満足感を高め、生活の質の維持・向上をはかる<sup>1)</sup>」とあり、畑作業を行うことで、施設の意欲向上、生活の質向上を図ることを目的とする。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年3月～2022年7月迄

### 2. 研究対象

畑作業を希望された利用者3名

(男性1名、女性2名)

年齢80歳代 平均介護度 1.3

### 3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) 今回の企画を開始する前に企画内容を全職員に周知する。
- 2) 利用者へ口頭で内容のお知らせし、畑作業参加希望者を募る。
- 3) 実際に何の作物を育てたいか聞き取りを行う。
- 4) 意欲・認知機能の評価は淡路式 園芸療法評価表(Awaji horticultural therapy assessment 以下 AHTAS)を使用する。

## IV 倫理的配慮

対象者には本研究の説明およびプライバシー保護

の観点も口頭にて説明し、同意を頂いている。

## V 結果

AHTASの評価項目は、「1.意欲 2.時間の見当識 3.注意の配分 4.短期記憶 5.長期記憶 6.思考 7.高次認知機能 8.課題の遂行 9.コミュニケーション 10.満足」である。評価項目の中で、特に1.意欲 3.注意の配分の項目に変化がみられている。

表1 AHTASの推移

A氏(男性)実施前：1:1点、5:2点、その他項目3点
A氏(男性)実施後：全ての項目3点
B氏(女性)実施前：全ての項目3点
B氏(女性)実施後：全ての項目3点
C氏(女性)実施前：1.2.3.4.6がそれぞれ1点、5.7.8がそれぞれ2点、9.10がそれぞれ3点
C氏(女性)実施後：2:1点、3.4.5がそれぞれ2点、その他項目3点

## VI 考察

結果に示したように、A氏C氏は「1.意欲」の向上が大きくみられた。又、B氏については実施前後で全ての項目で満点の結果を維持することができている。C氏に関しては「2.時間の見当識」以外の項目で向上がみられた。3名共通して、実際に畑作業をしている姿を見ても、普段より積極的に取り組む姿勢や、畑作業に対する熱意を見ることができた。以上の事から、畑作業を通じて、認知機能面の低下予防と生きがい・やりがい(意欲向上)を図る事ができたと考えられる。

### 【引用・参考文献】

- 1) 豊田正博：園芸療法評価の試み 淡路式園芸療法評価表(AHTAS)と既存の評価尺度による検証, p.29, 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要, 2009  
<https://doi.org/10.14989/84794>



題名	デイサービスにおけるレクリエーションのイメージ改革		
法人名	医療法人社団 緑愛会	事業所名	デイサービスセンター 友結
発表者	安孫子彩	共同研究者	皆本恵里 青木裕子 安達なつみ
サービス種別	通所介護		

## I はじめに

レクリエーションに消極的な男性の利用者に着目し、理由の解明のため聞き取り調査を実施した。その結果、運動目的の方が多く、特にレクリエーション活動＝遊びという感覚があり、レクリエーションに興味がないことが分かった。そこで私達は利用者へレクリエーションへ興味を持ち、参加することによって得られる運動効果を理解して頂くために行った取り組みを以下に報告する。

## II 目的

レクリエーションに興味を持って参加して頂く。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年4月16日～2022年6月31日

### 2. 研究対象

A氏 80歳代男性 B氏 60歳代男性  
C氏 80歳代男性 D氏 90歳代男性

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- レクリエーションに期待される運動効果説明を行い理解して参加して頂く。
- レクリエーション内容に沿った準備運動を作業療法士が10分程度毎回実施し、意識を高める。
- レクリエーション実施後に満足度の評価を実施する。

## IV 倫理的配慮

研究の主旨と写真の使用理由、本人並びに家族から書面と口頭で同意を頂く。

## V 結果

表1 満足度の評価表結果

ポッチャ	①表情 (レク前)	②理解度	③意識度	④満足・ 達成度	⑤表情 (レク後)
A様	4	5	4	100%	5
B様	4	5	5	100%	5
C様	4	4	5	100%	4
D様	中止	中止	中止	中止	中止

利用者より「準備運動とレクリエーションに繋がりがあって楽しい」と評価を得る事ができ、レクリエーション＝遊びというイメージを変える事ができた。また利用者同士共通の目的を持って参加する事で、達成感や満足感を感じて頂いた。加えてレクリエーションの時間が他者交流のきっかけとなり、参加者全体の良い雰囲気づくりにも繋がった事でより楽しさを感じられていた。

## VI 考察

「レクリエーション活動の特徴を理解することは活動によって得られる楽しさの所在や価値について知る事でもある」<sup>1)</sup>この事から、運動効果の説明や意識して身体を動かすための準備運動をレクリエーションに関連付けて行う事によって、利用者も興味を持ち参加することが出来たと考えられる。今後の課題として、レクリエーションの内容への改善点を提案して頂けるまで関心を持って下さるようになった利用者の身体状況に合わせた工夫をしていく必要がある。提供する側の職員もレクリエーションの効果の理解を深め、運動効果の説明の継続、更なる質の改善を行っていく必要がある。

### 【引用・参考文献】

- 日本レクリエーション協会:楽しさの追求を支えるための介入技術 P,52,53,100  
閲覧日 2022年6月10日
- 一村小百合:社会福祉におけるレクリエーション援助・活動の意義について  
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1520572357229010048>  
閲覧日 2022年6月15日
- 三瓶あづさ著:高齢者が元気になるレクリエーション P,10  
閲覧日 2022年5月18日



題名	「新人育成」とは?? ～1年間の軌跡から読み解く～		
法人名	株式会社 ライフアシスト	事業所名	ライフ瀬戸
発表者	天野里香	共同研究者	
サービス種別	放課後等デイサービス		

## I はじめに

管理者となって2年目に自施設に新卒者が配属となり、初めての「新人育成」に取り組むこととなった。自分なりに情報を集めていく中で「傾聴」について書かれている文献に共感し、「傾聴」の姿勢を大事にした「新人育成」に取り組もうと考えた。新人指導員の1年を通じた気持ちの変動を振り返り、取り組んだ過程について報告する。

## II 目的

施設で取り組んだ「新人育成」について、初年度(2021年度)を振り返り、今後の「新人育成」に繋げる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年4月1日～2022年3月31日

### 2. 研究対象

2021年度新卒で入職した指導員 A 氏 20代男性  
穏やかで、頼まれたら断れない性格。  
学生時代、保育実習の指導案を書くことに苦手意識を感じ、放課後等デイサービスならば書く作業よりもこどもたちとの関わりが多そうだと思ったことが志望動機。

### 3. 具体的方法(評価尺度を含む)

- 1) 新人研修等の報告書の読み解き
- 2) 管理者日報の読み解き
- 3) A氏自身による気持ちの変動を10段階で  
グラフ化

## IV 倫理的配慮

対象者へは本研究の主旨、目的等を説明の上、同意を得ている。

## V 結果

A氏は5月、7月、翌年1月に自身のスキルやこど

もたちとの関係性について悩み、モチベーションが落ち込んだ。周囲のサポートと本人による改善の取り組みを経て、仕事は「大変だけど、楽しい。」と、「やりがい」を持つことが出来るようになった。新人育成においては「傾聴」「同期との支え合い」「先輩のフォロー」「共に解決策を考えること」が有効であった。

## VI 考察

A氏が1年を通して様々な出来事に直面し、悩んだ際に離職を考えるのではなく、乗り越えられた背景・要因を分析した。まず、A氏が心を許して話しができる「同期 B 氏」の存在があったこと。先輩指導員たちが業務面で A 氏に言葉をかけ、必要であればフォローに入ってくれたこと。管理者も「傾聴」の姿勢を大事にできたこと。また、「こうしたらどうだろう?」と、解決策を提案し一緒に考えることができたこと。なによりも、A氏自身が、失敗をしても前向きな努力をし続けることができたからだと考えられる。日々、直面する出来事に対して、管理者や仲間と共に考え、悩み、乗り越えるという経験を積み重ねることで、仕事に対する「やりがい」を自分なりに見つけられたことも、次年度を迎えることができた要因だと考えられる。

今後、A氏は自身が積み重ねてきた経験を次の新人へ伝えていく「先輩」の立場となる。新人のよき相談相手としての活躍を期待する。

### 【参考文献】

- 1) 傾聴とは実践心理学講座  
<https://jmental.org/shinri/2017/10/28/kei12/>



<b>題名</b>	介護職員の成長を見守りケアを行う研究		
<b>法人名</b>	株式会社日本ライフデザイン	<b>事業所名</b>	アーバンリビング相模原
<b>発表者</b>	滝澤 優	<b>共同研究者</b>	小金井 桃子 尾勝 太一
<b>サービス種別</b>	特定施設入所者生活介護		

## I はじめに

去年の新入職員としてA施設勤務となったA氏。入職前は専門卒のため自信を持って働けると思っていたが学んだことを生かせないまま同期が先に独り立ちをしてしまい精神的余裕が無くなってしまった。

## II 目的

施設としてフルタイムで勤務できる職員を増やしシフト作成時の負担を軽減させ、時間がかかっても独り立ちできる自信を対象職員に持たせることで離職防止を図る。対象職員はメンタルが落ち込んでいるところに自信を持ってできる業務を増やすことで気持ちにゆとりを持たせる。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年4月21日～2022年5月20日

### 2. 研究対象

2年目介護職員A氏  
プリセプター（指導係）の介護職員2名

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 夜勤の付き添いは可能な限り同一職員で行う。
- 2) 夜勤1回ごとにヒヤリはつとを20枚記入する
- 3) ヒヤリはつと内容を集計し職員の心理状態、課題への取り組み具合を記録していく。
- 4) 必要に応じて面談を実施。

## IV 倫理的配慮

対象職員に事前に承認を頂いている。

## V 結果

夜勤は計画の5回では終わらず計7回実施後独り立ちとなった。ヒヤリはつとの集計内容は伏せて実施した結果1～4回までは利用者と本人のヒヤリはつとが拮抗していたが、5～7回には自分<利用者に着眼点を置きリスク把握をする事で夜勤を無事独り立ちする

ことができた。

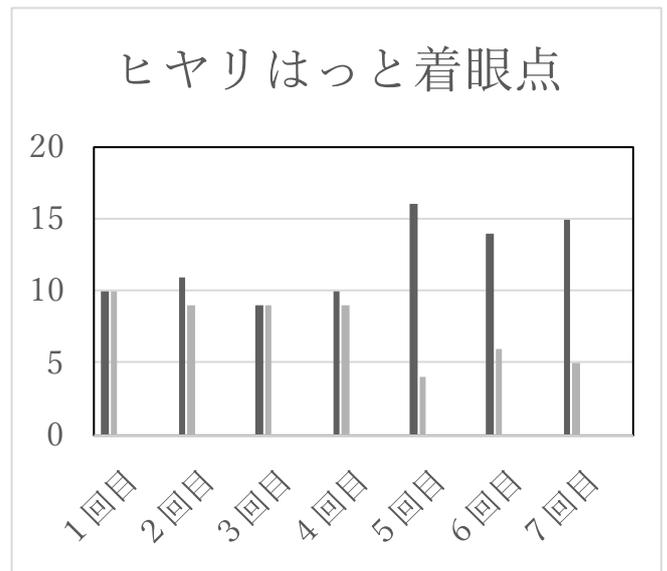


図1 ヒヤリはつと着眼点

## VI 考察

令和時代の若者は「成長欲求」を強く持っているが成長して何がしたいというところまでは、まだ見えていない特徴がある。将来への不安から多くの知識やスキルを身につけたい傾向にある。今回の研究では入職前に初任者研修を取得していたが、未経験の同期に抜かされてしまった結果、本人のプライドが傷つき大きく落ち込み成長が滞ってしまった。面談内容に関してはできたことを大きく褒めるよりも、プチ褒め、プチ感謝をシャワーのように浴びせる方が若い世代には効き目があり。コミュニケーションの質を求めることも大事だが今のニーズに合わせるのであれば「質より量」を取った方が良いのである。

### 【引用・参考文献】

平賀充記, なぜ若者は突然辞めるのか, アスコム, 2019年5月25日



題名	プリセプターとプリセプティ어의思いを紐解く		
法人名	医療法人社団 藤友五幸会	事業所名	五洋の里
発表者	片淵紅葉	共同研究者	鈴木美佐子
サービス種別	介護老人保健施設		

## I はじめに

将来自分がプリセプターになった時に、新人職員が孤立しないで成長をしていくためにプリセプターと新人職員の相互の考えを知ることにより、さらにより信頼関係を築けるのではないかと考えた。

## II 目的

プリセプターとプリセプティ어가關係を築く中で考えの一致や相違点から業務の改善を提案していく。

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年8月5日～2021年12月15日

### 2. 研究対象

2021年4月1日に入職した入所職員5名、2021年の入所新人職員の教育にあたる職員5名

### 3. 具体的方法

- 1) 同意を得た職員に対して質問紙調査の実施を行う。
- 2) その中からインタビュー調査への協力をお願いし同意を得た職員に対してインタビュー調査を行い、対象者の同意を得た人のみ音声による録音を行う。
- 3) 質問紙調査・インタビュー調査での回答をデータに入力し、視覚化する。
- 4) 視覚化したデータをプリセプターとプリセプティ어にまとめ、検証していく。
- 5) 評価尺度  
一致項目・相違項目の要因の分析。

## IV 倫理的配慮

本研究では研究対象者に文書にて同意を得たうえで、個人情報については研究以外での使用は行わず、得た情報については厳重な管理を行い、研究後は削除・処分とする。

## V 結果

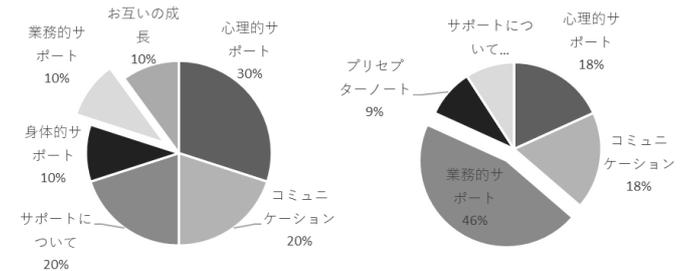


図1 プリセプターの回答

図2 プリセプティ어의回答

自由回答による質問紙調査にて各回答を類似している点をまとめてみた結果、共通部分としては「相談によるサポート」や「コミュニケーション」に関連する回答が多くみられたが、プリセプティ어は「業務的サポート」や「シフトが被らない」などプリセプターよりも業務サポートについて回答が多くみられた。

## VI 考察

プリセプティ어가「業務的サポート」を回答する結果について、インタビュー調査でプリセプターに業務について教えてもらうことで、安心感を覚える一方で実際はあまりプリセプターとプリセプティ어의勤務が合わないことも多くあったと考えられる。村岡

(2011)は「新人にとって決まった指導者が付くことによって業務内容に関する不安感が軽減する」<sup>(1)</sup>と述べており、プリセプター教育を行う際はシフトを合わせて同じ業務を行うことでプリセプターは仕事の達成度を知ることができ、プリセプティ어도業務についての相談がしやすいと考えられる。

## 引用文献

- 1) 村岡信慎, 高齢者介護施設における新人教育体系について: プリセプター制度からの一考察, 上智社会福祉専門学校紀要, 6, 2011-03-01, p43～p52.



## 2022 年度チームケア学会 研究発表抄録

<b>題名</b>	介護士と共に～機能訓練士の遊びリテーションとユニットケアへの介入～		
<b>法人名</b>	社会福祉法人 カメリア会	<b>事業所名</b>	カメリア藤沢 SST
<b>発表者</b>	近藤 稔宏	<b>共同研究者</b>	森井 大貴・小室 恵美・増渕 匠
<b>サービス種別</b>	介護老人福祉施設		

### I はじめに

本研究は ADL レベル評価と介護ケアの質向上の両側面に対して取り組みを行った内容である。A 施設は機能訓練士の配置が理学療法士 2 名、作業療法士 1 名、言語聴覚士 1 名と恵まれた人員配置である。一方で、介護士は経験年数が短い職員や新人職員が多く介護技術が未熟な職員が多い。またコロナ禍の影響でイベント企画の頻度が減少した。そのため、介護ケアの質向上とイベントの重要性を学ぶ事を機能訓練士の専門的な知識・技術を取り入れた活動を行ったため、ここに報告とする。

### II 目的

1. 介護士の人員的な負担軽減、時間的な負担軽減
2. ADL 能力評価と生活リハビリの介入
3. 利用者に合わせた介護技術指導

### III 方法

#### 1. 研究期間

2022 年 3 月～2022 年 7 月

#### 2. 研究対象

- A 施設介護職員の計 29 名にアンケートを実施。
- 1) 新入職員・新人職員（入職 2 年以内）15 名
  - 2) 入職 2 年目以降の職員 6 名
  - 3) ユニットリーダー以上の職員 8 名

#### 3. 具体的方法

- 1) リハビリ職員が毎日 11 時～12 時の 1 時間ユニット介入。排泄介助、起床介助の指導を実施。
- 2) 遊びリテーションを実施。月替わりレクリエーション、演歌サイズ、音楽療法レクリエーションの 3 パターンを実施。
- 3) 毎月 1 週間の入浴ケアに介入。更衣動作、入浴ケアを介護士と実施。
- 4) 対象職員にアンケートとヒヤリングを実施する。

### IV 倫理的配慮

対象職員に研究発表について説明と同意を得た。

### V 結果

入職 1～2 年目の職員はユニットケアや入浴ケアに関して「勉強になる」「継続してほしい」の返答が多かった。遊びリテーションに関しては、「一緒に参加でき楽しめた」の返答が多かった。入職 3 年目以上やユニットリーダー以上の役職者からは、「指導される機会がなかった」と介入できていない結果が出た。遊びリテーションに関しては、「移動や準備を手伝うため、結果忙しい」とマイナス的な返答があった。

### VI 考察

目的 1. に関しては、介護士の現場業務に合わせた介入を行い、実技指導する機会が増えた。その場で相談できる事や一緒にケアを行う事で身体面さらに精神面の負担軽減に繋がった。目的 2. に関しては、起床動作や排泄介助、更衣介助などの生活動作を直接評価できる機会が増加した。遊びリテーションでは意欲的に参加する姿、手指の巧緻動作、発声機会の増加などリハビリ効果が見込めた。さらに、この ADL 評価は LIFE（科学的介護情報システム）データ項目の情報として活用できている。目的 3. に関しては、ユニットケアに直接介入したことで、集団研修に比べ一人ひとりの利用者との介護士に合った指導が行えた。集団研修は「〇〇様の場合はどうのようにすれば良いか？」など利用者ごとの身体機能面に反映できずにいたが、より効果的に指導が行えた。また介護ケア方法を見直す機会にもなった。この活動でリハビリ職員同士 ADL 評価や介護職員への指導方法を共通認識できる取り組みとなった。今後も介護ケアの質向上のために、介護全職員への指導を目指し、この活動を継続的に取り組んでいく。

【参考文献・引用文献】 なし



題名	ブログからはじめる広報活動～より多くの人にいきいきプラザを知ってもらうために～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	港区立虎ノ門いきいきプラザ
発表者	神澤志織 丸島花恋	共同研究者	
サービス種別	いきいきプラザ		

## I はじめに

当事業所は主に高齢者の健康づくりをサポートする区有施設である。課題として常連の固定化・高齢化が挙げられる。新規利用者の来館を促し活気のある施設運営を行うため、効果的な広報活動が必要となる。2017年よりブログを運営しているが、記事毎の閲覧数の追跡・分析は後回しで、投稿することに満足してしまっていた。今回はブログのユーザー解析や好まれる記事の傾向を分析し、より効果的なブログ運営を実践する。

## II 目的

効果的なブログ運用のための試行とその効果測定

## III 方法

1. 研究期間 2022年2月～2022年4月
2. 研究対象 インターネット利用者・施設利用者
3. 具体的方法 (評価尺度を含む)

- 1) GoogleAnalyticsで分析したところ、健康に関するコラム記事が検索からアクセスされていることが分かり、検索で見つかりやすい健康コラム記事を作成した。記事の制作にはラッコキーワード<sup>1)</sup>というキーワード検索ツールを、最終的な分析にGoogleTrends<sup>(2)</sup>(以下GT)というトレンド検索ツールを使用した。
- 2) ブログ記事のニーズ調査として館内利用者を対象にアンケートを実施し、記事を作成した。

## IV 倫理的配慮

アンケートは無記名とし、不参加者による不利益が生じないことを説明した上で自由参加とした。

## V 結果

1. 検索からの新規セッション数を獲得できなかった。
2. アンケート結果をもとに記事を投稿・告知したところ館内利用者からの新規セッションを獲得した。しかし外部からの新規セッションは獲得できな

かった。(表1)

【表1：記事毎の新規セッション数と流入割合】

※セッション数は1か月の最大値で統一		新規セッション数	新規の主な流入経路とその割合 (%)	
過去に伸びた記事	記事I	225	検索	99%
	記事II	69	検索	100%
1)で試行した記事	記事I	3	母数が少ないので割愛	
	記事II	1	母数が少ないので割愛	
2)で試行した記事	記事I	32	QRコード	78%
	記事II	9	QRコード	100%

## VI 考察

1) の記事が新規セッション数を稼げなかった要因として、GTで調べたところ、検索数ピーク後に記事を投稿していた点、トレンドピークが季節限定的だった点からインターネットの利用者が想定より検索しなかったと推測される。また2) はアンケートの声をそのまま記事に反映し、QRコードを掲示したことで、館内から気軽にアクセスしやすくなり、新規セッションの獲得に繋がったと考察する。

今後は流行のワードやテーマは風化しないうちに早めに投稿することを心掛ける。またGTや健康志向の高い施設の利用者からの情報収集を基に、トレンドを意識したテーマを設定し、ブログから新規利用者の獲得を目指していく。

## VII 参考文献

- 1) ラッコキーワード | 無料のキーワード分析ツール (サジェスト・共起語・月間検索数など), ラッコキーワード, ラッコ株式会社, 2022.7.12, <https://related-keywords.com/>
- 2) Googleトレンド, Googleトレンド, グーグル合同会社, 2022.7.12, <https://trends.google.co.jp/trends/?geo=JP>



題名	お客様と一緒に時間を創り出す～持ち物チェックアプリの導入～		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	特別養護老人ホーム 月のあかり
発表者	渡邊ゆき	共同研究者	加藤雄太
サービス種別	短期入所生活介護		

## I はじめに

A事業所短期入所部門において、利用者の入退所時の持ち物確認を「荷物忘れを無くしたい」という思いから、書式と写真を使用した確認を行っている。

しかし、重複した確認となっており、入退所時の持ち物確認に多くの時間をかけている現状がある。

それに伴い、利用者と職員が関われる時間の確保が難しく「利用者にもっとA事業所ショートステイを楽しんで頂きたい」と職員から声が上がっている。

持ち物チェックアプリの導入により、業務改善に繋がる事例について報告する。

## II 目的

1. 入退所確認についての効率化を行い、利用者との職員の関われる時間の確保を行う。
2. 業務改善を行う事で職員の「やりたい」という気持ちを実現することができるチームを作る。
3. 入退所確認に際しての職員の焦りの軽減、荷物返却忘れによるアクシデント数の減少を目指す。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年6月1日～2022年7月31日

### 2. 研究対象

A事業所短期入所生活介護ご利用中の利用者

A事業所短期入所生活介護職員

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

- 1) 書式と写真を使用しての荷物チェックについての職員が感じる課題の聞き取り。
- 2) アプリ導入の目的の周知、意見交換
- 3) アプリ導入に際してのマニュアルの作成
- 4) 導入後の比較
  - (1) 職員への意見の聞き取り
  - (2) 業務時間の変化
  - (3) 荷物返却忘れによるアクシデント数

## IV 倫理的配慮

本研修のデータは個人の特定ができないように配慮する。

## V 結果

1. 荷物チェックアプリを導入した事で職員より、「導入に際しては不安があったが、使用してみると使いやすくて良かった」との声が聞かれた。
2. アプリによる荷物チェックに一本化した事で、衣類の識別が明確になり、5月9件あった荷物の返却忘れによるアクシデントが6月では1件、7月では0件と減少した。
3. 入退所チェックの効率化を行った事で、業務時間にも変化がみられた。日々の利用者との会話の機会の増加や、外廊下への散歩や壁面作成などのレクリエーションを利用者と一緒に取り組む職員の姿が増加した。

## VI 考察

荷物チェックアプリ導入前には、同一の衣類に書式と写真での確認を行い多くの時間がかかっており、「利用者との時間を作りたい」「荷物返却忘れを防ぎたい」という葛藤の中、入退所チェックを行っていた。しかし、荷物チェックアプリを導入してからは、正確な荷物チェックを行いながら、効率化を行う事ができた事で、職員が精神的にゆとりを持つことに繋がった。ゆとりを持って荷物チェックのできる環境作りが、荷物返却忘れによるアクシデント数の減少に繋がったと考えられる。利用者と職員が関わる事ができる時間を意図的に増加させることで「やりたい」という気持ちを実現することが出来る環境を作る事ができ、利用者と職員の満足度の向上に繋がったと考えられる。

### 【引用・参考文献】

株式会社 介護サプリ「持ち物チェックアプリ」  
2022.6.1 閲覧



題名	『つながり』～職員と施設をつなぐ連絡手段 カメリアから君へ～		
法人名	社会福祉法人 カメリア会	事業所名	特別養護老人ホーム カメリア桜ヶ丘
発表者	浅井 司	共同研究者	全職員
サービス種別	介護老人福祉施設		

## I はじめに

A施設では、昨年コロナウィルス感染が発生した際に紙ベースで全職員へ電話連絡を行い、手間と時間が非常にかかった。連絡がよりスムーズに行える手段はないか法人内で相談したところ、職員向けの連絡アプリが導入され、職員間での情報伝達手段の確立を図った。施設内での取り組みをここに報告する。

## II 目的

職員間での緊急時の連絡手段の確立

## III 方法

### 1. 研究期間

2021年11月～2022年6月

### 2. 研究対象

A施設の全職員

### 3. 具体的方法（評価尺度を含む）

1) アプリの登録率の確認

2) 既読率、返信率の比較

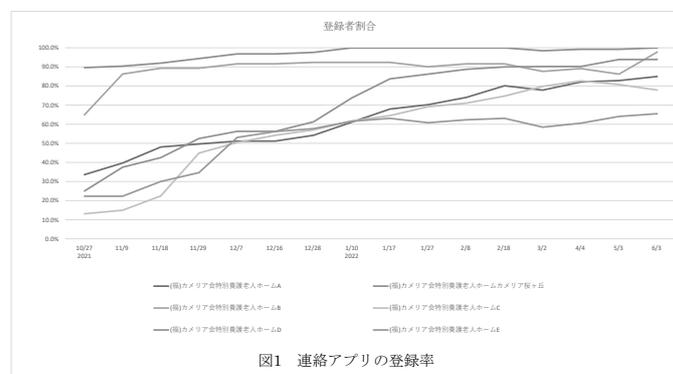
アプリの登録率、既読率、返信率の比較

## IV 倫理的配慮

対象者が特定されないようプライバシーに配慮、個人情報取り扱いに十分に注意した上で実施する。

## V 結果

登録率は初回の集計では89.6%となっており、他施設と比較しても最も高い数値だった。返信率は100%となっており、既読した職員全員から返信があった。既読率については、1回目は52%で2回目は内容に緊急の連絡と加えて行ったところ、77%と既読率が上がった。



A施設は初回集計時より他施設と比較すると高い数値で推移している（図1）

## VI 考察

登録率が高いことについて、施設長自ら何回も声掛けして下さったことや、登録方法が分からない職員に対し一人一人に丁寧に手順を教えるなど働きかけを行ったことが影響しているのではないかとと思われる。

返信率100%であったが、簡単な内容であったこともあり、状況によっては返信率に変化が生じる可能性が考えられる。既読率も内容によって反応に差が出ることも分かった。しかし、2回目の緊急性が高い内容でも既読しない人がいる点や、今回は配信し時間が経過してから既読率の集計を行ったが、実際緊急事態が発生した際、職員全員が早急に既読してもらえるような取り組みが必要だと考えた。また、今後の展開として、アンケート機能を活用して、職員の意向や状況等を調査・確認ができるような取り組みも行っていきたい。

### 【引用・参考文献】

なし



題名	「俺トイレさ行きたいんだ！」～寝たきりからトイレで排泄が出来るまでの取り組み～		
法人名	医療法人社団 湖聖会(宮城)	事業所名	介護老人保健施設はまなすの丘
発表者	阿部航大	共同研究者	佐藤鮎美 昆野秀俊
サービス種別	介護老人保健施設		

## I はじめに

入所後、ベッド上で衣類等の尿汚染や胃瘻チューブを外そうとする行為が絶えなかった。ある日、A氏本人から「トイレに行きたい」との発言をきっかけにA氏の希望に沿うよう、トイレでの排泄を目指す事となった。リハビリを通してトイレでの排泄がほぼ自力でできるようになった。その後、発熱しベッド上安静となり、トイレでの排泄は中止。体調回復後は意欲の低下見られ、次第に離床する機会が無くなった。再びベッド上でオムツや胃瘻チューブを外そうとするA氏の「トイレで排泄したい」との思いを汲み取り今一度、A氏本人と一緒にトイレでの排泄に取り組んだ。

## II 目的

A氏の希望に沿いながらトイレにて排泄できるように取り組む。

## III 方法

### 1. 研究期間

2022年5月15日～2022年6月5日

### 2. 研究対象

A氏 要介護度:5、寝たきり度:C2、認知症度:IV  
80歳代 主病名:脳梗塞(両側視床)胃瘻造設  
2022年1月31日、自宅自室にて意識を失っている所を家族が発見し入院となった。入院後も状態の回復は見られず2月28日に胃瘻造設。自宅での介護は難しい為、3月15日当施設入所となる。

### 3. 具体的方法

- 1) A氏に関するインシデントを積極的に上げ、職員間で情報共有しトイレでの排泄方法を検討する。
- 2) ユニット職員と理学療法士(Physical Therapist:以下PTとする)で連携し、A氏の離床時間を確保しトイレ誘導の機会を設ける。
- 3) 正しいトイレ動作の練習。

### 4. 評価尺

トイレでの排泄を増やす事によって衣類汚染が減ったか。「aams®」を利用し離床時間の変化を可視化する。

## IV 倫理的配慮

A氏の意味疎通が困難な為、身元引受人に研究の趣旨を説明し氏名や写真を使用しない条件で同意を得た。

## V 結果

インシデント報告書を提出することで尿感覚やその他の訴え等を汲むことが出来、離床するタイミングをみるきっかけとなっている。PTと連携することで安全に誘導することが可能となり、トイレで排泄する習慣をつける事によって便失禁が無くなった。トイレ誘導を再開した当初はトイレでの立ち上がりが困難で2人介助を要したが、トイレの練習を重ねるうちに立ち上がりのきっかけ作り、下衣類の上げ下ろし等軽介助で排泄が出来るようになった。職員間で情報共有する事で工夫や対策が生まれ、衣類等の尿汚染や胃瘻チューブを外そうとする行為が減り、ユニット職員が積極的離床やトイレ誘導に取り組むようになった。

「aams®」を使用することで職員全員が同じように離床することが出来ているか確認が取れるようになり、統一したケアに繋げる事が出来た。

## VI 考察

体調回復後、トイレでの排泄が上手にできるようになった矢先に再度発熱した為、体調を考慮して取り組みを途中で中断した。今回、この取り組みによって体力的に無理をさせていた可能性もあり。今後は日常生活動作の持続とトイレでの排泄が継続出来る様、A氏の意味を尊重し、尚且つ本人が気持ち良く生活を送れることができるように支援を行っていきたい。

### 【参考文献】

太田仁史 三好春樹, 新しい介護, 講談社, 2003年6月



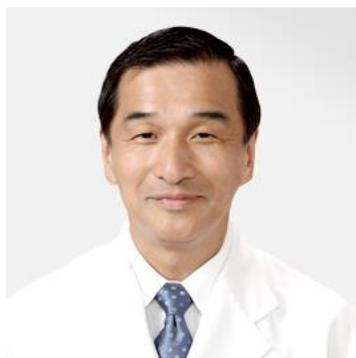
## 2022年度 チームケア学会 第2日目 プログラム

開催日 : 2022年9月14日(水)

時間	プログラム
9:00	受付開始
10:00	2日目 開会 社会福祉法人 狭山公樹会 佐々木 啓介
10:05	シンポジウム 座長・司会 一般社団法人 チームケア学会 理事 久保 明
10:10	「ケアプランの今日的課題と将来展望」～自分らしさを求めるために～ それぞれの立場からの発表と質疑 登壇者 樋口 まさみ (社会福祉法人 カメリア会) 山中 康代 (社会福祉法人 草加福祉会) 早坂 守弘 (社会福祉法人 カメリア会) 高橋 実穂 (社会福祉法人 大和会) 山本 未央 (医療法人財団 百葉の会)
11:20	全体質疑 15分
11:35	ケアプランとそれぞれの職種の役割について 一般社団法人 チームケア学会 代表理事 小松 順子
11:45	シンポジウムのまとめ 座長・司会 一般社団法人 チームケア学会 理事 久保 明
11:55	所感 湖山医療福祉グループ 代表 湖山 泰成
12:05	閉会挨拶 一般社団法人 チームケア学会 理事 太田 恵美
12:15	閉会 社会福祉法人 狭山公樹会 佐々木 啓介
12:25	事務連絡 特定非営利活動法人ヘルスケア・デザイン・ネットワーク 福原 正徳 2日目アンケート登録 ～全行程終了～

《 シンポジウム 》  
「ケアプランの今日的課題と将来展望」  
～自分らしさを求めるために～

## シンポジウム 座長・司会者紹介



座長・司会 : 久保 明 氏

医療法人財団百葉の会 銀座医院 院長補佐・抗加齢センター長  
東海大学医学部医学科 客員教授  
元 厚生労働省 薬事・食品衛生審議会専門委員  
日本抗加齢医学会評議員 日本総合健診学会審議員  
日本臨床栄養協会 副理事長  
一般社団法人チームケア学会 理事

## パネリスト紹介

○樋口まさみ (社会福祉法人カメラア会 特別養護老人ホーム渋谷区つばめの里・本町東)

内容： 家族

○山中 康代 (社会福祉法人草加福祉会 特別養護老人ホームフェリス)

内容： 介護支援専門員

○早坂 守弘 (社会福祉法人カメラア会 特別養護老人ホームカメラア藤沢 SST)

内容： 介護職

○高橋 実穂 (社会福祉法人大和会 特別養護老人ホーム愛生苑)

内容： 看護職

○山本 未央 (医療法人財団百葉の会 湖山リハビリテーション病院)

内容： リハビリ職











## 2022 チームケア学会

### あとがき

今年度のチームケア学会はいかがだったでしょうか？

1日目はWebによる95演題の事例発表、2日目はWebとリアルハイブリットによるシンポジウムと新たなかたちでの開催となりました。演題では感染症、看取り、教育、食事・栄養、業務改善、リハビリテーション、認知症ケアなど12種類のカテゴリーに分けさせて頂き、多岐に渡る発表となりました。感染症の対応や毎日の業務に追われながら研究の成果をまとめることは本当に大変だったと思います。また昨年度より開始しました査読では、委員会の方々、久保明理事、美ノ谷新子様に協力を得まして実施して頂き、より専門性の高い学会となりました。皆さまの努力のおかげで本学会は確実に歩んできております。

2日目のシンポジウムでは「ケアプランの今日的課題と将来展望」をテーマに5人の方にそれぞれの立場から提言を頂きました。パネリストの皆さまには率直な意見を頂き誠にありがとうございました。

今後も100年を生きるためにチームとして何を目指し、何を支援し、何を大切にするか、学会のテーマとして問い続け、考えていきたいと思っております。

新型コロナウイルス感染症の影響で今年も皆様と直接お会いすることは叶いませんでしたがたくさんの方のご協力があってこそこの学会が行われていることに深く感謝致します。来年こそは実際にお会いできることを願いあとがきとさせていただきます。

チームケア学会 代表理事 小松 順子

多摩成人病研究所（以下、研究所と略）は1967年設立、今年で55年の歴史を有する研究機関です。昨年（2021年）のチームケア学会より後援しています。

昨年も記載のとおり、研究所ではチームケア学会と研究活動をともに進めていくこととなり、当研究所はチーム医療、チームケアに関する研究に軸足を移していくこととしました。チームケア学会はこやまケアから発展、派生していること、また当研究所は成人病の研究からチームケアへ発展していくこととなります。今後は医療と介護の融合、医療（＝科学）と介護（＝文化）で生じるハイブリッドな医療介護のチームケアの態様について志向します。その成果については、チームケア学会、その他学会において発表しチームケア学会のますますの発展に貢献していきたいと思っております。

長引くコロナ禍。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、医療・介護業界においてもその対応に追われ、ワークスタイルの変革にまで影響を及ぼすこととなりました。ただ今年のコロナ禍は昨年度や一昨年度との違い、ワクチンが開発、治療薬も開発されたことにあります。このことにより少なくとも次々と発生する亜種への対応にあたっては恐れるだけではなく、“ウィズコロナ”としてコロナを制御することを具現化しなければならない年とも言えます。ただしウィズコロナだけではなく、アフターコロナに向けた変革は今こそ行わなければなりません。変革のシーズは待たないです。チームケア学会からの情報発信、研究活動とともに、あとがきにかえさせていただきます。

多摩成人病研究所 所長 湖山 泰成

## 2022 年度チームケア学会運営スタッフ

### 《こやまケア運営委員会》

#### ○執行部

医療法人財団 百葉の会	上野 忍	医療法人財団 百葉の会	佐藤 信一
株式会社 テイクオフ	戸田 茜	医療法人社団 ひがしの会	永田 康代
医療法人社団 平成会	田部 光行	株式会社 テイクオフ	内田 かつみ
社会福祉法人 苗場福祉会	南雲 未来	社会福祉法人 苗場福祉会	高橋 舞子
医療法人社団 湖聖会（東京）	大野 公士	社会福祉法人 カメリア会	池村 正樹
社会福祉法人 湖成会	遠藤 真由美	社会福祉法人 湖成会	齊藤 雄介
社会福祉法人 白山福祉会	矢萩 利文	株式会社 ライフアシスト	惠木 芳恵

#### ○エリア代表

（東北）株式会社 テイクオフ	戸田 茜	（首都圏A）社会福祉法人 白山福祉会	矢萩 利文
（首都圏B）社会福祉法人 カメリア会	池村 正樹	（中部）社会福祉法人 湖成会	齊藤 雄介
（西日本）株式会社 ライフアシスト	惠木 芳恵		

#### ○運営スタッフ

社会福祉法人 平成会	大堀 智弘	医療法人社団 緑愛会	鈴木 亜紀
株式会社 健康倶楽部	石部 勉	株式会社 健康倶楽部	柴田 直樹
株式会社 ケアハーモニー	倉持 富美江	株式会社 ケアハーモニー	氏家 靖浩
株式会社 ケアハーモニー	宮崎 智和	社会福祉法人 白山福祉会	山根 健治
社会福祉法人 狭山公樹会	佐々木 啓介	社会福祉法人 狭山公樹会	片平 隼人
医療法人 北辰会	今村 真澄	医療法人 北辰会	平野 尋美
医療法人社団 平成会	草野 祐美	社会福祉法人 平成会	城取 桂子
社会福祉法人 湖星会	二階堂 梨恵	社会福祉法人 湖星会	小澤 亜恵
社会福祉法人 湖星会	井澤 優	医療法人社団 湖聖会（宮城）	千葉 宏志
医療法人社団 湖聖会（宮城）	佐藤 隆	医療法人社団 緑愛会	佐藤 幸男
社会福祉法人 緑愛会	岡崎 雄一郎	社会福祉法人 緑愛会	小山 明美
株式会社 健康倶楽部	三浦 七恵	株式会社 健康倶楽部	山中 麻里
社会福祉法人 苗場福祉会	田中 勝人	社会福祉法人 草加福祉会	西澤 正康
社会福祉法人 草加福祉会	大坪 太一	社会福祉法人 狭山公樹会	有松 蘭
社会福祉法人 大和会	野際 雄一	社会福祉法人 大和会	講井 淳子
社会福祉法人 カメリア会	守屋 淳子	社会福祉法人 カメリア会	早坂 守弘
株式会社 日本ライフデザイン	宍倉 健一	株式会社 日本ライフデザイン	淡路 拓也
株式会社 スマイルパートナーズ	太平 隆史	社会福祉法人 百葉の会	齊藤 和稔
医療法人社団 藤友五幸会	梅村 典義	医療法人社団 藤友五幸会	開田 恭介
社会福祉法人 湖成会	村野 香	社会福祉法人 湖成会	荻野 伸子
医療法人 北辰会	青山 博昭	医療法人 北辰会	神戸 康成
医療法人社団 日翔会	永見 嘉子	社会福祉法人 日翔会	今倉 慎吾
医療法人社団 ひがしの会	神原 良治	医療法人社団 ひがしの会	山下 依久子
医療法人社団 水澄み会	斎藤 徹哉	社会福祉法人 水澄み会	永見 美恵

### 《チームケア学会》

（学会長） 小笠原 泰 （代表理事） 小松 順子 （理事） 原田 和美 太田 恵美 佐藤 信一 久保 明

### 《査読委員》

美ノ谷 新子 田部 光行 本多 さなえ 渡部 周子 高橋 舞子  
花城 久子 上總 広美 上野 忍 今村 真澄 高原 岳志

### 《多摩成人病研究所》

（所長） 湖山 泰成 （副所長） 香山 英司

### 《運営事務局》

特定非営利活動法人ヘルスケア・デザイン・ネットワーク 福原 正徳 平井 慶太 堀 彩芳 大倉 知子



チームケア学会

teamcare Society 2022



一般社団法人チームケア学会  
一般財団法人 愛生会 多摩成人病研究所